

骨太の子育て



フリースクール上田学園長
上田早苗
Sanae Ueda

骨太の子育へ

フリースクール上田学園長
上田早苗
Sanae Ueda



Honebuto no Kosodate
©Sanae Ueda

2001 Printed in Japan

メリハリをつけた愛情を注いでください

あなたは今までに、子供が嫌がるほど強くギュッと抱きしめたことがありますか？

幼少期の子供を抱えているご両親は、自分の子供を中途半端に抱きしめるのではなく、時折り、思い切って抱きしめてあげてください。子供が腕の中でじたばたしても、子供を包み込んだ腕を決して離さないでください。

親は子供に遠慮する必要はありません。愛情を示すときには思いっきり抱きしめる。叱らなければならないときには思いっきり叱る。一生懸命頑張ったときには思いっきりほめる。これが子育ての基本です。

子供に自信を与えて欲しいのです。「絶対、最後までお前達を見捨てない」という意思表示で「私には心から愛してくれる人がいる」という自信を与えてください。

愛情に満腹になった子供達は、自然と一人で歩き出します。「家族に支えられている」という自信を持った子供達は、自分のやりたいことを探し出します。子供を育てた親自身も、「やるだけやった」という満足感が得られれば、子供にしがみつくことなく、自分の道を求めるはずです。

逆説的に聞こえるかもしれませんが、「子供が嫌がるほど抱きしめる」ことは、親の自立、

子の自立を促す大きなカンフル剤なのです。

「急がば回れ」の格言通り、親がちょっと立ち止まり、子供にその年齢に合った愛情をタツプリ与えてあげる。これが子供が親から精神的にも経済的にも離れ、社会で逞しく自立していく本当の「近道」です。子供をギュッと抱きしめるのは、子供の成長を楽しみながら、自分の時間を子供に合わせて、ゆったりとした気持ちで子育てができるようになる考え方のヒントです。

日本という国が豊かになり、親が経済的なゆとりを持てるようになりました。子供の数が少なくなり、時間的なゆとりを持つて子供の面倒が見られるようになりました。しかし、そのゆとりが子供を苦しめる結果になるとは誰が予測したでしょうか。

子供時代はその時しかありません。一歳から二歳へ、二歳から三歳へとゆったり流れていく子供の時間。それを子供から取りあげてしまったのは、「自分の子供には」という親の過剰な愛情と期待です。何でも効率的に、という大人の時間の流れの中で子供を育ててしまった結果、世の中の歯車も歪んで動きだしてしまったようです。

早期教育をすることでひ弱な秀才は育つかも知れません。しかし、大人のペースでいろんな要求を課す早期教育なら、大多数の普通の子供には本来の「子供の時間」が失われるだけで、メリットはないはずです。

それよりは、その年齢、年齢でしっかりと愛情を注いであげることの方が大切です。それも頭で考えた愛情ではなく、むしろ心で感じる動物的な愛情で。

大事なのは、親御さんや子供をとりまく大人達や社会は、自分の生き方や生き様ぎさまをお手本サンプルとして子供にしっかり見せていくことだと思います。たとえば、「格好悪い親!」「格好悪い大人!」と思われようと、大人になれば、子供達はきちんと理解し、評価していきます。私達がそうだったように。

確かに、子育ては大変なものです。誰もが思った通りに育ってくれないと悩むものです。しかし、思った通りに行かなくて当たり前だと少し開き直ってみてください。親が「いいものはいいい」「正しい」と思うことをシンプルに伝えていけば必ず子供に伝わります。だから親は日々是ひびこれ自分で伝えることを実践していくことに尽きると思うのです。

巻末には対談という形で、「作家村上龍」を真摯しんしに生ききる村上龍さんと、「子供がよくなればそれでいいんですよ!」と子供の教育に専念する熱血陰山先生のご協力をいただきました。深く感謝申し上げます。

東京武蔵野、吉祥寺きちじょうじの小さな学校で書いた小さな本。少しでも何かのお役に立てばうれしいのですが。

まえがき メリハリをつけた愛情を注いでください

1章 背筋をピンと伸ばした親になる

1 子供のためにやっているのだから? 14

何気ないひと言から／相手のため、自分のため／子育てが生みだす支配、依存関係?／親自身の生き方をしっかりみせる

2 子育ての基準を持つとう 20

子育てが困難な時代／「自分の派」が立てられる人間／「遊び」ができない子供／その年齢の子供が一番似合う世界に

3 我が家の家訓作り 26

我が家の基準でずっと生きてきた／我が家版民主主義／変えるところと変えないところ

4 親が毅然とした姿勢を見せるとき 32

頼もしい隣人、素敵な子供達／本当の意味での親業／親の自立がまず先決

- 5 親の願望を子供に背負わせていませんか?……………38
エリートって?／「動物園に行きました。お猿さんが、ニコニコ笑っていました」
- 6 子供の成長を見守って……………42
日本人とスイス人のハーフ少年との出会い／プライベートレッスン／教え子との再会
／自立と子離れ
- 7 子供の心の健康を看る……………50
心のもつれを解きほぐす／忙しくても子供と触れ合う機会をつくる
- 8 親子ごっこはやめにして……………56
物分かりのいい親を持って幸せ?／優しさで現実世界を遮断する／頑固な親の復活を
- 9 親が子供に対し適切な距離をとる……………60
友達のように話せる親?／子供達は大人に本気で間違いを諫めてほしい／同等にはな
りえない上下関係／親と子に必要な距離感覚
- 二児の母から上田先生への手紙 1……………68

2章

自立するためにどう学ぶか

1 旗立てて一番前に行く人は誰?..... 70

あらゆるチャンスから学ぶ／修学旅行は誰のもの?／主役は生徒、脇役は先生

2 豊かさの弊害..... 76

あなたの夢、なんですか?／夢を持つために何でも与えることをやめる

3 無駄は人生の宝箱..... 82

無駄って何?／たった三〇分の効果的な総合学習／無駄の意味を取り違えている

4 学生の生きがい?..... 88

生きがいがないのでフリースクールでボランティアを.....／生きがいから遠く離れた子供達／「自分基準」をしっかりと築こう

5 失敗のススメ!..... 94

エリート学生と心療内科／挫折経験なく育つと.....／失敗は学びの宝庫

- 6 「とりあえず」はやめて! 100
「とりあえず」の進路決定、人生選択／「とりあえず」でやってはいけない仕事／フリースクールとひとくちに言っても……／フリースクールの先生はボランティア感覚では勤まらない
- 7 一番美味しい時 106
余韻を楽しめる人生を送っていますか?／大人は五分間の余裕を楽しもう
- 8 自分作りをせずに自分探しができる? 110
日々是発見／まず「自分作り」からはじまる／夢に出会える人になろう
- 9 現代の若者 114
育っている素敵な若者／若い人の可能性は大人の物差しでは計れない
- 10 子供達の節目、学校の節目 118
突然訪れる生徒の変化／子供達の意欲にスイッチが入る
- 二児の母から上田先生への手紙 2 124

3章 子育ての論点

1 好きなことを自由に学ぶ でも、苦手なことも楽しんで学ぶ……………

基礎学力がないと……／嫌いなことをしてはじめて好きなことも分かる

I26

2 本当の意味の「ゆとり教育」って？……………

I30

耳に心地よい言葉のビタミン剤／「素敵な生き様」が子供にパワーを与える／生徒の人数とゆとりの関係／ゆとりは教師のために／本当の「ゆとり教育」のもたらす効用

3 ボランティアはするもの、されるもの？……………

I38

受け入れ側に負担をかける奉仕／すべての奉仕活動はすなわち善になる？／袖触り合うも多生の縁／自分達がやれるところから

4 個性豊かな人間って？……………

I44

理想教育とは、個性を伸ばす教育とは／個性が輝き出す条件

5 開かれた学校?.....148

議論のピントがずれていませんか?／本質を見落としてはいけない

6 家庭の教育、学校の教育.....152

学校とのトラブル相談の電話のはずが.....／学校と家庭の境界線／二種類の愛情／自己責任の定着へ

二児の母から上田先生への手紙 3.....158

終章 対談

上田早苗×村上龍 「子育てと自立」.....160

二児の母から上田先生への手紙 4.....197

上田早苗×陰山英男 「小学校の現場から」.....198

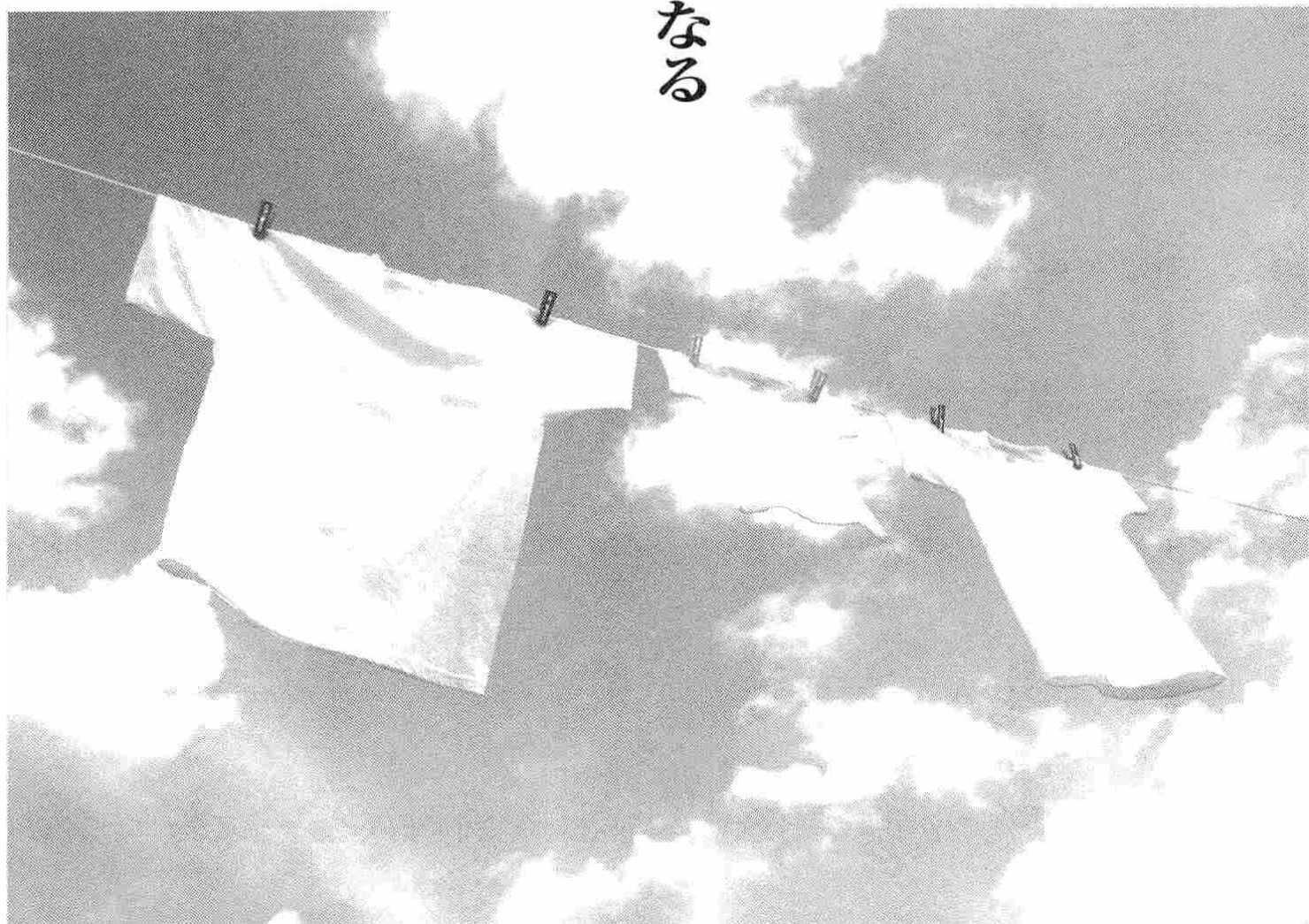
あとがき

「フリースクールのフリーとは責任と表裏一体をなすものです」

上田早苗

1章

背筋をピンと伸ばした親になる



1 子供のためにやっているのだから？

◆何気ないひと言から

「最近、自転車と接触して起こる自動車事故が多いような気がするんですがね」
信号無視で飛び出してきた自転車をよけたあと、タクシーの運転手はほっとした声で言う。

つい先日、私の学園がある吉祥寺中道商店街でも車と人の接触事故があった。どういう理由であれ、誰も事故を起こしたいとは思わないし、事故にあいたいとも思わない。でも、実際自分が歩いていても、自転車をこいでいても、車を運転していても、周囲への注意が散漫になり、自分のことしか考えていない一瞬がある。

「どんな理由であれ、車と自転車、車と歩行者との事故は、全部車を運転していた者が責任を取られますからね」と運転手は言う。

「それに夜、ランプを点けずに走っている自転車にはまいてしまいますよ。彼らは自転

車のランプは夜道を照らすためだけでなく、自分の存在を知らしめ、事故を防止するためであることに気が付かないんですかね？」

さすが、プロの運転手さん。運転手さんの何気ないひと言で、目から鱗だ。運転手さんの話を聞きながら、自分も含めて人間、何て愚かなのだろうかと考えてしまった。

世の中、見方を変えたら絶対違ったものが見えてくる。それもちよつと見方を変えればいいだけなのだが、それがなかなかできない。凡人の悲しさだ。

◆相手のため、自分のため

昔と違い、街路灯が発達し、暗い道が少なくなった。ノーライトで走っても自分はさほど困らない。しかし、反対から走ってくる人にとってはどうなのかと考えてみると、ライトをつけて自分の位置を知らせれば、相手は安心して走って来られる。そういう考え方がすぽと抜け落ちていくことに気付く。

相手のためになり、結果自分のためになる。こんな素敵なことはないのだが、そう考えられる人間は少ない。むしろ、ライトを点けると自転車をこぐのが重くなり、スピードが出せないからノーライトで走る。自分にとってのその場の「楽」を優先させるために、相手を困らせ、結果自分の命の危険にも繋がってしまう。

このように自己の都合で知らず知らず他人に迷惑をかけることは多いが、最も気付きにくく害があるのは、「相手のため」という大義名分たいぎめいぶんを掲げかかながら、それが自分のためにしかならないケースだ。

先日NHKで『学校に行かれない先生達』というテーマの番組を放送していた。私はこの手の番組はなるべく見ないことにしている。なぜかというと、先生方があまりに一生懸命なことが分かり、せつなくなるからだ。その時もちよつと見て、なんとも悲しい気持ちになってしまった。親も先生も一生懸命子供のためという大義名分のもと、子供に大迷惑をかけているように思えるからだ。

◆子育てが生みだす支配、依存関係？

親は子供のためを思つてと言ひ、先生は生徒のためにやったのと言ひ、生徒は友達のためだったと言ひ。

「相手のために」とは結局何だろう。結果本当に相手のためになっていたか。「相手のために」が弁解に、自己弁護になつてはいないだろうか。本当に相手の気持ちを思うなら、その場に応じて放っておくのも思いやりであり、何もしてあげないことも思いやりであるという事実気付いて欲しい。そして、自分のやっていることが「意外と自己満足の世界

かも知れない」ということにも。

では、自己満足の世界はいけなのか、というと、そうではない。自己満足は満足の原点。どんなことをしても見方を変えれば、基本は自己満足から始まっている。だから切手収集のような、影響が自分の範囲にしか及ばないときは、それでいい。

しかし、他人を巻き込むときは、ちよつと立ち止まって考えなければいけないと思う。きつとそれが思いやりなのだろう。

子供が「学校に行かない」と言い、親を困らせようとしている場合、親はどんな対応をすればいいだろう。結局、学校に行くか行かないかは、自分の人生に関わってくる問題だ。相手のために（親のため、先生のために）学校に行くのではない。自分が必要と思うから行くのだろう。親を説得し、学校を辞めて、自分の進みたい方向でしつかり^{たくま}生きていけるようにするくらいの気概が子供にあれば親はむしろ喜んでいい。高校を中退し単身渡米し、マイナーリーグからメジャーに這い上がったマック鈴木のような若者もいる。

だから、「お願い、ママのために学校に行ってね！」などとお願ひまでしてしまうのは愚^ぐの骨頂^{こつちよう}だ。学校とは、お願いされて行くところでも、お願いして行かせるところでもない。親は子供が学校に行かないと言っても、本当は困る必要はないのだ。

なぜ親は子供が学校に行かないと困るのだろう。おそらく自分の子供を他の子供達と同



じようにしたがる気持ちからではないだろうか。同じにしようとするあまり、隣の子供のサイズの合わない、似合わない服を我が子に着せこもうと躍起になる。

髪をふりみだして躍起になっている姿を、美しいと思う人はいない。子供もそんな親のようになりたいとは思わない。村上龍さんの行ったアンケートで、多くの中学生は「親を尊敬するが、親のように生きたくない」と答えたそうだ。この結果がすべてを物語っている。

親は子供のため、という大義名分で、自分が上手に時間を作れないこと、自分の人生の建て直しをしなければならぬこと等を先延ばしにしない方がいい。それが結果としてどれだけ子供の自立を妨げてしまうことか。

親が子供のケアという大義名分を通じて、知らず知らず子供を支配してしまう。「子供のためにやっている」という意識が強すぎて、親が自立できない。そうやって育てられた子供は自立する力を奪われてしまう。

引きこもりの息子をもつ家族の関係を描いた、村上龍さんの『最後の家族』では、親子がともに依存してしまう関係の弊害が指摘されていた。あとがきには「誰かを救うことで自分も救われる」というような常識がこの社会に蔓延しているが、その弊害は大きい。そういうった考え方は自立を阻害する場合がある」と。

◆親自身の生き方をしっかりみせる

もし親として時間がなければ、時間をつくることを楽しんだらいい。自宅から出て何かをする。それが不可能なら、自宅でできることを考え、それを楽しんだらいい。

その方が、どれだけ子供達は納得することか、救われることか。どれだけ、子供達の自立の励みになることか。思い通りにならないことの方が多いい世の中なのだから、その規制された中でどのように自由を楽しむのか、親が自分の生き方を通してしっかり見せたいいのではないか。

自身の生き方に対する無意識下の不満の捌け口はに子供を利用していいか省かえりみて欲しい。「子供のためにやっているんです！」と言われても、自分のできない夢を押し付けられた子供にとっては、たまったものではないから。

世の中、自分のためと欲ほってしていることが意外と人のためであつたり、人のためと思つてしていることが本当は自分のためであつたりする。それだけに、少し立ち止まって、「これは自分のためにしているのかな？ それとも人のためにしているのかな？ そして結果与える影響は？」と考かんえてみることも必要だ。

時には立ち止まって、ほんの少し見方を変えて率直に自分を振り返ってみませんか。子供達のためと信じてやっていることが、案外、自己満足に陥おちっていないか。

2 子育ての基準を持つとう

◆子育てが困難な時代

最近、全国各地からフリースクールの先生やフリースクールを経営したいという方々が訪ねて来てくれる。その方々から伺^{うかが}ってみると、全国各地のフリースクールにはいろんな特色がある。行政側のフリースクールへの対応も都道府県により、相当異なっており驚^{おどろ}かされる。そんな中、共通して困っているのではないかと思える現象があつた。

それは子供同士、本音^{ほんね}で話を^{あだ}する訓練ができておらず、表面的な付き合いだけが上手なことだ。そしてそれが徒^{あだ}となり、最終的に人間関係の躓^{つまず}きにつながっている。

親も様々な子育てのプレッシャーを受けているように見える。「児童虐待防止法」という法律ができたが、これは親が子供をしつけることと、虐待することの違いが見えなくなつてきている証拠だろうか。

かわいいから厳しく叱る、本当に大切な子供だから厳しく注意する、という当たり前のか

ことが揺らぎはじめている。そして現代の親達は子育てに対し、時に困難を感じ、自信をなくしかけ、不安になっているように思える。世間の非難は親に集中しがちだが、結局、親ばかりを責めても解決にはならない。

◆「自分の派^は」が立てられる人間

学園にも様々な親御さんからの問い合わせがある。まず聞かれるのはこの学園の位置づけだが、社会的な地位や肩書きを求める人に満足のいく答えが与えられるかは疑問だ。というのもここは学校法人ではないし、かといって、「塾」かといわれると「塾」でもない。あえて分類すれば、フリースクールに入るだろう。しかし、フリースクールといっても、大学検定試験や通信高校のサポート主体のところもあるし、場所だけを提供するフリースペース的なところもある。ひとくちにフリースクールと言っても千差万別^{せんさばんべつ}だ。

実はこの学園はそういったタイプのどこにも属^{ぞく}さないと思っているので、世間の定規^{じょうぎ}で説明するのは難しい。ただ高校のように時間割がはっきりしており、授業内容は大学と専門学校の中間で、九〇%以上の先生が自分の職業を持っていて、基礎学力を重視している。そして学生には、多様な生き方の選択をする自由はあるが、選択したことについての責任と義務も生ずると明確に説明している。

現在、中学生、高校生、大学生でも社会人でも、学園で勉強する受け入れ体制を整えている。知識や技能は、必要とする者に広く開放したい。先生方にはそれぞれ専門の分野で裏付けされた実績があるから、知りたい者には惜しまず提供する。

そこで年齢や知識に関係なく、知りたいことや気付かなかったことに目が開かれていく子供達がいる。しかし「勉強したい」と子供が興味を持っても、親御さんおやこの方で「学園で勉強するのは、うちの子には無理ですよ」と言って止めさせるケースもある。親としては資格が取れないことに不安を感じてしまうと言う。

私の学園がどうこうではなく、何かやることに興味を持ち始めている子供の変化に気付いてあげて欲しい。子供のやる気を削そがないで、と言いたい。

「うちの子に、そんなの無理ですよ」と言う前に、親の知らない子供の可能性を信じなくて是不なる。親は子供の可能性を完全に自分の定規じょうぎで測はかれる気になってはいけない。無理だと考えているのは、「あなた」であって、子供ではないことに気付いて欲しい。

昔の人は、「子供は授さづかり者。天からお預あずかりした子供達、立派に育てて世の中にお返しすることが親の義務」と言っていた。この立派りっぺという言葉の意味は、「派が立てられる」という意味ではないだろうか。それは特別有名になることでも、社会的な地位を得ることでもないと思う。自分で自分らしく、この世の中に「自分の流派」が立てられる人間になれば、

ということだと思う。

つまり、模試の偏差値や学校の成績といった狭い学力観ではなく、自分の意見をしっかりと持てるような自分の「派が立つ」子供に育っているかどうか、という基準で子供の成長を測ってみてはどうだろうか。時には、子供と向き合って改めて「対話」をすることです。

自分に意見があれば、人としてしっかりディスカッションができ、そこから学ぶこと、発展することがたくさんある。それが社会でしっかり骨太に生き抜いていく力になる。

◆「遊び」ができない子供

先日、三四年ぶりに友人に会った。彼女は小学校二年生の担任だという。その彼女が子供達が「遊び」ができないことが教育の現場で今一番問題になっていると話してくれた。子供達がどうやって他の人と一緒に遊んだらいいか分からない。そのために、低学年の先生方は「遊び方」を教えていると。

子供にとって、遊びは大切な「学びの場」だ。遊びながら、「こんなことをすると嫌われるのだな」「どうして上手く負かせられなかったのかな」「この友達を説得するには、こうしないと駄目なのだな」などと、あの小さな可愛い頭で疑問を持ち、情報を集め、答えを出そうとする。「相手に納得のいくように自分の気持ちを伝える」という、人間社会で生

活する方法も体得していく。その遊びができないということは、「学ぶ」ことができなくても仕方がない。

教師も親も「机」という場所で時間を費やすことを「学ぶ」ことだと勘違いしていないだろうか。そして、ただただ「机に向かって勉強しなさい！」に終始する。机に向かうという習慣は悪くはないが、それ以前に学ぶ心ができていない子供が疑問を持つことはない。疑問を持つことのない子供が、解決する楽しみや、答えを見つけ出す楽しみが持てないのは当たり前。そんな子供が、ただ親の言う通りに勉強をしても、それは単に強く勉めただけで、興味があつて学んだのではない。だから飽きるし、つまらないので勉強が嫌いになってしまう。そんなトラウマをつくらないようにしたい。

◆その年齢の子供が一番似合う世界に

人間が成長する上で、絶対できないことがある。それは、一年一年としか歳を重ねられないということだ。飛び級ならぬ飛び歳はどんなに優れた人にも不可能だ。私達大人は、子供が一歳、二歳と歳を重ねていくとき、その歳にあった対応をしていくべきではないだろうか。五歳という年齢は子供の生涯で一回しかない。無理に大人扱いすることはない。五歳としてのその子供を尊敬し、受け入れ、対応するべきではないのか。子供を取り巻く

大人達にそういう考えがあれば、子供は子供の世界の学びの場で、遊びの中から、人間として生きる基礎を学んでいくのではないか。

遊びができない子供というと、「テレビのある生活が悪い！」とか、「ゲームが子供に悪影響を与えている」と責めたくなる。しかし、何かを悪者にして解決する問題ではない。

自分にとって不必要な物や、悪い物、悪い人間は世の中にも多い。その中でも逞しく骨太に生きていかなければならない。だからこそ、テレビが悪い、ゲームが悪いと言う前に、自分にとって悪いものを「選択しない力」を子供につけさせるようにしよう。

そのために、まず親自身が自分の価値観をしっかりと持つ。たとえ子供に「他のうちでは皆やっているよ！」と抗議されても、「こういう理由で、うちではやりません！」という、しっかりとした根拠こんきよを。

三四年振りに会った友人の話聞きながら、つくづく私達大人は、理屈で考える教育ではなく、その年齢の子供が一番似合う世界にすることを大切にしてあげる教育をしたいと思った。将来のためとはいえ、夜遅く小さい子供が眠そうな目をして塾の鞆かばんを背負ってバスに乗っている図より、可愛い顔をして安心しきってベットで寝ている図の方が、ずっと似合うと思うときは、その思う心を優先しよう。そんなふう子供がゆったり育つように、大人達は子供を本当の意味で大切に育てていきたいものだ。

3 我が家の家訓作り

◆我が家の基準でずっと生きてきた

時代が変わり、「個人主義を大切にする」「便利な生活をする」などという美名びめいのもとに、親から子へと伝えるものが減り、なくなってきた気がする。親から子へ伝えるものがなくなるということは、誰に育てられてもいい（育てられなくてもいい？）ということだ。洗濯や食事の世話だけならロボットにしてもらえば、と思えるほどに、現在の親子関係は無味乾燥むみかんそうになっているように思える。

しかし、実際には、親から子に伝えられた生活の仕方、生活の知恵等が、何かしら本人の自己形成に影響を及ぼしているはずだ。それを思うと、現代ほど「我が家の家訓かくん」作りが必要な時代はないのではないか。

私は現在、九四歳と八九歳の両親と生活している。現在までの生活基準はやはり、『上田

家の家訓』を元にしてきている。

そう、我が家の家訓どおりに生きてきた。

親子兄弟仲良く。友達とは、困っているとき側そばに居て助けてあげ、友達が幸せで華やかはななときは、別に遠くに居てもいい。悪いことでお金を儲けるのはいけないが、仕事には貴賤きせんはない。どんな仕事でお金を儲けてもいい。でも、そのお金をどのように遣うつかかで、人間としての価値が決まる。親がどんなに偉い人えらでも、それと子供とは関係ない。子供が努力して親が偉くなったのではない。その子供は単に偉い人の子供でしかない、等々。

我が家の家訓は、家訓と言いがたいほど当たり前のことばかりだった。だが、しっかりと叩き込まれたように思う。また、実際親達はそれを実践した。

今でも思い出すのは、兄が結婚するとき母からこんこんと諭さとされていた言葉だ。

「上田の家は親子、兄弟仲良くを一番大切にしてきた家です。私も上田のお婆様から大切にされて来ました。あなたも大切に育てられたお嬢さんじょうさんをいただくのだから、大切にしなければ」

そして、初めて挨拶あいさつに来た姉に向かって、「秀子さん、いつまでも若若しく綺麗きれいでいなさいね」と言って、「恥ずかしいから止めて!」という私達の意見を無視し、母はおもむろにズボンに履き替え、これをすれば若くいられると信じている体操をその場で実践してみせ

た。

実際母は姉達を一度も「義理の娘」とか「嫁」という言葉で呼んだことがない。いつも「我が家の長女が、次女が」と呼び、気がついたら私は三女になり、何を買ってもらうのも三番目になっていた。

◆我が家版民主主義

我が家の家訓といえば、皆で納得して決めるという家庭版、民主主義の決まりがあった。小さいときの我が家は本当に貧しかったのだが、日本中が貧しかったせい、我が家が貧しいとは長い間、兄弟の誰もが気付かなかった。また、両親もまったくそれを感じさせないように育ててくれた。いや、むしろ貧しいことを楽しませてくれた。

ここからは大人の話、ここからは子供の話と、厳しく境界線は引かれていたが、しかし小さいときの我が家は、本当に「民主主義」だった。

給料日に父が差し出した給料袋を、「おつかれさまでした。ありがとうございます」と言いながら母が押しいただいた後、何か買わなければいけない物があると、たとえそれがコンロであっても、全員でどんなのを買おうかと話し合ったり、お店にコンロを見に行った

り、パンフレットを集めたりして検討した。そうして、どのコンロを買うのかが決まると、母が「それでは皆で耐乏生活（たいぼうせいふく）をしましょう！」と言って、コンロを買うお金が貯（た）まるまで、贅沢（ぜいたく）はしないように我慢（がまん）した。

またあるときは、「お父様は要（い）らないっておっしゃるけど、お父様の背広（せびろ）が古くなったので、お父様に新しい背広を買っていただきましょう」と言う母の言葉でまた、どんな背広（せびろ）が父に一番似合うか家族中で話し合い、お店に見に出かけた。そして買う背広が決まると、母が「皆で耐乏生活（たいぼうせいふく）しましょう！」と号令（ごうれい）をかけ、私達は欲しい物があっても我慢（がまん）するよう（う）にしていた。

我が家の買物のあらゆるものが、こうやって我が家にやって来た。

後年父（こうねん）の写真を見ながら、こんな野暮（やぼ）ったい背広（せびろ）を買うために皆で耐乏生活（たいぼうせいふく）をしたんだ（んだ）と思ったが、母の説明で、あの時にできる最高の値段の買物だったことを知った。子供（こども）だった頃は理解できなかった親達のいろんな苦勞（くろう）がよく理解できるようになり、「大変（たいへん）だったろうな」と感謝（かんしゃ）した。

コンロや背広等、耐乏生活（たいぼうせいふく）をして買った物を家に持ち帰り、皆で箱を開けて見たときのことや、皆でファッションショーのように着て見せ合ったときのうれしかったことは、今（いま）でも思い出（おも）い出すことができる。

父は昨日、入れ歯をどこかに置き忘れたと、家中を捜しまわっていた。食べることがメイン・ジョブになっている今の父にとっては大事件だったようで、とても悲しそうな顔をしていた。

社会的に高い地位に就くことが成功というのであれば、父は社会的には決して成功した人ではないかもしれない。八四歳で人生最後の仕事を終えたが、それは、朝六時から午後三時まで、武蔵野市の自転車整備をする整備員の仕事であった。しかし、満州から引き揚げてきて、子供を食べさせるためにガードマンとして就職しているときも、整備員として働いているときも、父の穏やかさに慰められたと言って、わざわざお礼を言いに来て下さった方が何人もいた。

社会的に成功できるかできないかは、努力だけでは解決できない大きなものがあると思うが、父はいつも穏やかに自分の道を真摯に歩いていた。そんな父を見て、父以上に活躍している兄達が父を尊敬し、慈しんでいる。

人には人の歩みのテンポがあると思う。社会的に成功するかしないかは別にして、学園の生徒達には、自分のテンポでしっかり人生を歩んで欲しいと思う。そのために、自分には何が不足しているのか。何ができないのか。そのために、何を身につけたらいいのかを、しっかり理解できる人間になって欲しいと思う。

◆変えるところと変えないところと

かねがね、「人」は「生き物（なまもの）」だから、この「人」が作っている家庭・学校・会社という集団は、同じことを教えるにも、同じことをやるのにも、その時々で、そこにいる人達に合わせよりよく必要な変化をさせていくべきだ。そして、与えられた環境や条件を嘆くのではなく、むしろそれを逆手にとつて、皆で楽しんだらいいと思う。

変わることを怠ると、永年の溜まり水で、水が濁り腐つてしまうのと同じ現象が起こるのではないだろうか。その上、環境や条件不足を理由に嘆いていたら、まるで負け犬の遠吠えのように聞こえる。だから、学園も足りない諸条件を楽しみ、一方で核になる変わらない部分、不易流行の部分^{ふえきりゅうこう}を伝えながら、その時々^{とこ}の学生に合わせ改革するよう心がけている。流行りの言葉ではないが「時にはその改革が痛みを伴うものであっても」。

時代の雰囲気が変わっても、人間の深いところにある本質や価値までがまるつきり変わってしまうわけではない。上澄みに惑わされる必要はない。従来の雇用形態や働き方が変革している時代、時には自信を失いかけ、目標を見出せないこともあるだろう。しかし、家庭でも、いいものは残す、変えるべきところは変える、というようにきちんと取捨選択^{しゆしや}の基準を、しっかり子供達に見せていきたい。

4 親が毅然とした姿勢を見せるとき

◆頼もしい隣人、素敵な子供達

「こらっ！ そんなところを汚したら近所の皆さんにご迷惑をかけるじゃないか！」

どこからともなく聞こえてくる、元気なお母さんの子供達を叱る声。

私の住む家の近くに元気なお母さんがいる。

彼女は小学校高学年と低学年の男の子を持つ若いお母さん。男の子ばかりを持ったお母さんの宿命か、非常にサバサバした方だが、子供達を叱る言葉とは裏腹に、本当に礼儀正しく、心根は天下一品である。

彼女の子供の叱り方は徹底している。中途半端ではない。

親として子供に言わなければならないことは、遠慮せずしっかりと言っている。だから、真っ直ぐなとてもいい子達に育っているのだと思う。決して大人の顔色を見ながら、大人が喜びそうなことを言う現代風の「いい子供」ではなく、従来の子供らしい子供だ。だか

らお母さんが叱ったり、注意したりする声が聞こえてくると、思わず「ごもつとも、ごもつとも。お母さん頑張れ！」と心の中で応援歌エールを送ったものだ。

最近、お母さんの叱ったり注意したりする声とともに、子供達が理屈でお母さんに対抗する声が聞こえてくるようになった。まさに子供がしっかり成長している証あかし。「頭を使った」対抗たいこうのしかたなのだ。

あの小さな頭で一生懸命考えたのだろう。イッパシの理屈をこねて対抗している声が聞こえてきたとき、思わず笑いがこみあげてきて、今度は彼らにエールを送りたくなっただけだ。

そして、子供の挑戦を受けたお母さんも、前以上にさらにしっかりした理屈で、真正面から子供に対抗している。親として言わなければいけないことや、注意しなければいけないことを納得させながら教えている。

「お前達が大人になって困るからお母さんは言うんだ。親として当たり前。お前達の親なんだから。人に迷惑をかけない人間にならないといけないからだ」と。

私の学校には色々な電話がかかってくる。その中で一番多いのが、名前も名のらず、血を吸う前の蚊がやつと鳴いているような声で、「あの、すみません。子供が学校に行くのがいやだと言ってふて寝しているんですけれど、どうしましょうか？」と他人ひと事のように言

うお母さんだ。

◆本当の意味での親業

「失礼ですが、お名前は？」「お子さんは何歳ですか？」という私の質問を無視して、「困っているんです。子供は親の目から見ると、とても優しくいい子供なんですが。どうしたらいいんでしょうか？」と一方的に優しい声の主は話し続ける。

「子供に厳しく注意して、もし外で悪いことでもしたら困りますし、どうしましょうか？」話が終わった頃を見計らって、「お母さんは、子供さんをどうなさりたいんですか」と質問すると、「せめて高校くらい出ておいて欲しいのですが、いやなんでしょうか？」と反対に私に質問してくる。そして最後に、「あまり子供に言いすぎて子供の心が傷ついたら困ると思って、何も言えないんです。子供に何か言ってもらえるとありがたいんですが……」と言う。

私はこの「せめて」「くらい」「して欲しい」というフレーズを聞く度に、二一世紀に生きなければならない子供達の親として、「未だにこんなことを言っているけど、この親御さんには世の中の流れが見えないのかしら？」と、何だか淋しくなる。

そしてふっと近所の逞しいお母さんの大声を思い出し、時代がいくら変わろうと、「いい

もの」は絶対「いいもの」であり、「親」は絶対「親」なんだけど。もしアメリカのような「お母さんコンテスト」があったら、私は絶対この元気お母さんを推薦すいせんするだろう。

現在は、教育的見地けんちから子供を「馬鹿ばか」呼ばわりしたり、叱ったり、叩たたいたりしたらいけないと言う。でも本当にそうなのだろうか。

今巷ちまたを騒さわがしている「虐待さやくたい」と、親が「躰しつけ」で叩くことは決して同じではない。その区別もつけられない大人達や知識人が多い。

「馬鹿ばか、まだ分かんないの？ 駄目駄目は駄目。それはお父さんに聞いてみてからでないと駄目なんだってば」と元気なお母さんの声を聞きながら、本当に素直ないい子供に育っているお子さん達を見るにつけ、「叱ったり注意したりしても、厳しいだけじゃない。しっかりフォローして納得させているしな……」と、本当の意味で親業おやぎょうをしつかりやっている親と、物分かりのいい親を演じている親の違いを、元気なお母さんから感じてしまう。

近所の元気なお母さんは、子供達と一緒に花を育てたり、猫用の「おしっこよけボトル」を作ったり、夜空の綺麗きれいなときにはお父さんも一緒に、家族中で夜空を見上げて星の話をしたりしている。そして、「おはようございます。ありがとうございます」と近所の草取りもくもくを黙々もくもくとしている私の母に大きな声で挨拶あいさつをしてくださる。だから、子供達も同じように大きな声で挨拶しながら、うちの母の横を通り過ぎて行く。

◆親の自立がまず先決

現在ほど、「日本語」が本当に日本人の「共通言語」かな、と心配になるほど、世代間、個人間の意思が通じなくなっている時代はないのではないか。そして、親が子供にこんなに遠慮^{えんりょ}して生きている時代もないのではないか。子供達に気を遣い^{つか}、あたかもガラス細工^{ざいく}をいじるように取り扱っているのを見ると、子供が本当にかわいそうになる。

気を遣う以前に子供は親が想像している以上に逞しいことを知るべきだ。子供というものは、本来自分で上手く説明できなくとも、何かあったとき、心から頼れ、心から信頼できる自分の保護者として親がいれば、家庭からまた立ち直るだけの力を手に入れられるものだ。それを自分の顔色を見て恐る^{おそ}恐る気を遣いながら、本心と思えない意見を自分の顔も見ないようにして言うのでは、「親の自立がまず先決」と言いたくなる。

親も教師も、子供を取り巻く大人達も「神様」ではない。間違えることもあるし、失敗することもあるし、誤解することもある。だからと言って、今一生懸命考えて、「正しい」と思える意見を子供にぶつけないということは、人間社会の構成員の一員である子供達に失礼^{しつれい}だ。

親も含めて、子供達を取り巻く大人達はいつの時代も子供達の生きたお手本^{サンプル}である。それだけに、一生懸命子供達と付き合うべきだし、子供達の先を生きている者として、間違

えたら勇氣を持つて訂正^{ていせい}し、謝り、前進していく姿を正々堂々^{せいせいどうどう}と見せるべきだと思う。たとえ子供達に反抗^{はんこう}されても、信じていることはしつかりぶつけていくべきだ。

世の中、表面的な物分かりのいい親を演じたがる親が増え、その被害^{ひがい}を子供達が正面から受けてしまっている。でも、真剣に子供の将来を考えるのであれば、自分の信ずる意見ははっきり言うべきだし、時に実行^{じっぎん}させるべきだ。

物分かりのいい親はなぜ増えてきたのか。子供とぶつかりたくないから、嫌われたくないから？ 私は極端な話、「教師は嫌われてなんぼ」であると思っている。一〇年、二〇年後、あるいは永久に感謝されないかもしれないけれど、それでも正しいと思うことをやるべきだと思ってきた。

「お母さん、ご飯を食べてから水をあげていい？」

「何言ってるの！ 人間がしっかり世話をしてあげないと草花はこの暑さで枯^かれてしまうんだからね。お前は足があるから自分で水を飲みに行けるけど、お花はそうはいかないんだよ。自分の食べる前にやりな。涼^{すず}しいうちでないとお水はやってはいけないよ、わかった？」

今日も朝から、元気なお母さんの声が聞こえてきた。その元気なお母さんの声になんとかほっとして、「今日も一日頑張って仕事しなきゃ」と思わず呟^{つぶや}いていた。

5 親の願望を子供に背負わせていませんか？

◆エリートって？

「先生！ 日曜日、パパとママと動物園に行ってきたんだよ」

満面に楽しかった日曜日の余韻を残した笑顔と、ポンポン弾んだ声^{はず}が、机に乘せられた彼女の日記と一緒に、私の心を幸せな気持ちにしてくれた。

あれから二〇年以上の歳月が過ぎた。

両親共に博士^{ドクター}のタイトルを持つ彼女の親は、当然のようにそれに相応^{ふさわ}しい学校での評価を彼女に期待し、それに答えようと彼女も随分^{ずいぶん}苦勞^{くろう}していた。そしてその努力が現実に追いついていけなくなると、どうにもならずカンニングをした。

その都度^{つど}、「カンニングしなくていいのよ。テストはあなたのためにあるのではなく、先生のためにあるのだから。先生が生徒にどれだけ上手に教えられたかを知るためのものだから、もし悪い点数をとっても、それはあなたが悪いんじゃないくて、上田先生が悪いの。

教え方が悪かったのだから、先生もう一度、どうやったら皆が理解できるか、一生懸命教え方を考えてみるからね」と言った。

「お猿さんがニコニコしていたの？ よかったね」

私の両手を取って覗き込んだ彼女の目のあまりの愛らしさに、思わずしっかりと抱きしめなくなった。あの可愛かった子も、もう二〇歳近くなる。

親の期待に添えなかった彼女は、母親が世間体を取り繕っている中、今でも遠回り遠回りしながら生きているという。そして、そんな彼女を父親は自分の世界には存在しなかったかのように振る舞っているという。

高学歴とは何なのか。エリートとは何なのか。

大学の数も少なく、「先生」と呼ばれる人達からしか知識が入手できなかった時代、高学歴者は大変貴重だった。だから高学歴で知識のある人は教えを乞われた。その代価に見合った生活が保証され、「エリート」と呼ばれ尊敬されていた。また、事実、尊敬されるに値する知識を携えていたので、「さすが、学士様は違う」と感心されていたのを記憶している。エリートにはなれなかった親達や偶然エリートになった親達が、自分の子供や孫に対し、高学歴者になって欲しいと夢を持つようになった。「天然エリート」ではなく、「養殖エリ

ート」を育て始めた。

その需要に応え、「塾」という名前の「養殖エリート養成所」が沢山^{たくさん}でき、養殖エリートが乱造^{らんぞう}されるようになった。愚かな知恵により、知識という粉^{こな}を薄く^{うす}ふりかけた、一見エリート風の似非^{えせ}エリートができ上がった。知識を知恵に変えられず、消化できない知識につぶされている似非^{えせ}エリート達。人間としての一番大切な心や、その心を育てる場であるはずの家庭までが、安らぎからはほど遠い場所になってしまった。

◆「動物園に行きました。お猿さんが、ニコニコ笑っていました」

子供の塾通いやお稽古事^{けいこごと}、学校のブランド名や成績のことに一喜一憂^{いつきいちゆう}せず、風が運んでくる花の香りを楽しんだり、時間も忘れて声を嗶^からして友達と遊びまわる。子供らしい心で何ごとにも興味を持ち、それに一生懸命ぶつかっていくような子供。勉強はいまいちだけど、子供の心が年齢とともに豊かになり、家庭に笑い声が絶えない。そういうことに感謝しながら過ごしている親が、現在どのくらい存在しているのだろうか。

エリートにならなかった子供を拒否^{きよひ}し、存在しなかったように振る舞う親。「国立大学以外は大学じゃない」と言いきる親。家庭の中を流れている冷たい川。その川を長い間漂い^{ただよ}、社会人になっても冷たい川の中から這い^はい出せない子供。

こういった状況を見ると、いったい親子の関係とは？ 人の幸福とは？ 生きる価値とは？ そんなことを考えさせられる。

たった一回しかない人生の親子という関係を、淋しく冷たい関係にしてしまっている原因に気付けないのだろうか。両親と一緒に大好きな動物園を訪れ、うれしい気持ちを「お猿さんが、ニコニコ笑っていました」と表現していたあの可愛い子供の心。それを三〇歳近くになった今でも曇らせ、苦しませ続けている「学歴至上主義」の親達。そんな親達にこう言いたい。

「あなたが頑なに信じてきた固定観念によって、あなたの子供の顔が曇っていることに気付きませんか。あなたの考え方が狭かったと気付き、考え方をちよつと変えてみる勇氣を持てば、あなたにとって一番大切な子供が救われると気付いて下さい。あなたの子供は、あなたから生まれましたが、あなたではありません。思い通りにならなくとも、子供はやがて大きくなり自分自身で道を切り開くのです」

私は彼女の家族ではない。一人の教育者でしかなく、彼女の人生に関わるには限界がある。しかし、これ以上このような悲しい親子関係を築かないために、ちよつとご自身の家族関係を振り返ってみていただきたい。あなたより何十年も長く生きなければならぬ大切な子供達のために。

6 子供の成長を見守って

◆日本人とスイス人のハーフ少年との出会い

「久しぶりに家族と一緒に日本へ行きます。是非先生と会いたいので、先生、ご連絡を下さい。ハンスより」

こんなFAXがスイスから飛び込んできた。

「ハンスが来る！ ハンスが来る！」とうれしさのあまり、そのFAXを手思わず叫んでしまった。

私は教師になって二十年以上経つ。その間、いつも自分に言い聞かせていることがある。それは、

- ①生徒の未来の可能性を自分基準の短い物差しでは絶対計らないこと（決めつけないこと）
- ②生徒とは、年齢・性別・貧富の差・勉強ができる、できないに関係なく、平等につきあうこと

③どんな状況においても、上田先生はいつも上田早苗らしくあること

④生徒との出会いは、長い人生のほんの一瞬いっしゅんの出来事であるかもしれないが、この一瞬が彼等の人生の基礎になるのだから、何時いつも真摯しんしな態度で、できる限り工夫した授業をし、その場限りの手抜き授業はしないこと

⑤生徒が自分で楽しんで勉強を始めたら、教師の仕事の七〇％は終了。残りの三〇％で生徒達と一緒にいられることに感謝しつつ、一日も早く、先生が一〇〇％不要になるように導いていく。ゆめゆめ「彼は私の教え子です」と言っ、彼らにつきまとうようなことはしないこと、などだ。

こんなことを常に自分に言い聞かせ、心がけている。しかし、何時も心にかかっている例外が二人いる。彼はこのうちの一人だ。「元気でやっているだろうか」と彼をいつも心のどこかで心配し、彼に関する情報が入ると、一生懸命それに耳を傾かたむけた。

父親が日本人で母親がスイス人というダブルカルチャーの彼とは、スイスの日本人学校で出会った。しかも私が最初に教えた小学校一年クラスの「問題児」として。

父親は大学の助教授。両親の仲もあまりよくないようであった。その上、日本語もドイツ語も中途半端で、スイスの学校にも日本人学校にも馴染なじむことができず、その鬱憤うっぷんをはらすかのように悪さをしていた。その悪戯いたづらのひどさと日本語力の問題で、他の生徒の足を

引つ張るといふ危惧きぐから、二年生には進級させるが、日本人の誰かにプライベートレッスンをしてもらい、クラスについていかせるようにしようという案が、校長先生から出された。そして色々な条件を考慮こうりよした結果、プライベートレッスンの適任者てきにんしゃに私が指名された。それから二年半、週一回日本人学校に行く前、私の家か彼の家で勉強し、それが終わってから一緒に日本人学校に通う生活が始まった。

彼の上には異夫兄がおり、ちょうど反抗期の一四歳位だった。兄弟仲は普通であつたが、日本人の私を見るときの兄の目は冷たく、その冷たさが当時の彼の淋しささびを表しているようであつた。またその冷たい目が、半分日本人である弟の言動にも関係しているように思えた。私はできるかぎり一四歳の兄と話すチャンスを見つけ、拙いつたなドイツ語で一生懸命会話をした。

◆プライベートレッスン

そんなチャンスが何回か訪れた後、目が合うと一四歳のお兄さんの顔に時々笑みえがこぼれるようになった。それにつれて弟の反抗的な態度も少しずつ和らいでゆき、一緒に通う市電の中で、お年寄りに黙だまって席をゆずったり、困っている人に手を差し伸べたりと、これこそ彼の本来の姿なのだというような微笑ほほえましい出来事を、垣間かいま見ることも多くなった。

父親は口下手だが心根の優しい方で、日本人留学生の心の支えになっていることや、スイス人の母親も、色々な日本人のために骨を折ることをまったくいとわないし、とても善良な方だということも、その頃に分ってきた。しかし、幼い彼にはそれが理解できず이었다。

彼は自分が日本人だかスイス人だか分からないアイデンティティーの不安を抱えていた。また、彼が言葉の問題から起こる学業不振と、その心の悩みが誰にも理解されないことの寂しさがあり、自分の居場所を探して喘いでいることも分かってきた。

私はプライベートレッスンの内容を百八〇度方向転換させた。

レッスン中、私は折にふれ、彼の父親と母親が立派な人物であることを伝えるようにした。「お父さんは日本で一番いいと言われる大学の先生をされているんだよ」「お母さんは日本人留学生に心から慕われているのよ」。こうした話を取り入れていった。

そして、彼も御両親のよいところを全部引き継いでいて、心根は他の人の何十倍も優しいと思えることや、私も一生懸命勉強してドイツ語の学校に行くのに、上手にドイツ語が話せず、ドイツ人の先生に馬鹿にされ、悔しくてトイレで何度も泣いたことなどを話して聞かせた。

また勉強ができるのも素晴らしいが、人間が優しいことの方がもっと大切だと思う私の

意見も、例をあげ話して聞かせた。しかし、これは納得できないと思う卑怯な振る舞いと、嘘をつくことに關しては常に厳しく諭し、それでも分からない時は、心を鬼にして叩いた。いつからか、「先生、今日お仕事がないの？　じゃ、もつとここに居てもいい？」と私の仕事のないときは、家の片づけを手伝い、私の側の椅子や台所の椅子に座って、スイスの学校の話や、友達や家族のことを話してくれるようになっていった。そして、すでに日本に帰国していた父親から送られてくる「中学校の科学」という雑誌を持参して質問し、科学音痴の私を悩ませた反面、彼の頭の良さに「すごい、すごい！」と感嘆せずにはいられなかった。

◆教え子との再会

「先生、ロスは暖かくていいですね」と、清々しい若者になって、私の転勤地であるロスアンゼルスに訪ねてくれたのは、彼が一八歳になったときだった。

「イタリア美術が好きなので、バチカンの衛兵になってイタリアに住むか、郵便屋さんになろうかと考えています」

「郵便屋さん？」

「そう、郵便屋さん」

こんな話を交わしながら、彼の母親の友人が住む隣街となりまちに向かって車を走らせている私の横で、方向音痴の私を氣遣ってナビゲートしてくれる彼の横顔に、過ぎていく時間の早さを改めて感じていた。

彼はその後、専門学校を卒業し、機械の製図を引く仕事を始めたことや、両親が離婚したこと、かつては反抗期だったお兄さんが結婚したことなどが噂話うわさばなしで伝わってきていた。そして、久しぶりにスイスに行った際、彼の母親から、「私を非難ひなんして家に寄りつかなくなつたのよ。先生、息子に会って下さい」と、彼の新しい連絡場所が知らされた。

「先生、僕、二九歳になりました」

電話の向こうで、明るい声が返ってきた。コンピュータの仕事を辞め、福祉の勉強のため再度学校に通っているという彼に、「あなたは本当に優しいよい子だったもの、福祉の仕事はあなたに一番合うと思うわ。先生、転職大賛成よ」と、ほっと胸をなでおろしながら言っただけを覚えている。

あんなに小さかった彼が二九歳になったことに、驚きと感嘆かんだんと何とも説明できないうれしさで、「今度来るときは、絶対会おうね」と約束して電話をきった。それから一年後、「エイズで末期になった若者達の面倒を、寝食しんしょくを共にしながらお世話をするという組織で働いています」と、一八歳の時よりもっと素敵な男性になって自宅を訪ねてくれた。

◆自立と子離れ

「今、僕はスイスの有名な時計屋で仕事をしています。そこに先生の知り合いの方もいて、先生のことがよく話題に出ます。先生に会いたいです」と、三四歳になった彼はFAXの中で、また転職をしたことを告げている。「仕事の内容は結構厳しいです。でも、人に頼られて、人のために生きることが、とても自分に合っていると思います」と言っていたのに、彼に何が起こったのかと、ドイツ語で書かれた手紙を読み続けた。

「最後に先生とお会いしてから五年経ちました。その間、僕は結婚しました」

「驚いた！ 彼は結婚したんだ」と思った瞬間、「ウワー！」とうれしさのあまり大声をあげたくなった。彼の味方になり、彼を支えてくれる人ができた。名前からするとスイス人だろう。どんな方かは分からないけれど、私は彼女に会ったら、ただ「ダンケ！ ダンケ！」とだけ連呼することだろう。どんな仕事をしようと、どんな生き方をしようと構わない。今の彼には、彼を必要とし、彼を支えてくれる家庭がいる。「今どき、こんな好青年がいるの」と私に言わしめた彼だが、フツとしたときに見せていた淋しそうな表情がいつも心の底にひっかかっていた。もうそんな表情も遠のいていくことだろう。

「Bald werden meine Familie und ich wieder einmal Japan besuche」

「の meine Familieとは、彼の母親と弟かと思ったが、もしかして奥さんと子供かもしれ

ない。子供だったらどんな子供なのか。彼の小さい時に似ているのだろうか。あと一週間で会える彼と彼の家族。一番うれしいと思えるクリスマスプレゼントは過去に沢山たくさんあったが、こんなにうれしいクリスマスプレゼント、本当にありがとう！

「三四歳になった彼はどんなになったのだろうか。家族と一緒にのときはどんな幸せそうな顔をするのだろうか。日本語、忘れちゃったかな。彼の奥さんとドイツ語で話さないといけないかな。ドイツ語、思い出すかな」と、会えるうれしさとどうでもいい心配を抱え、彼の到着を首を長くして待っている。彼にもいろんな紆余曲折うよきよくせつがあったわけだが、今ではこうやって自立していることが何よりの喜びだ。

「子供の自立」とは親からみれば、ともすればずっと手許てもとに置いておきたいという願望と対立するものだ。その気持ちは分からぬものではない。しかし、しっかり社会で生き抜いていける力を持った骨太な子供に育てたいなら、途中から支えを取り外してもしっかり上を向いて伸びていける木のように、そうやって子供が育つように、じっと手を出さずに見守ることも大事ではないだろうか。

7 子供の心の健康を看^みる

◆心のもつれを解きほぐす

六年間の不登校經由で学園に入学。自分の夢を実現するため国立大学を目指し、春から予備校に通うことを決めた「不登校の先輩」と一緒に、東北の小さな町から可愛いお客様が学園にやって来た。

デリケートな感じはするが、とても賢そうな小学校四年生の男の子は、東京に住む彼の叔母様に連れられて恐る恐る上田学園にやって来た。こんな小さな頭で、こんな小さな身体で、何に悩み、何に心を痛めているのかと、彼の表情を見ながら、私の方が泣きたくなかった。

「今の学校には戻りたくない！」

「どうして？」

「疲れたの。先生が僕のことを朝礼のとき足で蹴^け飛ばしたし……」

「勉強は好き？」

「嫌い！」

「何が嫌い？」

「国語。漢字が嫌い！」

「好きなものは？」

「体育と算数」

可愛いお客様は出されたオレンジジュースに手もつけず、緊張した面持ちで私達の前に座っている。

親一人子一人の彼は、母親が仕事で忙しいときは、一人で留守番をし、放課後は週三回スポーツ少年団に行き、週二回塾通いをしているのだという。

「体育が好きなら、スポーツ少年団も楽しいでしょう？」

「いや、疲れた」

何もかも疲れたので、東京の学校に転校したいと言う。東京は従兄弟達もいて楽しいし、お母さんも東京に行けばいいと言う。話し合いの途中からハンカチを目にあてて、涙を拭きながら訴え始めた。そんな彼を見ながら、彼が自分でも理解できない彼の本心に気が付いてくれたらいい、今の自分の心から逃げたら本当の不登校になってしまうし、何の問題

解決にもならない。そうことを理解して欲しいと願いながら、自分の心のうちを説明できず、混乱し、糸がこんがらがるようにになっている彼の心のうちを一つひとつ、解きほぐしていった。

「君が『学校にもう行きません』と先生に自分で言ったの？」

「違う、お母さんが言いに行ったの」

「先生は悲しんだでしょう？ 君が学校に来ないと言ったので」

「分からない」

「お母さんは、先生が何とおっしゃったと言ってらした？」

「早く、学校に戻って来てください、って」

「ほら、先生は君が学校に来ないこと悲しんでいると思うよ」

「違う。先生は僕を蹴飛ばしたし……」

「なぜ、蹴飛ばされたの？ 朝礼か何かで列を作っているとき？」

「そう」

「そのとき、先生に『蹴飛ばさないで下さい』って言った？」

「言わなかった。怖いから」

「きつと、先生は君がこんなに傷ついているって知らないと思うよ。怖くても上田先生だ

「だったら言うと思うな……。どうして人間に口があるか知ってる？」

口の役目は何か、そして自分の気持ちを口で伝えなければ先生もお母さんも、彼の気持ち^ちが理解できず悩んでいると思うよ、と話して聞かせた。

そして、いつもいつも「良い子供」を演じなくていいこと。嫌なことはしっかり人に伝える努力をすること。解決する方法の一つに転校もあるが、それは色々努力して駄目なときに選択すればいいということ。漫画を読むことも、ゲームをすることも国語の勉強になること。勉強は何時間もすると頭が痛くなるように、国語の勉強の一つの漫画やゲームも、あまり一杯^{いっぱい}やると良くないから長くはやらないようにしようね、と話しあった。すると、彼の口から今まで自分で気付いていなかった本心が出てきた。

「僕、おうちに帰って学校に行く！」

◆忙しくても子供と触れ合う機会をつくる

彼の目には仕事で忙しそうにしているお母さんの姿しか映らなかったのだと思う。そして無意識のうちに「お母さんに心配かけては駄目！」と頑張ってしまった。そんな彼の心^{すきま}に隙間風が吹いてしまった。心の中では「自分を見て」と叫んでいるのに、それをうまく伝えられないことで、普段だったら何とも思わないような出来事にも傷ついてしまった。

不登校のきっかけは、意外とこんなことから始まる場合もある。

今回の話し合いで、彼がすぐ元気になるかは分らない。けれど、彼の苦手な漢字の勉強について、「漢字の勉強は楽しいのよ。それに簡単なんだから。今度東京に来たら教えてあげるから、学園に遊びに来てね」と申し出ると、ニコニコしながら、春休みにまた東京に遊びに来たときは、従兄弟と二人で学園に勉強道具を持って来てくれることを約束してくれた。その帰りには、井の頭公園のサル山見学に行くことも約束。

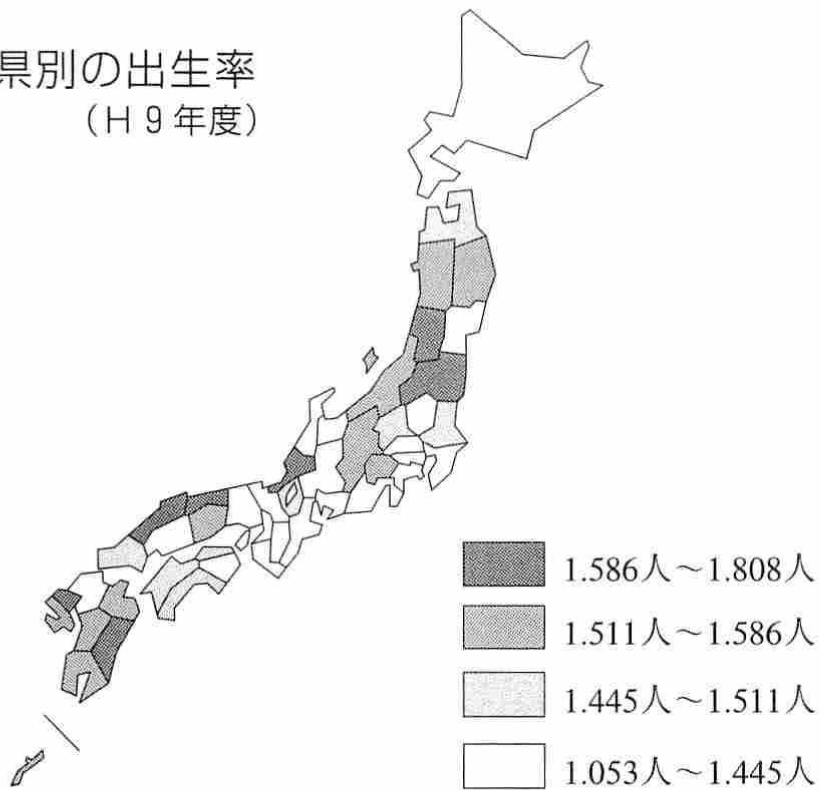
ホッとした顔をして帰る彼を見送りながら、教師としても、子供を取り巻く大人の一人としても、意味のない暗い顔を子供達にさせてはいけないうつくづく反省させられた。

まずは子供を取り巻く親や、大人がふっと立ち止まって、ゆっくり深呼吸をしよう。そして、子供達には一杯、一杯愛情を与えて欲しい。その愛情とはお金でも時間の長さでもない。子供達と心を通わせる笑顔やスキンシップのほずだ。

「仕事で忙しくても、お母さん、帰ってきたときには一瞬でいいから子供が嫌がるほど、ギュッと抱きしめてあげて下さいね！」

「東北の小さな町から来た可愛い不登校児君！ 学園に来てくれてありがとう。一緒に頑張ろうね。私の仕事とはいえ、彼と話し合いのチャンスを下さった彼の東京の叔母様、ありがとうございました！」そう言わずにはいられなかった。

◎都道府県別の出生率
(H9年度)



時間がないから、仕事忙しいからといって家庭や子供を顧みない社会かえりを大人は変えていこう。デンマークの出生率しゅつしょうりつ上昇の背景には育児休暇の整備がある。また、ノルウェーでは父親の育児休暇が義務づけられている。これは「愛情ある強制」と考えられていて、そのように制度化しないと父親は育児休暇を取らないからだという。

地域コミュニティ、社会全体が本当の意味で子供を育てやすい環境に整えていくこと。これから大人がもっと気付き、変えていかなければいけない問題だ。

少子化が進む日本だが、子供を生み、育てることに希望や魅力やメリットが感じられる世の中にしていくのも大人に課せられた役目だろう。

8 親子ごっこはやめにして

◆物分かりのいい親を持つて幸せ？

地震、雷、火事、親父！

日常、怖いと恐れられているものを順に列挙した言葉だ。地震より、雷。雷より火事。火事より親父と恐れられたのは昔の話。今は、地震が一番怖いものになり、親父はどこかに消えてしまった。

確かに昔の親父は煩しくて怖い存在であったが、しっかり家族を守っている感じがあった。今は優しくて、物分かりのいい親は存在するが、本当に何かがあったとき「お父さん、助けて」と言えなくなり、むしろ「お母さん、どうかしてよ」とふて腐れる子供に対して、毅然とした姿勢を示せない親が増えてきた。

最近、中学一年のときから不登校を始め、現在中学三年生になった子供の相談にのった。彼女はなかなかしつかりした感じの、いわゆる「いい子」と言われる部類に入りそうな

子供である。でも、友達とは上手くいなくて、ずっと学校に行っていないという。

「本人の意見を尊重して、何も言わずに暖かく見守りたいと思います」とおっしゃるご両親。彼女の不登校という現実を知らされていなければ、傍目から見ると物分りの良いご両親と、言葉遣いの丁寧な子供が構成している誠に理想的な家族のように見えてくる。

でも彼女から丁寧な言葉遣いで話されれば話されるほど、物分りのいいご意見をご両親から伺えば伺うほど、何か心にしっくりするものがなくて、居心地が悪い。その居心地の悪さに「どうしてかな？」と考えずにはいられなかった。そしてふっと、「物分りの良い親を持って、子供は本当に幸せなのかな？」と考えてしまった。

◆優しさで現実世界を遮断する

最近、巷では「癒し系言葉」が氾濫している。その癒し系の言葉の中に「物分りのいい親」という何とも微笑ましい言葉があり、その言葉を皆で楽しんでいるように思うのは、私だけだろうか。ちよつと前までは父親が頑固か母親が厳しいか、少なくともどちらかが厳しい親の役割を引き受けていたように思う。両親が物分りがいいことはあまりなかったように記憶しているのだが。

「私は友達のためを思って色々してあげのですが、友達は何もしてくれないんです。何

かをするのはいつも私で、友達ではないのです。それを指摘すると、『何も頼んだおぼえがないのに』と言われてしまうのです」

そう穏やかに話す彼女に対して物分かりのいい親は、「いい友達をつくらせたいと考えて、私立の良い学校に行かせたのですが、裏切られたような気がして……」と言う。そして、「今の学校も、友達も本当にだめですね」と。

それをじつと聞いていた子供は、「家は両親が私のことを理解してくれるので、ラッキーだと思います」とニコニコ話を続ける。物分りの悪い私は、「世の中、あなたを中心に世界が動いていたらいいのにね」と言いたくなかった。

◆頑固な親の復活を

「物分かりがいい」というのは、どういう意味なのだろうか。本当に物事を刀で真ま二つに切るように理解しているのだろうか。どこかで、「いや、どこかちよつと違うかな？」と感じてはいないのだろうか。他人の意見や立場などを理解するには、それを判断する明確な意見が自分の中にないとできないはずだ。

他人と上手く付き合えないことを、全部人のせいにして、学校に行かないことを正当化することに一生懸命な子供に対し、何も言わない両親。私にはどうしても「物分りのいい

親子ごっこ」をしているようにしか思えない。「ごっこ」はいつまでたっても「ごっこ」でしかないのに。

私の後ろで本を読んでいた「学園の主」^{ぬし}のような学生が言う。

「先生、他のフリースクールに行っている知り合いが言っていたんですが、最近のフリースクールの生徒の間で、どんな精神安定剤を飲んでいるのかを自慢^{じまん}し合うのが、流行^{はや}っているそうですよ。変な奴らですよね」

それを聞いて思わず、「もしかしたら『物分りのいい親』も流行^{つばや}なのかしら？」と呟^{つぶや}いてしまった。

地震、雷、火事、親父。

本当に懐^{なつ}かしい言葉である。懐^{なつ}かしい言葉ではあるが、頑固で頼れる父親と厳しいけれど優しいお母さんが復活して欲しい気がするのは、私だけだろうか。本当に私だけだろうか。

9 親が子供に対し適切な距離をとる

◆友達のように話せる親？

「我が家は親子が大変仲良くて、友達のような関係なんです」

現代は何でも友人のように親しくなることをベストと思っている人が多い。

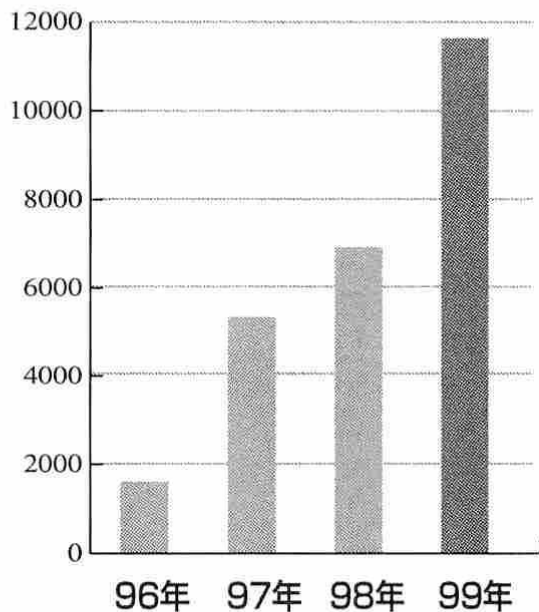
例えば、「学校の問題は先生と生徒の間に信頼関係がないから起きるのだから、『先生！』という呼び方を廃止^{はいし}して、生徒も先生も『山田さん』『田中さん』と呼びあって上下関係をなくしたらいい」と真顔^{まがお}で言う人がいる。

本当にそうだろうか。なんで家族・学校・会社の中で、「親しい」関係を表現するのに、この「友達」という言葉を使うのだろうか。これはひょっとして、「友達関係」イコール「平等^{びやうどう}」という発想から来ているのだろうか。

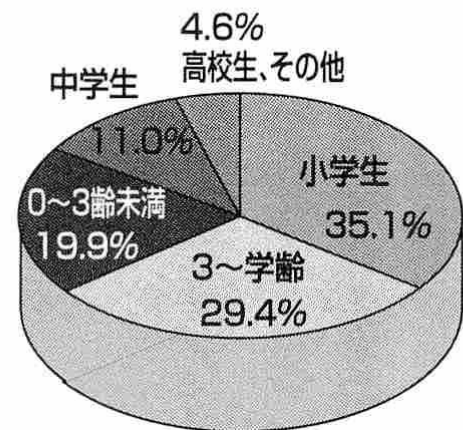
近頃問題になっているDV (domestic violence・家庭内での暴力)、子供の虐待、不登校生徒の増加、援助交際、学級崩壊など、子供のかかわっている社会問題を考えるとき、親

◎児童虐待(チャイルド・アブ्यूズ)に関する調査

児童虐待相談処理件数の推移



被虐待児童の年齢階層別の割合



出所) 厚生労働省報告例

と子、先生と生徒、社会と子供、子供と子供の関係が「同等」であれば解決できると考えるのは早計^{そうけい}すぎるだろう。

「受験、受験で、嫌^{いや}がる本人を無視して親の考えを押し付けてしまった結果、こうなってしまったのですから、何でも言うことを聞いてあげようと思います」と言っ、一五歳の娘が援助交際をしても、学校をサボって遊び歩いて、どこかに泊まり歩いて帰ってこなくても、全く叱らないという親。「子供とは、友達のように何でも話せる親になりたいんです」と他人^{ひと}事のように淡々と子供の話をする感情のない親御さんの顔に、なんとも説明できない淋しそうな表情がフット横切る。聞いている私の心にも説明できない侘^{わび}しさが残る。

子供に対する愛情の種類はたくさんあるだろう。しかし、何年も何年も子供に振り回された両親の「心の愛」。それを支える力が消えかかり、頭で考える「理性という愛」だけが、何とか両親の中で支えられているような印象を受けた。

◆子供達は大人に本気で間違いを諫めてほしい

子供達にかかわる問題を考えるとき、「どうして？」という言葉が思わず口をついて出てしまう。どうしてもこんな問題が起こるのだろうかという思いと、自分達の過去の経験の中に存在しえなかった新しい問題、判断基準、価値基準に早く「答え」を見出したいという「焦り」の気持ち^{あせ}が心を重たくする。

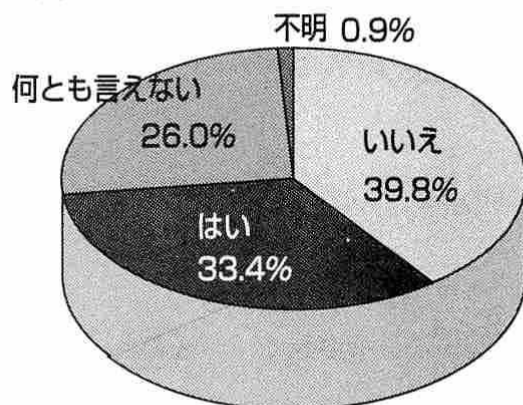
そして親も先生も、子供達を取り巻く大人達のほとんどが、答えの見出せない教育問題に自信をなくしかけている。「大人達が悪いからだ」と極端に自分達を責め、子供達のすべてを受け入れてあげようとする。しかし、大人達のこうした態度は、これ以上考えることを拒否し、思考を停止させているに過ぎない。だから子供達に対し全面降伏する。子供の言いなりになることで、子供と大人の関係を回復させ、いい関係を築けると信じて努力する大人が現れる。

しかし本当にこれでいいのだろうかと疑問に思う。「子供達をそのまま受け入れてあげる」

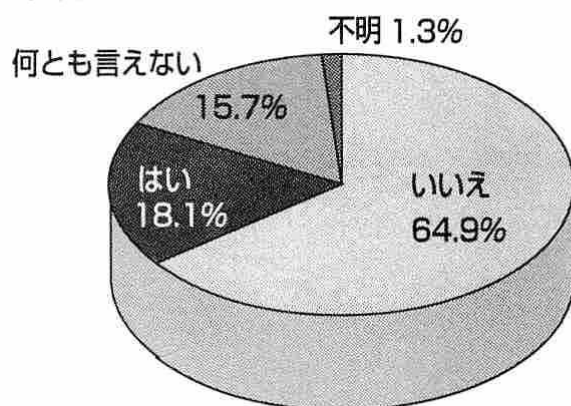
◎母親の心身の状態と育児への影響

幼児健康度調査（平成12年度 日本小児保健協会）より

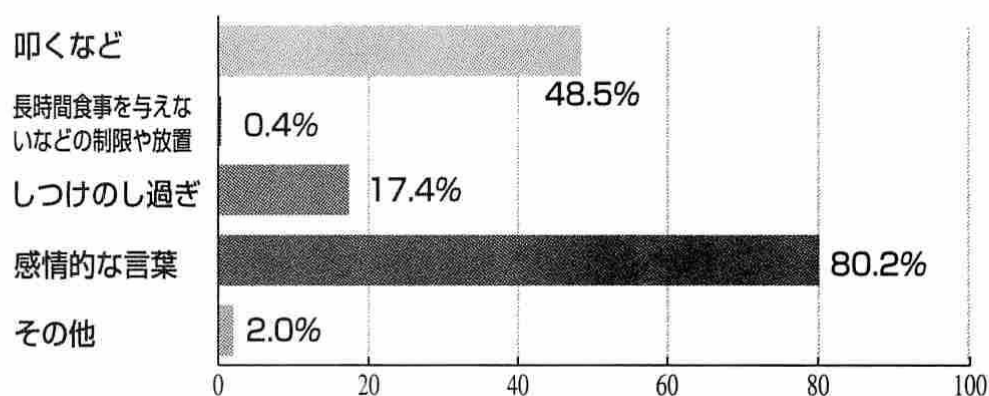
1、子育てに困難を感じることはありませんか？



2、子供を虐待していると思ったことはありますか？



3、思っていると答えた者のうち、虐待していると思う行為は？



「受けとめてあげる」という言葉は口当たりがいいため、そういう言葉を発すれば、それだけで子供達を理解し、問題を抱えた子供も導けると思われがちだ。

しかし、自分の心を押し殺し、子供達に注意も敬意もまったく払わずやつと成り立っている「受け入れ」や「受けとめ」の関係なら、彼らの言葉でいうところの「しかと」、すなわち、存在を無視、疎外したことになると思うのだが……。

子供達の大多数は本当は分かっているのだ、自分達が何をしているのか。

例えば、「援助交際という名の売春」「自由と言う名の逃避」「権利と言う名のわがまま」。

ただ自分のことを正しく理解してもらいたいただけなのに、自分をうまく説明できないことのもどかしさ。決して「正しい!」とは思っていないことをしてしまう自分の愚かさ。それを止められない自分。親としての自分の考えや意見を持たず、常に「世間」というメガネをかけた目でしか自分達を見ようとしなない親達への不満。坂道を転がっていくように感じる不安な自分の毎日。

彼らは心のどこかで、本気で自分を叱って欲しいと考え、本気で甘えさせて欲しいと望み、本気で自分のことに目を向けて欲しいと願っているのではないだろうか。一生懸命シグナルを出せば出すほど、自分達の思いとは逆方向に遠ざかっていく親達。しまいには「お客様」が来たような気の遣い方で自分達に接してくる。それではまるで、「あなたは家

の者ではありません！」と控^{ひか}えめに言っているようなものだ。

一番味方になって欲しい親や家族から理解してもらえない自分を「認めてもらいたい」一心で、同じような思いで孤立^{こりつ}している人達を「仲間」と位置付ける。その仲間に入ることで自分の不安な気持ちや不満を、「自分だけがやっているわけじゃない。皆だつてやっている」という理屈^{なぐさ}で慰める。自分の心を偽^{いつわ}り、正当化することで、今にもつぶれそうな不安と自分のプライドを保^{たも}っている。

◆同等にはなりえない上下関係

「自由」という名のもとに「なんでもあり」を謳^{おう}歌する現代は、あらゆることが複雑になり、簡単に未来が予測できなくなっている。こんな時代だからこそ、表面的な「美しい言葉」や、一見「知識人」ぶった言葉に惑^{まど}わされてはならない。言葉遊びや言説^{げんせつ}に心を振り回されてはいけない。子供達を本当に愛しているなら、悪いものは「悪い」、危ないものは「危ない」と、シンプルにはっきり言うしかない。

絶対叱^{しか}つたり注意したりしなければいけない場面でも、「我が家は、何でも話し合いによって決定する友達家族なんです」と答える。現在進行している正しいと思えないことに対しても、自分達を誤魔化^{ごまか}し目をつむってしまうのは、絶対間違っている。それでは子供達

に「愛情がない!」と思われても仕方がない。

人はいつも時間という大きい流れの中で生かされている。「先に生まれて先に死んでいく」「後に生まれて後に死んでいく」人間の摂理^{せつり}。先にこの世に存在した者は後から存在する者に対して、人間としてどうやって人と関わり合わなければいけないのかを大人から子供へ伝えていく役目がある。

だから、親と子はあくまでも親と子であり、先生と生徒はどんな呼び名になっても、先生と生徒。上司と部下はどんな時でも上司と部下という関係は変わらない。「同等」には絶対なりえない。

そしてこの同等になりえない関係が、礼儀^{れいぎ}に支えられた「上下関係」だ。この上下関係は同等と分類されている友人関係の中にも、自分の知らないものを教えてもらったり、助けてもらったり、という形で実はいたるところに存在している。

◆親と子に必要な距離感覚

言いたいことを言う裏には、きちんとした礼儀に支えられた言い方があるように、この礼儀の根本は「上下関係」にある。どんなに時代が変わっても親は親。大切な場面では親は子供に対してきっちり距離を置くべきだろう。

教師も同じだ。生徒の同級生のように振る舞うのなら存在している意味はない。

この上下関係の距離のとり方次第で、人間関係はスムーズにも、でこぼこにもなる。そしてこの上下関係の距離のとり方は、相手に対する尊敬や謙虚さに裏打ちされた礼によるのだろう。そしてこの礼は、その出発において学校でも社会でもない、他ならぬ家庭からしか学ぶことができない。

こういったあらゆる礼の核は、擬似的にせよ「家庭で営まれる愛」から発している。しかし親が子供へ依存することなどによって、この愛がいびつになったり、崩れたりしてしまふと、それがいじめ、虐待、犯罪に発展する要因になりかねない。

だからこそ「親しき仲（身内）にも礼儀（距離は）あり」という関係をしっかりと築いておこう。複雑な社会、理解の範囲を超えそうな人間関係。そんな時代だけに、人間として生きるための原点に戻って、「礼」に支えられた人間関係をつくろう。相手の領域をきちんと認めると同時に、大切な場面で相手と自分にきちんと距離の置ける関係を。

二児の母から上田先生への手紙 1

私は33歳2女兒の母です。以前に『JMM vol.9 教育問題の新しい問題2』で村上龍さんの上田学園のフリースクール取材記事を読み、読者レポートとして、上田学園についての寄稿をさせていただきました。その時は上田学園の取材記事から、「この学園で行われていることが効果的なのは、魅力的な生き様を見せる大人たちから、何らかのパワーを子供達が得、頑なな心が自浄作用のように少しずつ和らぎ、心が前向きになっていくからだろうということ。また、世の中は広く、様々な価値観があることを知り、いろんな面から物事を見、対処できるようになる、あるいはなろうとするから……」等を、自分の教育実習体験などと合わせて、書かせていただきました。

今回先生が本をお書きになるということで、先生にお手紙を出させていただく機会を頂きました。一人の母親として、日常の育児のなかで本当は不安に思っていることや、これから迎える子供との学校生活への不安や疑問、先生のお話の中で気がついたことなどについて質問させてください。

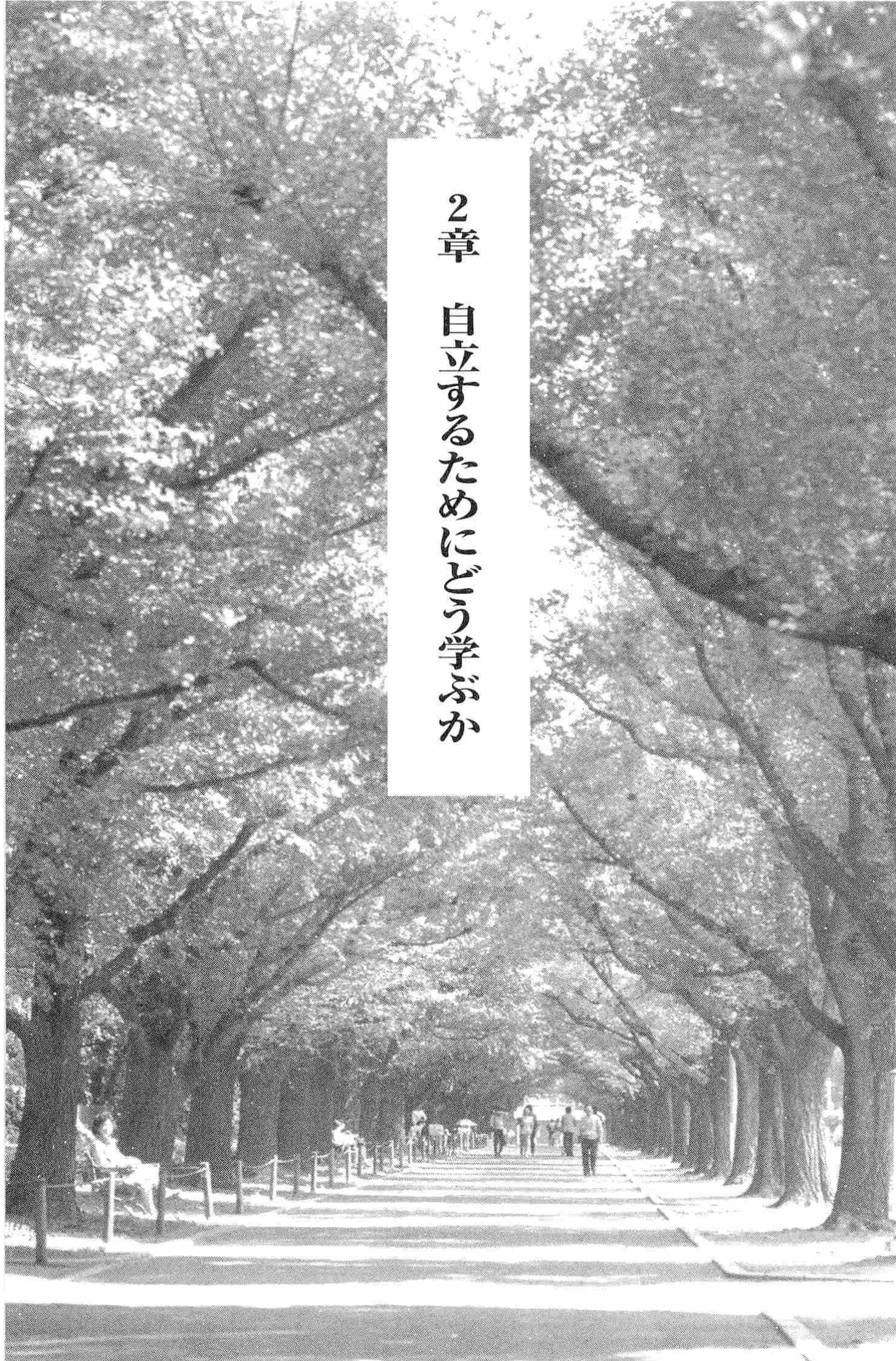
「地域コミュニティ、社会全体が本当の意味で子供を育てやすい環境を整えていかなければならない。そうしなければ日本は子供を産み、育てることに希望も魅力もメリットも感じられない国になってしまう」とありますが、具体的にどういう環境作りが必要だとお考えですか？

当学園の方針についてとてもよくご理解いただきありがとうございます。

子育ての喜びとは、教師と似ていて、子供を産み、親になり育てる中で、子供が成長し一人前になっていく様子を「見られる喜び」につきますと思います。そのための子供にとっての環境作りとは、まず親自身にあります。まず、親が子供に対し「あなたが私の子供でうれしい。あなたを育てられてとてもうれしい！ 感謝している」と全身で意思表示することだと思います。そのことがまず最初にお母さん方へ伝えたい私からのメッセージです。それと同時に、昔のような隣近所のコミュニティーの充実が必要と思います。おせっかいをしてくれるおばさんやおじさん達や、一緒に遊んでくれる子供達同士の集団がいることだと思います。今は昔と違い、気軽な隣近所との交流が少ないので、それと同じ機能を果たす場所作りが大事です。子供達同士で遊ぶ「原っぱ」であったり、おじいさん、おばあさんが集まってきておしゃべりする場所。今そういう場所がないから、と諦めないで、それに代わる空間を現代風にアレンジして、工夫して作りだしてください。いろんな世代が交流し、そこに若いお母さん達も気軽に行けて、そこでの交流から子育ての知恵や生活する知恵を学んでいけるような場所を。実際、自分達で地域親の会を発足し、生産的な活動をされているところも数多く出てきています。

ぜひ今度、お子さんを連れてうちの学園に一度遊びにお越しになりませんか。

2章 自立するためにどう学ぶか



1 旗たてて一番前に行く人は誰？

◆あらゆるチャンスから学ぶ

「お前ら、そこに並んでいろ！ 班長、皆をまとめて並ばせておけ！」

大声で叫び、汗をかきながら四、五人の先生らしき男性達が、ターンテーブルの上に運ばれてくる大きなスーツケースのタグを一つひとつチェックし、荷物を降ろしている。その脇で、有名進学高校の制服を着た百名位の高校生達が、班長と思しき生徒を中心おほに十名位のグループに分かれて、自分達は手を下さずポケットと、荷物を降ろす先生達を見つめている。

同じ場所で学園の子供達が、同じターンテーブルの上に運ばれてくる自分達の荷物をチェックし、他の学生の荷物や私達の荷物も含めて一緒に降ろそうとタグを確認しあっている。これは、イタリアの飛行場での光景である。

子供は本来どんな状況にも逞しく順応たくまじゆんのうしていける力を備えている。でも、多くの場合、

大人達がこういった力を発揮^{はつき}させず、そいでしまっている。

世間的にはエリートの卵だと考えられている彼らにどうして？ 子供達がノソノソやるのを待っている時間が無駄だから？ 何をするよりも勉強優先だから、何もさせないの？ これも学べる機会じゃないの？ という思いがしばらく頭を離れなかった。

子供が社会に出る前に、「学ぶことは教室を離れても終わらない」と気付かせて欲しいのだが。

◆修学旅行は誰のもの？

修学旅行は読んで字のごとく、学び修める旅行だろう。実際に、教科書で読んだり見たりした実物を見ることが出来る。日本中が貧しく、旅行など行かれなかった時代、「高校の修学旅行で行ったことがある」という懐かしい思い出さえ生みだした。

それが今は誰でも簡単に旅行をし、教科書の中で読んだり見たりした実物もすでに見ていることが多い。だから、現在の修学旅行に出かける意義は、昔の修学旅行のそれとはまた違ってきているはず。

しかし、現代の修学旅行、それも海外の修学旅行は単に、学校の生徒募集に使うための広告塔^{こうこくとう}でしかないように見えるが、それは私だけの誤解だろうか。

それではもったいない。本当にもったいない。子供達が大きく学べる場を簡単に潰^{つぶ}してしまっているから。

学園の修学旅行、特に海外に出かける場合、まず自分の苦手意識や自分が受け入れてもらえない体験をさせてみる。旅行先では未経験の物事から簡単に逃げ出しかねない子供達に、逃げ出す場所が与えられない。逃げ出せなければ、自分で考え、解決するしか方法がない。そうやって自然に彼らが逞^{たくま}しくなれる機会^{チャンス}を与える。

海外はそう簡単に帰れない。もし仮に、一人で飛行機を使って日本に逃げ帰りたいとしても、それだけでもすごい自力を使わなければならないから、ある意味意図^{いとう}に適^{かな}う。

「親から子供を離^{はな}す」。すなわち、支援者^{スポンサー}から子供達を引き離したところで、生き抜く力が育^{はぐく}まれるのだと思う。

また、海外の旅で学んで欲しいことはお金の遣^{つか}い方だ。今の子供達は本当にお金の遣^{つか}い方を知らない。お金を遣^{つか}うべきところで遣^{つか}わず、どうでもいいところで散財^{さんざい}する。そのため、一定の額のなかで、工夫して効果的にお金を遣^{つか}う方法を学ばせたいと思っている。これも、いくら口で説明してもやってみないと身につかない。

さらに海外の旅は、危機管理^{ききかんり}の責任を含む自己責任と、他人への思いやりを持つ訓練の場だと思う。情報を集めたり、分析し、結論を出す実践訓練の場でもある。

こう考えてみると普通の学校であれば、修学旅行は二〇〇二年度から導入される「総合的な学習の時間」の格好の材料として捉えられていいはずだ。

学園の学びのスタイルは、自分で疑問を持ち、情報を集め、分析し、結論を出す。それをまとめ、発表するのが基本形だ。そしてその力をどんな状況、どんな場面においても発揮できる人間になれば、どんな仕事の実務能力としても相当なものになる。それが生きていくうえで、一番役立つ基礎力になると考えている。

「勉強＝机の上のこと」と、小さいときから思い込まされ教育されて来た彼らに、「勉強とは机の上だけのことではない、毎日の生活の中にもある」と思い直させる良いチャンスだ。そして何より、「自分はすごい潜在能力を持っている」「自分はけっこうやれるんじゃないか」という実感を肌でえて、自信を持つようになるための重要な動機づけになる。

◆主役は生徒、脇役は先生

学園の修学旅行を紹介しよう。もちろん主役は生徒達。そのため、脇役の先生は最後まで主役を引き立たせるため、脇役に徹し、でしゃばらない。旗を立てて先頭は歩かない。何から何まで主役の生徒に計画を立てさせ、実行させる。

行く先の選定から、訪問先へのチケットをいかに安く手に入れるか、どの位の日程で行

動するのかをまず自分達で決める。そして、それぞれの担当者が情報を集め、各国の観光局や旅行会社に行き、資料を集め、本を読み、分析^{ぶんせき}する。そしてパスポート取得から、すべてのスケジュールが学生達の手で作られる。その間、脇役の教師は子供達に疑問を投げかけるような形で、最低限のアドバイスをする。その結果、分からないなりに、旅行行程^{こうてい}を理解し、自分で管理できる最低限の荷物と、親にキッチンと交渉して出してもらった旅費^{りよひ}を持って旅行がはじまる。

ここまでできたら、修学旅行へ行く意義の六〇%は完了^{かんりよう}である。

確かに、学校の先生達が旅行業者と一緒に立てたスケジュールと比べれば、初体験の学生達が立てたスケジュールなのでおおざっぱである。しかし完璧^{かんぺき}でないから、実生活のよ^ようなスケジュール変更や、思いがけない出来事を通して成長の余地^{よち}があり、子供達が見事に変身し、成長を遂^とげられるのだ。

ここで子供達に求められる力は、齋藤孝さんの言葉を借りて言えば「段取り力」になる。「段取り力」とは、言葉を換えれば、場を作る力である。ホームパーティや飲み会、部活の合宿など、どれほどささやかなものであっても、そうした何人かがかわる場がうまくいくかどうかは、それを取りしきる人間の段取り力にかかっている。参加している人間はその場を楽しく動ければいいわけだが、段取りをする人間は、事前に状況をシミュレーショ

ンし、当日も展開を読みながら気を配っていく」

そして「杓子定規しやくしじようぎな捉え方しかできないというのは、段取りを組むことはできない。全体を大づかみに把握はあくしたうえで、突発的な出来事をもプラスに転化して取り込む柔軟性が段取りには含まれる」

まさにこういった力を培つちかう実地訓練として旅行を機能させようとしてきた。

行く先々でその国担当こくたんとうの学生が、時間はかかってでも何とかいرونなところに引率いんそつして行く。レストランなどでも身振り手振りてぶで交渉こうしょうし、見事に責任を果たす姿は何とも逞たくましい。担当日一日目を無事終えたときの自信に満ちた顔は、大舞台だいぶたいを踏んだ主役の顔である。

脇役に徹する教師達も主役の喜びのオコボレを頂戴ちやうだいでき、その時の気持ちは「教師冥利みょうりにつきる」のひと言だ。そして、引率いんそつされた学生達も各自が次の日から、どこへでも単独行動に出ていき、自由時間を満喫まんきつする。

子供達を取り巻く親や先生も含めた大人達に提案したい。経験不足だから危険に遭遇そうぐしないように、時間やお金を無駄にしないようになどと言いながら、旗を立て、髪を振り乱しながら自分達の思う通りにならない学生達の先頭を歩くのは止めよう。

勉強の主役は学生である。先生も親も脇役である。脇役は脇役に徹し、主役がのびのびと学ぶチャンスをつぶさないようにしたいものだ。

2 豊かさの弊害

◆あなたの夢、なんですか？

父「早苗ちゃんは大きくなったら、何になりたいの？」

私「ターザン！」

五歳年上の兄が友達と一緒に「あーあーあー」と叫びながら、有栖川公園ありすの木々の間をおサルさんのように跳とびまわって遊んでいた。それを見て、羨うらやましくて仕方がなかった私は、大きくなったら絶対ターザンになりたいと、真剣に考えていた。三、四歳ころの私の夢である。

「止めといたほうがいいよ。舞台ぶたいに穴ぼこがあいたら、舞台がかわいそうじゃないか！」と、すでにチョット太めの小学校三年生の私に、あのふわふわした天使いしやうのような衣装いしやうと、爪先つまさで立って踊ることを諦めあきらめさせた、兄の真剣な言葉。そう、小学校三年生の私の夢はバレリーナだった。

家は楽しいのが当たり前。私は可愛がつてもらうのが当たり前、と信じて疑わなかった私に、「世の中、楽しくない家が存在するんだ」と教えてくれたのは学級文庫の中の本。クラス友達に知られないように、涙を拭き拭き読んだことを覚えている。その影響で「大人になったら孤児院こじいんの先生になりたいんです」という夢を小学校卒業のときの文集に書いた。

あれから四〇年以上の歳月が過ぎた。

現在、五〇歳をすぎ、小学校卒業時の夢と遠くない仕事をしている自分がいる。しかし夢はまだまだいっぱいある。今の私の夢は、五年目の学園を完全に軌道きどうにのせること。授業の後、学生や先生達が集まれる場所、例えばゆっくり暖炉だんろを囲んで火を見ながら、のんびりいろんな話ができるような場所、せめてゆっくり放課後を過ごせる大きな場所に引越したい。目をキラキラ輝かせた小さな子供達の「先生、これなあに?」「どうしてなの?」と好奇心いっぱい質問が飛び交うような「学園ジュニア」をつくり、私のアイデア教材で、語学教育を世界中に普及ふきゅうさせ、利益が出たらそれで、孤児院から養老院までの楽しい施設しせつをつくる。

庭つきの家に住めたら、庭の角にバーベキューができるような設備をそろえ、皆でゆっくり食事をしながら、ブランチをして楽しむ。庭の角に穴を掘って、そこにバナナの皮で

包んだ肉を蒸し焼きにして、皆で食べられるようにしたい。できたら、庭に小川が流れていて、小川のそばに椅子^{いす}を出して、ゆっくり小川の音を聞きながら本を読んだり、アフタヌーンティーを楽しんだりしたい。「先生、泊^とまっていっていい？」と聞かれたら、「好きナだけ、ゆっくりしていい」と言えるような余裕が持ちたい。五〇歳を過ぎた現在も夢は次々と湧いてくる。

しかし現代の子供達には夢がないという。夢のない子供達に大人達は愕然^{がくぜん}とし、子供達は「生きる目標が持てない夢のない時代に生まれた」と言う。

「夢ってなんだろう？ 夢がどうして持てないのだろうか？ そもそも『夢を持つ』ってどうして必要なことなのだろうか？」と、ずっと考えてきた。そして、フツと気がついた。夢って、満たされ過ぎていると持てないのかも知れない！

人間として生まれてきて、絶対誰にでも公平に与えられていると信じている真実が私にはある。それは、人間は「終わり」に向かって生きていく中で、一生のうちでしなければいけない苦労の数は同じだということ。違うのは苦労が小出しに来るのか、大出しに来るのか、平均して来るのかの違いと、苦労を苦労と感じるか、苦労を楽しめることの前兆^{ぜんちよう}と考えるのか、つまり考え方や捉^{とら}え方の違いだけだと。

そして、長い人生を飽^あきることなく、最後まで全^{まっ}うできるように、神様が下さった調味料が「楽しみ（楽し味^み）」や「苦しみ（苦し味^み）」で、それを上手に使うための目標が「夢」なのだと思う。その夢は、足りないものがあるから、こうしたい、ああしたい、というように考え出すことから、自然に湧^わき出てくるのではないのだろうか。

◆夢を持つために何でも与えることをやめる

夢が「不足しているものを補^{おぎな}いたい」という欲求から湧き出てくるものであるなら、親が自分の人生の不足を補^{おぎな}おうとして湧き出てきた欲求を、子供に押し付けても仕方がない。隣の井戸^{となり}に水が湧いても、自分の井戸に水が湧くかどうかは保証^{ほしょう}がないように、保証のないものにヤキモキするより、保証が持てる自分、すなわち親自身が自分の夢の実現に向けて努力するべきではないのか。そして、親が自分の夢の実現に向けて努力している姿を子供達に見せることは、どんなに有名な学校に行くことより、どんなにいい本を読むことより、子供達の人生にとって大きな意義^{いぎ}あるものになるはずだ。

それと同時に、子供が夢を持てるように、夢を持つ第一歩のトレーニングとして、子供が欲しがる前に与えたり、考える前に考えてあげるようなことをしてはいけない。実際、何の苦勞もせず手に入れた物を大切にしている子供を私はみたことがない。本当に欲しく

て、何とか手に入れようと、アルバイトしたわけでも、親を説得したわけでもないの、手に入れたことへの感謝がない。学園の生徒達でも、「どうして手に入れたものを大切にしないの？」と聞きたくなるほど、高価なギターでも何でも、そこら辺に放りだしてある。

夢がないことはつらいと思う。生きる楽しみがないのだから。あるのは、人生の「終わり」に向かって歩いているという事実だけだ。そうなったら、生きることも大切にできないし、人も大切にしない。

極端に言えば、親からいただいた大切な自分の人生も簡単に捨てかねない。捨てた命は戻ってこない。そんな悲しい選択を子供達がしないよう、夢がたくさんある子供に育てるために、何でも与えてしまうことをやめよう！

「与える余裕があるから与える」という考え方を捨て、与える選択権を親は行使しよう！代わりに足りないものを、不足しているものを工夫して補う知恵を授けよう！

そして、どんな小さな夢でもいい。子供達が持った夢を大切に大切に育ててあげたいと思う。たとえ、親の目からみたら、「くだらない」「無理」と思えるような夢でも、長い人生、夢の実現に向けて人は変化をしていけるのだから。

◎参考

心の東京革命都民集会（平成12年10月）

石原東京都知事あいさつ より

やっぱり脳のトレーニングというのは必要なんです。それはどういうことかという、やっぱり頑張って物事をやるとか、うれしいとき本当に心から笑うとか、本当に悲しいときは、滂沱（ほうだ）と涙を流して悲しむと、そういう反応なんです。もっと大事なことは、人間が頑張って耐える、耐えたことで成功したらほっとする。あるいは本当に、一人でも晴れ晴れ笑う。そういう、人間の生活の活力を与える心の動き、情念の動きというものをびんびんと生き生きと促す、その脳幹が非常に衰弱している。

それはそうでしょう。「お母さん寒いよ」と言ったらすぐ暖房を入れてくれる。「暑いよ」と言ったらすぐ冷房が入る。昔は「おなかすいた」と言ったら「我慢なさい、もうじきご飯ですからちょっと我慢なさい」と言うけれども、今は子供が「おなかすいた」と言うときすぐカップラーメンとか何かを出す。

つまりもう簡単に欲望が満たされるから、我慢するという習慣が生活の中になくなってしまった。つまり、人間のトレランス、耐性、こらえ性というものがどんどんどんどんなくなってくるから、ある時点にくると子供は突然キレて、もう見境がつかなくなって、とにかく人を刺したりする。これはやっぱりトレランス、耐性ですね。そういったものが非常に希薄になったという現象の証左です。

日ごろ余りに何でもかんでも与えて甘やかすことが実はいかに有害かということも悟り直して、この物のあふれた時代に、むしろ与えるものを抑制するということも心がけることで、私は実は子供をごく真っ当な人間に初めて育てることができるんじゃないかという気がするんです。

3 無駄は人生の宝箱

◆無駄って何？

身近に子供達に接していて気になることがある。それは、時間やお金を使い方が上手でないこと。また、口が達者な割に、コミュニケーションの取り方が下手なことだ。

彼らは一見損いっけんするように見えることに対し、絶対手を出さない。何をするときでも「無駄むだか無駄でないか」、そんな基準でしか物事を判断しない。

これでは人間に幅がなくなる。生き方に魅力みりよくがなくなる。余裕がなくなる。

「無駄」という言葉の辞書的な意味はネガティブなニュアンスだが、この無駄を必要以上に嫌悪けんおし、排除はいじょしてきた過程で失ったものは大きい。

というのも無駄には本当の無駄と、一見無駄に見えるがゆくゆくは無駄にならない二種類の無駄があるからだ。子供達はまだ表面的に判断し、無駄を誤認してしまうこともある。だから本当に無駄か、無駄でないかを気付かせていくのは大人達だ。せめて、子供を取り

巻く大人達が、もう少しその辺りに気配りできると、子供の世界はずっと楽しく、豊かになると思う。

かつて日本には、高度な経済成長を達成するために、時間を逆算した上で組まれたスケジュールがあった。一端組まれたスケジュールは、それを消化するために、消化を妨げると思われるすべての無駄を排除した。スケジュール進行に支障をきたすが、本当は必要と思われる無駄に対しても社会の目はつむられてきた。そして、そのような時代が終わっても、こうした構造は長く見直されることがなかった。

こういった無駄を省く社会の構造は、子供の視野を狭くし、自分から考えたり、判断したり、軌道修正したりする力を子供に持たせることを阻んできた。

しかし社会で構造改革の必要が叫ばれ出したのと同時に、「少年犯罪」や「不登校」「心身障害」「幼児虐待」など、次々と従来式のやり方の問題が表面化し、今やっと世の中は変わろうとし始めている。しかし、それでも既得権益を持ち、染み付いた考えから抜け出そうとしない人々も大勢いる。

そもそも現代では「無駄な時間、無駄なお金、無駄な人付き合い」というものは、何を判断基準として決めてきたのだろうか。

◆ たった三〇分の効果的な総合学習

義務教育の時代にぜひ徹底させたい素敵な時間がある。

その時間は、数学の勉強より、国語の勉強より、どんなに大切な教科より、もっと楽しく、素敵で、意義のある「掃除」の時間。

今の教育ではこうした素敵な時間がないがしろにされてはいないだろうか。掃除当番をさぼり、塾に行き、テストでいい点数をあげた方が「ためになる」と、目先の計算だけで子供を行動させてしまう。

「塾の時間だから」と掃除当番をさぼることに「後ろめたさ」も感じず帰る子供達もおかしいが、それを許してしまっている環境にも根深い問題がある。

掃除当番をすることで「使ったものは片付ける」というルールを学び、皆と協力するということを知る。汚れたものが綺麗になり、気持ちよくなることが体験できる。決められた時間の中で、頭を使って合理的にすばやく作業を終わらせる訓練にもなる。

「二人位いいだろう!」と何気なく散らかしていることが、人にどんな迷惑をかけているかを理解し、綺麗に片付いている状態が実は当たり前ではなく、母親も含めて、誰かのおかげであることに気付く。同時に、体を動かして何かをやった後の爽快感と、人が喜んでくれる充実感が体験できる。

こんなに色々な「教科」が実践^{じっせん}で学べる素敵なことは、なかなかお金を出しても体験できないし、体験させてあげられない。だから、義務教育時代の子供達にさせたい勉強は、奉仕活動の義務化より、まず掃除当番なのだ。

◆無駄の意味を取り違えている

テストには功罪両面があるが、数学でも歴史でもその根底にある意義を説明させることより、効率的な暗記だけを問題の答えに要求してしまうのは考えものだ。生徒達に「パブロフの犬」の応用編ともいうべき条件反射の訓練を徹底しても、問題は人生に残らない。生きる力とはならない。これでは、それこそ「時間の無駄」である。

むしろテストとは教師のためにある。どこが上手に教えられなかったか、どこが理解させられなかったか、どのように教え方を工夫すればいいのかなどの反省材料として。

ちよつと想像してみたい。まるで「お手^{えさ}Ⅱ餌、餌Ⅱお手」の訓練と同じように見えるテスト用解答を、いかに効率的に短時間で出すかの訓練をさせられている子供の姿を。その姿を哀れに思うのは私だけではないはずだ。

頭は考えるための道具箱であるはずなのに、まったく使わない「宝の持ち腐れ^{ぐさ}」になってしまう。その方がよほど無駄に見えるのだが。

齋藤孝さんの言う「ペーパーテストでの記号操作のうまさを競うだけでは、現実社会をたくましく生き抜く力が育たないという反省」を踏まえ、無駄と省いてきたものの中に、本当は大事なものが隠されていなかったか、確かめてみる必要がある。

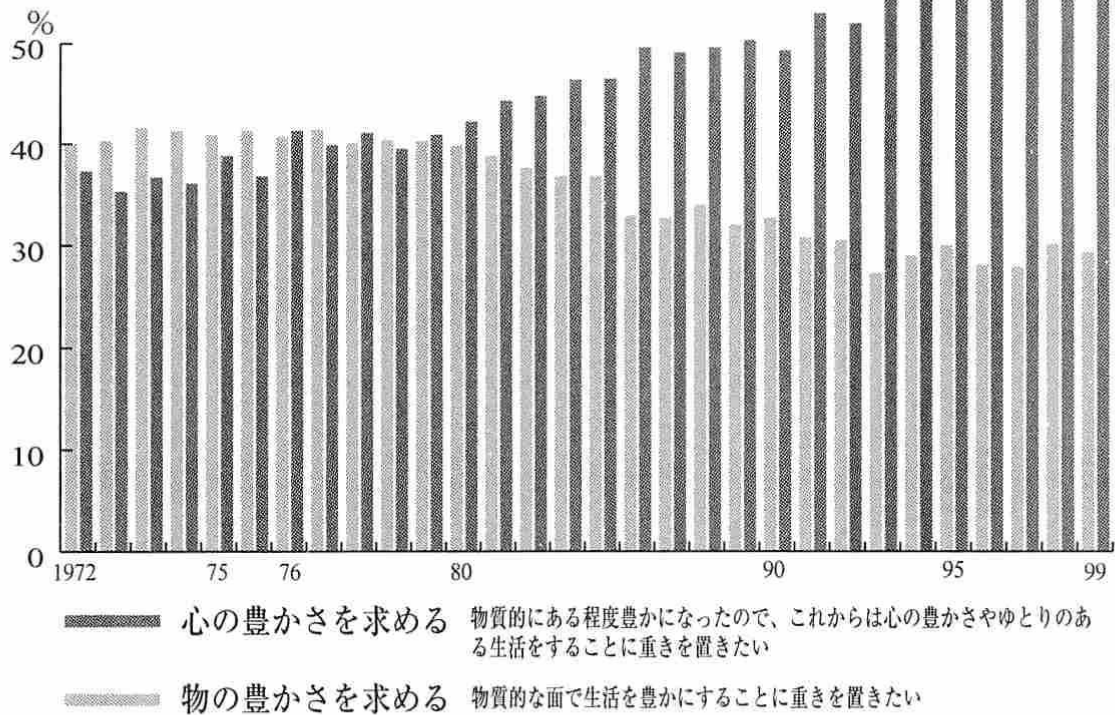
「損して得とれ!」。このように昔の人は目先の利益だけを追わず、将来大きく返ってくる利益を、一見損するように見えても選択しなさいと教えたものだ。しかし、今の子供達は「無駄な時間、無駄なおしゃべり、無駄遣い」を取り間違えて、本当の時間の使い方、お金の遣い方、人との関係などが学べる場、学びのチャンスを逃^{のが}してしまっている。

勉強以外で使う時間も有効時間だ。ゲームや漫画^{まんが}を買う以外で遣う有効なお金の遣い方もあること。友達や家族と何気ないおしゃべりや会話をするのと同じように、知らない人と理解し合うために改めて対話することも有意義な時間^{ゆういぎ}だということ。

現代は子供が社会的に自立するまでのモラトリアム期間が長くなっていると言うが、子供達の純粹な意味での子供時代は短いのだと思う。「その歳で」と思うくらい、大人のような理屈をこね、損か得かを判断して動く。しかし、精神的に成熟していない子供達の判断基準は、結局大人のコピーに過ぎない。大人のコピーである判断基準が目先の基準であるために、子供達に可愛いような結果を押し付けている。

大人の世界は「不況だ! リストラだ!」と大変厳しい時代だ。そんな中、再就職や人

心の豊かさか、物の豊かさか



出所) 総務省「豊かさに対する意識の変化」

生の出直しを図るため、けっこうなお金を出して再就職のための養成所に通う人もいる。

そのプログラムの中に無償で街の中を掃除したり、人の家のトイレを掃除したりするカリキュラムがある。会社の新人研修でも会社の周りを掃除する研修が含まれていたり、そうやって鍛え直されている大人達もいる。

時間の無駄だと信じて、子供達にサボることを許容している「掃除」を通して、大きく変わろうと努力している大人達がいて、もっと広く社会的にもアナウンスしていくべきではないだろうか。

4 学生の生きがい？

◆生きがいがないのでフリースクールでボランティアを……

たくさんいただく学園への問い合わせの中で、結構多いのが現役大学生からの問い合わせだ。なかでも「大学には何も生きがいがないので、フリースクールでボランティアをしたいのです」という内容が多い。

先日偶然出会った大学生から同じような申し出があった。

自分に生きがいがないからボランティアでもしようか、という姿勢がいいか悪いかは別にして、大学に行っているだけでも、何を生きがいにしていいのか、何を楽しみにしていいか分からないと言う。そして、「今の大学生は、大学に楽しみがないので適当にアルバイトをして、それを女の子に遣うか、おしゃれに遣うか、まったくそれもしないでただ、黙々とアルバイトをして遣うところのない小銭こぜにをため、それでせいぜい漫画をかうくらいしかないんです。だから、結構お金には困ってないんです」と説明する。

さらに、「親から仕送りをしてもらい、夢も楽しみも何もなく、毎日ハンを押したように学校と家を往復するだけの生活。親が聞いたらどう思いますかね?」と一人言のようにつぶやく。

一番多感なときで、潔癖な年齢のはずだが、まるで疲れたサラリーマンのような生活をしている。青臭くてもいい。「人生とは?」「愛とは?」「仕事とは?」、そして「生きるとは?」といった、人生の根本を左右する疑問は湧かないのだろうか。生き方を揺るがすおざなりにできない問題だと思うのだが。

「とにかく目に入ってくるもの、耳に入ってくるあらゆることに憤慨したり、感動したりして、友達同士で朝までディスカッションなんていうことはないの?」という私の質問に、「それって、親父の時代ですよですね」と彼は笑って答える。

「僕は大学院の二年生です。タイが好きで、アルバイトをしてはタイに行き、そのうち、タイから周辺の国々にも行くようになり、それが高じて今では、アメリカの旅行会社の添乗員のアルバイトを授業の合間にするようになりました。これがなかなか勉強になり、面白いんですよ。学園のお子さん達がタイ旅行をすると聞きましたが、お役に立つことがあれば、情報でも何でもさしあげますからメール下さい」

真っ黒に日焼けした肌に真っ白な歯、切れ味のいい言葉づかいに、「久しぶりで、若者らしい若者に会ったな」と嬉しくなった。こんな学生さんがいないわけではないが、本当にまれなのだ。

◆生きがいから遠く離れた子供達

どうして若々しい大学生ではなく、くたびれたサラリーマンのような大学生が多いのだろうか、考えながら歩いていたとき、有名塾のかばんを背負った小学生が振り返って私を見上げた顔が、疲れたサラリーマンと同じ顔をしていたのには、正直びっくりした。世の中、何かがずれ、何かがいびつになっている。

受験戦争の最盛期には、大学受験日から逆算されたスケジュールの中で、自分で考える訓練をせず、テスト問題の暗記が奨励されるような極端な「詰め込み教育」が確かに存在した。業者テストによる偏差値とにらみあわせ、有無を言わず差し出される「入学できる高校リスト」も存在した。

現在は少子化などの影響で、受験に対する熱も一時より鎮静化しているかのように見える。しかし本質は変わらず、実際は潜伏^{せんぷく}しているだけではないだろうか。

かつて、そして未だ現在も、学生達は勉強したい学部も学科も明確にならないまま、偏

差値で選別された大学リストの中で、一番「有名そう」、一番「名が知れている」、一番「就職がし易い^{やす}だろう」という基準で選択し、学校を決めていく傾向がある。

こんな理由で決めた大学で「生きがい」を見つけたり、活き活きと学んだり、興味を持って勉強するなど、そういった思いが湧いて来るとは思えない。当の本人はもちろん、学校の先生も、塾の先生も親も、そのように入学を決めていく方法自体に疑問を持たずに、本当に彼らの将来を考えていると言い切れるのだろうか。本人にとって「大学」の持つ位置付けは、どうなっているだろうか。

こんな基準で「進学する」中で、子供達は自らの生きる意味をどこに見出していくのだろう。「就職」も同じ手順で決められる。だから、社会人になってどれだけの人が「活き活き」と仕事をしているのか、私には疑問だ。

たった一回しかない人生のあらゆることが、このように「逆転できない階層化^{かいそうか}」「納得を回避^{かいひ}した選択」によって次々に決められていく。だから自分から決してアクションを起こさずに、「こんなはずじゃなかったわ!」「こんな人生を送る人間じゃないんだ、俺は」と言って、世の中を恨^{うら}んだり、不平不満を洩^もらす人間が現れる。

「時代が変わった」「時代は変わりつつある」と言われれば、教育評論家が口を揃^{そろ}えて「好きなことを勉強させましょう」「制服、あれはいけません。子供の個性がなくなります」

などと言う。それを聞いて今度は、「そうだ、そうだ！」と何も考えずに同調する「そうだ同調症候群」と呼べる人達が出現する。これがどうも日本の特徴のようだ。

◆「自分基準」をしつかり築こう

今日という日は今日しかない。今という時間は今しかない、という当たり前の現実。辻褄つじつまの合わない議論をしてもいい。車が欲しいからと朝から晩までアルバイトをしてもいい。一日中、本三昧ほんさんまいでもいい。今という時間を今の年齢でしかできないことで楽しんで欲しい。そして、自分の今日、自分の未来は自分で選択し、それを一生に繋つなげて欲しい。

子供の役割は親を踏ふみ台にして、親の世界よりももっと大きな世界で自分の納得いく人生を作っていくこと。親は子供の踏み台、子供のサンプルになれるよう自分の人生をしつかり生きる。自分達を踏み台にして、どんな世界にでもはばたけるように、家庭でしておくべき最低限の人間としての決まり、マナー、善悪の価値基準を教える。

二一世紀、先例せんれいのない新しい世紀、世界基準の中で生きなければならぬ子供達。今までの日本の価値基準に振り回されず、「自分基準」をしつかり持てる人間になろう。そのために、あなた達を取り巻く大人達の一人として、私も頑張る！

上田学園の生徒たちが 制作したフリーペーパー 『CHAPS! きちじょうじ』

企画会議で語られたことば

「CHAPS!をやりたいと思ったのは、子供じみているかもしれないけど、日頃感じていることを言葉にして、地域紙っていう媒体を通して同年代と共感できるような感覚を持ちたかったから。食べることに死ぬほど困ることはなくて、時間がよく分からないまま過ぎていく。学校に通っている何年間っていう時間に意味を見出せないまま、差し出されたものを、なんとかこなそうとしているだけで、どっかに空虚さがあるなあと思うのだけど、世の中に目を向けようとすると、共感できるようなことが少ない。差し出されたものをこなせることは大切だけど、それだけだと哀しいから、共感できるものを作ろうと思った」

○ターゲットは16歳～25歳までの男女を含めた若者です
○街の情報収集を主な活動とし、それを記事として紹介するものです。情報に関しては店舗情報、商品情報や時事情報、その他。またマーケティングなどのためのアンケートなどの活動も行うものとします。
○無料のサービスであり、財源は広告収入に頼ることになります。(広告収入と支出に関しては予算の項を参照)
○まずは吉祥寺駅周辺(井の頭公園周辺を含む)での活動からはじめ、それを「CHAPS! きちじょうじ」として製作します。
○主なメディアは紙媒体であり、まずタウン誌として幅広く配布。またホームページを含めたインターネット環境での需要を考えて、ホームページ、またはi-MODEでの店舗紹介・検索、商品紹介も念頭においた情報収集をめざします。eメールでの配信も同様です。

2章 自立するためにどう学ぶか

5 「失敗」のススメ！

◆エリート学生と心療内科

最近本当に驚かされるのは、精神科や心療内科しんりょう内科にかかり、何らかの薬を飲んでいる方が多いこと。どうしてこんなに「心の病氣」を抱えている人が多いのだろうか。

先日、国立大学四年生だという学生が訪ねて来た。

大学生活はとても楽しく、成績も優秀で、何も問題なく四年生まで来たという。しかし、四年生になってから急に学校に行かなくなり、行っても落ち着かず、学校の友人や教授達と話していても疲労感ばかりつづいて、今ではほとんど学校に行けないという。たまに行くのはスクールカウンセラーのところ、カウンセリングを受けに行くだけだそう。

自分がどうしてこんなふうになったのか、原因がつかめないと言う。心療内科に通って薬を飲んでいとも言っていた。飲むと何となく心は落ち着いた気がするが、一日中何か身体がだるい気がすると言う。

彼は、今風のちよつと細身のなかなか礼儀正しい、素敵な男の子だ。

突然訪ねてきた非礼を詫^わびながら、心が何となく傷つき始めた頃に、上田学園のホームページに出会い、それで訪ねて来たくなつたのだと理由を述べた。

コーヒーより玄米茶^{げんまい}がいいと言う彼と玄米茶を飲みながら、学校のこと、就職のこと、将来のことなど、色々な話をした。就職はまだ決まっていないと彼は言う。

「結構優秀な学生と見られているので、ゼミの教授達もクラスメート達も『お前が一番初めに就職が決まるだろうな』と言われていたんですが、情けないですね」と言つて、チョッと悲しそうに下を向いた。

彼は就職するか、それとも大学院に進もうか迷っているとも話していた。また、混沌^{こんとん}とした今の社会でどんな仕事か今後、どの位の確率で大きく伸びるのか、どんな企業を選択して就職したらいいのか分からないとも言ふ。大学に入学したとき、どんな企業にでも行けるようにと、一応「経済学部」を選択したそうだが。

◆挫折経験なく育つと……

彼の話聞いていて気がついた。彼は生まれて初めて「挫折をするかもしれない」という「恐怖体験」をしているのだということに。

起承転結のしっかりした話し方。礼儀正しい言葉づかい。一見何でも自分でやってきたように見えた彼の行動は、実際、親が引いた幾つかのレールの中から選択したレールの上を、失敗しないように、ただひたすら走って来ただけであつたのだろう。今までのように親の手によってレールが引けない「社会」で、親の引いたレール以外のレールを、自分の考えや決断で引かなければならない現実突然ぶつかり、頭の中が真っ白になっている。

親以外からの評価を受け、自分の意志や考えで走らなければならない航路^{こうろ}。「就職活動」を通して、この現実直面したとき、始めて経験しそうな「失敗」に恐れを感じ、手に入るはずのものが手に入らないかもしれないという現実に呆然^{ぼうぜん}としている。それを素直に認めたくないという思いが、心を重く圧迫しているようだ。

そして、その現実を認めることのできない彼は、自分を「擬似病氣^{ぎじ}」に追い込むことで、現実から遠ざかり避難している。

親も子も病名が付くことで安心し、その中に身を委ね^{ゆだね}て、自分のことをまるで他人事のように「病気のせい」にすることで、安心しようとしている。

学校に行かれないようになって、親は「焦ることないわよ、大学院にでも行ったら？」と勧めるそうだ。しかしそれは問題解決にはならず、単に「問題の先送り」でしかない。本人も認めたくないが、それは認識している。それで苦しんでいるようだ。

◆失敗は学びの宝庫

子供は絶対、いつかは一人歩きを始めて大人にならない。骨太に社会を渡り、生き抜いていかなければならない。

大人になることをずっと拒否し続けることは不可能だ。それだからなおさら「失敗」を恐れるのではなく、「失敗」から学ぶことのできる人間に育てたい。そのために、小さいときから子供に「失敗」をたくさん経験させ、「失敗」からどう立ち直り、そこから何を学ぶかを、頭を通してではなく体験を通して、たいとく体得させるべきだ。

大人になるとは、単に図体が大きい人になるのではない。生きている人の先輩になることだ。若い人達のサンプルになることだ。そのために自分の身体を中心に、人として生きていく上で必要な「考える基準」や、「判断する基準」を存在させることだ。これらがきちんと確立されれば、問題が起きても何とか道はずさず、自分で考え、行動できるようになり、人間社会を形成する一員としての役目も担になっていきけるのだ。

大学四年生の彼は、玄米茶を美味しそうに飲み、ピーナッツやチョコレートを美味しそうに食べ、楽しそうに色々な話をして、「なるべく精神安定剤は飲まない方がいいよ」という上田学園の子供達からのアドバイスを御土産に、「また来てもいいですか?」と言って帰って行った。

その後ろ姿に学園の生徒の一人が、「信じられないな。あそこまで計算してエリートになって、就職活動が上手くいかないだけで、あんなになっちゃうんですかね。それに僕達の言葉が全然彼の中に入っていきませんでしたね。大丈夫ですかね？」と。

失敗から学んだら、それはどんな学問より素晴らしい。何故^{なぜ}なら、失敗があるから成功の道を探る努力をし、その過程で、理屈ではなく正しい道、上達への道がつかめていくのだから。

「大学生君！ 今からでも遅くないから、失敗を恐れずたくさん失敗して下さい。その失敗から色々なことを学んで、逞しく生きて行つて下さい。応援していますよ！」

我々大人も失敗を恐れず、自分達の失敗もしっかり認めて、それを土台にして次のステップにいく様を、たとえ不格好にみえても、二一世紀を生きていく子供達の先輩として見せていきたい。

今の時代は時として、苦手なこと、不得手なこと、できないこと等に目をつむり、何ができるか、何が優れているかのみに焦点をあてて、それだけを伸ばすことをよしとしているように思えるが、本当にそれでいいのだろうかと疑問に思うことも多い。表面的な格好良さだけを追いかけたり、コンプレックスを隠す手段として、「それは、僕には必要ありま

◎具体的に学力低下を感じる点とその要因

英語	・英文和訳で訳した日本語の意味を質問されることがある。 ・単語力、文法力が著しく低下している。 ・ひらがなの多用（漢字で書けない） ・考えながら自分のものにする姿勢が顕著に低下。英和辞書で単語を調べてもそこにある訳語をそのまま使うことしかできない生徒が増加。
数学	・不自然な流れがかえって理解を難しくしている。 ・多くの分野で教える内容が中途半端なので、その結果、定着・応用ができない。 ・分数、四則計算ができない。
国語	・文化的・社会生活的常識と思われることが著しく欠けてきた。 ・選んだり、バランスをとったりすることについては上手くなったが、現国などで深くつっこんでつめていくこと、考え続けることができない。 ・学習意欲の低下。古文・漢文などの文法事項が何度やっても定着しない。 ・誤字、または語句の誤用が多い。 ・語彙がなさすぎて読解ができない。比喩や抽象語についていけない。
物理	・数学力がない。グラフ・ベクトル・三角関数等を数学とは別に改めて物理の授業で伝えなければならない。
生物	・学力以前に身の回りの現象に対する興味・関心・経験が減ってきていると思われる。
世界史	・定期試験前に用語などをただ暗記することにつとめ、その流れや意義を問わない。
生徒気質	・自分から求めることができない。すべてセットになって与えられるものと考えている生徒が多くなった。 ・粘り強く考える生徒が減っているのは確かである。 ・自力で解決しようとする姿勢があまりない。 ・すぐにマニュアルを欲しがる。

出所) 河合塾「1999 Guideline 11月号 特集 高校生の学力問題を検証する」

せん」と言って自分を誤魔化ごまかすのではなく、苦手なこと、できないことを素直に認め、苦手なことや失敗から楽しく学ぶことを覚えて欲しいと思う。

できてやらないこととできないでやらないことは、同じ「やらない」といつても同じではないことを理解して欲しい。そこから初めて、本当に自分の優れているものを人にアピールできるようになっていくはずだ。

②章 自立するためにどう学ぶか

6 「とりあえず」はやめて！

◆「とりあえず」の進路決定、人生選択

就職活動をしているという若い人から電話やメールをいただく機会があるが、その中で気になることがいくつかある。それは「とりあえず」しておく」というフレーズだ。

「就職が難しいので今年は卒業を考えずに、とりあえず大学院にでも進もうかと思っています」という大学生。

彼らは本当に大学院に行きたいわけではない。「まあとりあえず、時間つぶしに大学院に行つて、何かを勉強しながら、就職活動でもしようかな？」という程度の考えで、大学院への「進学理由」としている。

『「とりあえず」と大学院に入つてこれたら、教授達もやりにくくて困るでしょうね』という私の言葉に、大学生達は「えっ、どうしてですか？ 今大学院に行く人達はそういう理由で行く人達が多いですよ」という答えが返ってきた。

何がしたいかわからないので、とりあえず大学に入り、就職ができないからとりあえず大学院に進む。一人で住むのも不経済だし、とりあえず一緒に住んで、ここらへんでとりあえず結婚し、とりあえずこのあたりで子供を生んで、エトセトラ、エトセトラ……。

そしてこの「とりあえず」の中に、どうもフリースクールの先生になることや学校の先生になることが入っているようだ。もちろん中には、本気で子供達のことを心配し、理解しようとして、フリースクールの先生の職に身を投じようという方もいるのだが。

◆「とりあえず」でやってはいけない仕事

お金を稼ぐことは簡単ではないし、楽しいことより、むしろ苦しいことの方が多い。おまけに、自分のした仕事の結果を見ることは意外やあまりない。ひどい場合は、自分の仕事は何のためにあるのか確認できないケースすらあるのではないか。それが一般的に言われている仕事の現実だ。

教師という仕事は、他の仕事に劣らず大変だが、それに勝る^{まさ}だけの楽しみもある。それは子供達が成長していく様子や、変化していく様子が自分の目で確かめられること。子供達の可能性を伸ばしてあげられること。それと同時に教師自身も成長させられることだ。

教師のどんな苦勞も子供達のひと言、うれしそうな顔、元気な様子で、全部きれいに吹

き飛んでしまう。そして「教師をやっていてよかった！」と心から自分に微笑んでしまう。つらいときでも「やっぱり頑張らなくちゃ」とつぶやいてしまうほど、子供達の成長が教員にとっての「活力の源^{みなもと}」となる。こんな素晴らしい仕事に「とりあえずやってみようか」の感覚で取り組んで欲しくはない。

世の中には、「とりあえず」で選択していいものと、してはいけないものがあると思う。人の命にかかわる医師や、人の人生を左右する裁判官など、こうした仕事は「とりあえず」といって選択してもらっては困る職業だ。そして、先生の仕事もこの中に入るはずだ。

◆フリースクールとひとくちに言っても……

特にフリースクールの先生になりたいという人とお話すると「困っている子供達の面倒をみてあげたいんです」と皆が一様に口にする。しかし「面倒をみてあげる」のニュアンスが、「一緒に遊んであげる」のニュアンスなのだ。遊んであげるのニュアンスが、「時間を一緒につぶしてあげる」のニュアンスなのだ。お金のために就職するのでもないし、それでは「とりあえず今流行のフリースクールの先生にでもなろうかな？」という、思いつきのボランティア感覚が感じられる。

学校の先生も、フリースクールの先生も、そうそう簡単な仕事ではない。特に現在不登

校児の増加が大きな社会的問題となっているが、こうした不登校児が在籍するフリースクールの仕事はそんなに甘いものではない。そういう感覚で捉えているとしたら、それは「美しき誤解」だ。

今のフリースクールには三つのタイプがあると考えられる。もちろん②と③の機能を併^{あわ}せ持つというように、弾力性^{だんりよくせい}のあるところもある。

①通信高校で高卒資格をとったり、大検受験をする学力をつけるための「サポート校」
②家に閉じこもって人と接触しないのでは精神衛生上良くないので、人と接触できる場所を提供する「フリースペース」的なフリースクール

③自分のための勉強をしよう、自分の可能性を見つけてみよう、という自分作りを主眼としたフリースクール

これは、学校に行きたがらない子供達の理由が大きく三つに分かれてきたことにもよるのだろう。

①何かしらの理由で勉強についていけなくなり、学校が面白くなくなったグループ

②人間関係の躓^{つまず}き、トラブルで行かれなくなったグループ

③学校でこんな勉強をされていて大丈夫だろうか。詰め込み式でまったく自分の頭で考えさ

せてくれない学校で勉強する理由があるのだろうか。もっと自分の知りたい勉強がしたい、と疑問を感じて学校に行くことを拒否したグループ

◆フリースクールの先生はボランティア感覚では勤まらない

確かに、タイプによってはボランティアや助成金で成り立っているフリースクールもあるが、基本的には、それだけではやっていけなくなると思う。

経済的な面ではボランティアの方々が入ってくださることは大助かりなのだが、子供達は毎日成長をし続けていく。その子供達に^{たいしょ}対処していく大人達には、体力、気力、知力が求められる。もちろんそれだけの労力もある。それに対し^{そうおう}相応のペイを受けとらなければ割に合わない。

子供達は自分達と付き合ってくれる大人達が本気かどうかをしつかり^{みぬ}見抜こうとする。ある意味、戦いの場と言ってもいい。結局、ボランティア感覚では気持ちの上で責任が育たないから教師はなかなか勤まらない。

いろんな理由で学校に行かなくなった子供達に、「とりあえず、面白そうだから家を出てそこへ行ってみたら？」と言うことはある。でも、その子供達を受け入れる先生や関係者が「とりあえず、そこで働いている人達」であったなら、そこは「本物」の場所ではな

いし、働いている人達も楽しめていないだろう。

行くときは楽しくなくても、そこへ行ったら、その人達が楽しそうにしているので思わず楽しんで、また「行きたくなった」という効果が起らないと、その場所の「存在意味」は発生しないと思う。

フリースクールの意味は大変重い。何しろ、子供達の将来がかかっているから。

いくら「お役に立ちたいのですが」と思ってもらっても、一度関わると、そうそう逃げられないし、条件が悪くなっても続けてもらわなくてはならない。それを、安易に「とりあえずボランティアで」と言って始める。その結果「こんなに大変なのが分かっていたらボランティアはしなかったと思います」と言われても、言われた学校も困るだろう。

また、そう言って辞めていく先生の後ろ姿をみる子供達も悲しむだろう。だから「とりあえず」教師になるのは、真剣に取り組めるようになるまでやめていただきたいのだ。

年月が過ぎれば子供は大人に、子供を持てば親に、誰もがなる。しかし、自分の分をわきまえて、しっかり自分の責任を果たせる大人や親や教師になるのは、思っている以上に難しい。人を育てる前に自分が育たなければならない。まずは自分自身を見つめ、その後子供達のお手本になるためには何が必要なのか、合わせて見つめて欲しい。

7 一番美味しい時

◆余韻^{よゐん}を楽しめる人生を送っていますか？

「先生ゴメンナサイ。こんなこと言ってスミマセン。でも、どうして日本人は五分間を楽しみませんか。一番美味しいところでバタバタします。それが嫌いです」

日本人への皮肉のつもりだろう。ゴメンナサイとスミマセンを連呼^{れんこ}しながらオランダ人の学生が話し出す。

例えばいい音楽を聴いたときの醍醐^{だいご}味^みは、演奏^{えんそう}が終わった後に流れる余韻。その余韻に酔^よいしれているときに至極^{しごく}のひとつときではないだろうか。そのひとつときが欲しくていい音楽を聴きに出かける。いくら日本のチケット代が高くても生の音楽を聴きたいと願う。

でも、一番美味しいところをまったく楽しまない日本人が多いと言う。たった五分間の余裕。たった五分間で味わえる至極^{しごく}の時間。そのたった五分で味わえる楽しみをどうして日本人は楽しまないものかと、そのオランダ人の学生は言う。

日本では一九五〇年代あたりから、大学受験に子供の人生の照準しょうじゆんが合わされ、効率的な勉強方法を求め、知識重視、管理強化の傾向に流れ始めた。六一年には全国学力一斉テストが導入され、七四年には高校進学率が九四％を突破した。センター試験の前身ぜんしんである共通一次試験がスタートしたのは七九年のこと。しかし、七〇年代から始まった「詰め込み」教育批判と同時に「ゆとり」教育が時代の趨勢すうせいとなり、授業時間数は減っていく。その中で台頭してきたのが塾だ。

社会的成功へと通じる一本しかないレールの上を失敗しないように注意深く走り続け、あらゆることを結果から逆算し、無駄はぶを省いて行動する。

確かに長い人生の中では、そういうことをしなければならない時もあるだろう。しかし、人生のすべてがそうだと考え、行動するのは明らかにおかしい。端から見ても苦しそうだ。とても楽しそうには見えない。真似まねしようと思えるほど素敵な生き方にも見えない。ただただ自分をがんじがらめにし、何の余韻よゐんもないまるで「機械」のような生活をしているように思える。

五分間の狂いもないように計算された人生が、本当に計算通りになっているのかどうかというところかなり疑わしい。

人生の長さは人によって違う。しかも、誰も自分の人生の長さは分からない。分からないということは、計算通りの人生を送ろうと思っても、本当は計算できないのだ。時には計算ばかりせず、人生の計算を無駄なあがきと放り出してみてもいい。「五分間の余裕」もとれない人生を過ごすのはどうしても幸せには思えないから。

果たして、時代が変化していることにすら気付けない大人が素敵に見えるだろうか。余韻を楽しめる身の丈に合ったゆったりした人間らしい生の送り方が分からない大人に果たして子供は憧れるだろうか。

これからの子供達には、自分の周りをきちんと眺められる余裕を持ちながら、骨太に自分一人で食べていける力を身につけて欲しい。そして、大人になったとき、ひとときの余韻を楽しめるようになってもらいたい。

◆大人は五分間の余裕を楽しもう

長い間、私達大人は子供達に、成功への方程式から逆算し、それに沿って行動するプログラムを義務のように押し付けてきたのかもしれない。

そして、そうしたプログラムを窮屈きゅうくつに感じたり、何かが間違っているという危機感を持った子供達が起こしたのが「不登校」というより、むしろ積極的意志として選び取った

「^{とうこうきよひ}登校拒否」だ。

こういった子供達の^{かん}勘の良さには驚かされる。親の引いたレールを、ただひた走りに走っているから「失敗しない」などという保証は期待できないことも、学校生活を上手にやっているから「頭がいい」ことではないことも、どこかで嗅^かぎ分けている。

しかし、「頭でっかち」なのに、心は「ありさんの心」のように小さい今の子供達。だから、計算外の出来事を^{きよくたん}極端に怖がり、分からない、計算できないことにぶつかっていきたがらなくなっている。予想外の五分間の出現に戸惑い、混乱してしまふ。

頭の中にいっぱい未経験の情報を詰め込み、どんな人生が歩みたいのか分からなくなっている子供達。彼らに向けて「苦しまなくてもいいよ」と伝えられるのは、計算外の五分間を楽しめる大人だけではないだろうか。

人生はたった一回だ。びっちり隙間なく計算されたスケジュールに振り回される人生ではなく、五分間の余裕を楽しみ、心がゆったりできる中で過^{あや}ごさなくてはもったいない。

ふっとした何^{なに}気ないことから湧き出るような計算外の出来事の「余韻」を、じっくり楽しめる人生を歩んで欲しい。いい音楽を聴^きいた後のふわっと心に広がっていく、あの至極のひとときのような余韻をじっくり味わって欲しいと思う。

8 自分作りをせずに自分探しができる？

◆日々是発見

「まあ、お元気ですね。いつもニコニコしていて、パワーがありますね」と言われる元気印の私も、毎日毎日が悩みの連続だ。眠れない日は、母の「死んだらゆっくり眠れるから、眠れなくても何ていうことはないわよ!」という口癖くちぐせを心の中で繰り返しながら、本を読んだり、悩んだりする。すると今度は、テレビで拝聴はいちようした瀬戸内寂聴せとうちじやくちようさんの言葉が聞こえてくる。「悩むことなかれ」と。

「悩みのないのが悩みなのよ」と公言こうげんしていた頃が嘘のようだ。「ああ、彼のよさが一番輝くように育てるためには、どんな指導がいいかな?」など日々悩みは尽きない。

この他にも「あの子の長所を生かしながら、無視していい問題と、解決していかなくてはならない問題をどう理解させようか」と頭を抱えたり、「経営者として、もう少し厳しくないといけないかな」と悩んだりしている。

こうした悩みの毎日だが、私には幸運なことに、色々なことを気付かせ、発見させてくれるたくさんの方がいる。私の周りにいる日本語の先生達や外国人学生、そして生徒達だ。

私は子供達に自分らしく、自分にあった人生を歩んで欲しいと願っている。人生を終えるときに「俺は一生懸命生きたぜ。満足だったぜ！」と心底から言える納得した人生を歩んで欲しいと願っている。そのために自分らしく生きるためにはどうしたらいいか「自分探しをしよう」と言っていた。

しかし先日、学園の先生と話していて気付かされた。自分探しをすることも大事だけれど、今は「自分作り」をさせることが大事なのではないか、ということに。

◆まず「自分作り」からはじまる

私はずっと「自分探しをしましょう！」と言ってきた。しかし、「自分探し」という言葉には二つの意味があることに気が付いた。

まず自分がどんな人間で、どう生きていくべきかを考えるということを「自分探し」というのであれば、自分とじっくり「対話」しなければならいだろう。しかし自分とじっくり対話して、自分を探すのは大変なことだ。それには、対話する内容のたくさんつまつた自分がいなければ、対話できない。自分の中に何もない人が「自分探し」をしても、そ

れは見つかるはずがない。

またもうひとつの意味の「自分探し」とは、人としてこの世に生かされている意味、つまり、自分に与えられた社会での役目を見つけることだ。いろんな人との関係の中で、「いるべき自分のポジションを探す」意味がある。どこか知らないところに本当の自分を見つけないに行くのではなく、しっかり他者と向き合い関わり、現実の世界に足場を築いていく。

これは頭の中で探すのではなく、行動することで手応えを得るのではないだろうか。特にバーチャル世界だけで生きる傾向のある現代っ子達。間違えることを「恥」と考えがちな現代っ子達が、頭の中で考えて「できない、駄目だ!」と結論を出さないように、頭の中のシミュレーションだけでは計算できない予想外の出来事を、自分の中に取り入れていく訓練が大事なのだ。

自分作りをしながら、実際に動いて、傷ついて、「これでいいのかな、あれでいいのかな」と自分にふさわしい足場を見つけて欲しい。そこで自分をしっかり築いて欲しい。そして世界で自分が一番活き活きできる「自分のポジション」を見つけて欲しいと思う。

「自分探し」という快い言葉に酔って、考える振りをして逃げないで欲しい。逃げながら、口だけは開けて、自分が「美味しい」と思うものだけを食べていると、彼ら自身が骨太に世間を渡り、生きていく力を弱めることになる。

◆夢に出会える人になろう

私は夢を自分の手で実現するための「道具の使い方を学ぶ場所」として、この学園を位置づけている。「夢の手作り工房^{こうぼう}」として機能することを考えている。そして、今は自分の人生を自分の手で作っていけるように、時間をかけてでも見守り、子供達に努力していくよう指導している。

手作りの自分の人生なら、それは必ず納得のいく人生になるはずだ。しっかり自分の手で自分を作る努力をしているうちに、夢を持っている人、いない人に関わりなく、「夢」に出会えるのだと思う。

しかし、私は学生に対し時として「鬼」になる。それは学生自身が独り善がり^よに陥^{おちい}ったときだ。どんなに厳しくとも、なるべく客観的に見た感想を、率直に学生達にぶつける。例えば「自分探しをしています」といつて怠^{なま}けようとしたり、自分自身を煙^{けむ}にまいて問題の先送りをしようとする、私は「鬼」になる。今という時期を逃^{のが}がすと本当に駄目になつてしまうと思うから。

他の誰かと比較しなくていい。オンリーワンになったらいい。誰かの思惑^{おもわく}通りにならないくていい。まず自分としっかり対話して欲しい。そして永遠の自分探しを続けるのではなく、今はしっかり自分作りをして欲しいと思う。

9 現代の若者

◆育っている素敵な若者

一、二年前から「現代の若者をどう思いますか？」という類たぐいの質問をよく受けるようになった。その度に、「ああ、こんな質問を受けるほど他よそ所様から見ると、私は歳をとったのか」と、内心ガツカリしていたのだが、最近になってようやく気がついた。これは、年齢の問題ではなく、どうもフリースクールをやっていることから来る質問なのではないかと。「現代の若者をどう思いますか」という質問をされる度たびに、「今の若い人と話をすると、知っているはずの日本語が宇宙語のように感じるし、モラルなどという言葉は旧石器時代から存在しなかったように感じる」と少し可笑おかしみも込めて答えている。外見も大きく変わった。女子の背丈は急に伸び、百七〇センチ以上もざらである。頭は金髪、爪は真っ黒なマニキュア。足も長く、後ろ姿からでは男女の区別もできない。その上、学園で私が関わっている若者は、明るい不登校に暢のんき気なパラサイト。

「現代の若者のことをどう思いますか」と聞かれて、結局一括りひとくくにした感想は述べられない。だからと言って、彼らを認めていないかといえば、それも一概いちがいには言えない。私達の若いときも、散々さんざん大人達に言われた。「今の若者は、まったく理解に苦しむ」と。

今も昔も、素敵な若者がいれば、嫌な若者もいる。ただ歳のせい、若い人を厳しい目で見るようになったのは事実だ。しかし、その事実を差し引いても、すべての若者に満点にせものはあげられない。一番気になるのは、「本当の君は、違うよね？」と聞きたくなるような、偽者の自分を演じている若者が増えているように思うことだ。それだけに、自然体の素敵な若者に会うととてもうれしくなる。

先日、ニューヨークで活躍する二五歳の若者が学校に訪ねて来てくれた。彼は慶応大学を三ヶ月で中退し、リュック一つで海外を放浪ほうろう。その後、旅先でいろんな人との出会いがあり、現在は、フランス人の教授と一緒に彼のアイデアで特許をとり、アメリカ人の投資家に投資をしてもらい、会社の社長をしていると言う。

国籍を問わなければ、このような話は結構海外では聞く話だ。ただ、彼のすごいところは、インド人の技師達ぎしにインドで会社を作らせて、インドの発展のために技術者を育て、一人立ちできるようにすることを考えていることだ。

極端な話、インドでは大学に行く年齢層が二〇〇〇万人居て、そのうち大学に行けるの

は二〇〇〇人。そのうちの二〇〇〇人が工科大学に入学でき、そのうちの二〇名がコンピュータ関係の学部に入れるそうだ。

それだけに、優秀なIT関係の技術者は世界的に高く評価されている。彼らは重宝がられ、世界の技術先進国に引き抜かれていく。だからなかなか地場産業^{じば}としてIT関係の企業が育たない。これがインドの実状だそうだ。しかし、彼が手を組んだ優秀なエリート集団は、「インドで会社をつくり、インドのために、インドの人達を育てたい」という彼の願いに共感し、それを応援する組織作りに参加したのだと言う。

確かに、発展途上国に様々な日系企業が進出した。現地で一生懸命、順応し、活躍している。しかしその中のいくつかの企業が、その国を育てようと真剣に考えて、組織作りをしているだろうか。二五歳の彼は、それを当然のこととしてやっている。

彼は言う。

「前に進むと考えると、知らない未知の国に行くみたいで不安になるけれど、『自分の居るべき本来の場所に帰る』と考えると自然なので、気が楽になるのではないでしょうか」

◆若い人の可能性は大人の物差しでは計れない

私は学園の学生に、「そんな小さいことにクヨクヨするより、世界を相手に生きたら」と

いつも話している。しかし、ニューヨークから来た彼にこんな言葉は必要ないだろう。いとも自然に地球を相手に生きている。

地球を相手に楽しんで仕事をし、活躍している彼の話に思わず、「お話、ありがとうございます。さうございました」と最敬礼^{さいけいれい}。そして、「なんて面白い若者が育っているのだろうか」と感嘆した。こんな若者がいるかぎり、「現代の若者をどう思いますか」という質問に、ネガティブな意見は答えとして似合わない。

若い人の可能性は、大人の物差しでは計れない。また計れるつもりになつてはいけない。どんな子供にも可能性があり、大きな未来がある。この事実を改めて認識しないと、それを育てる土壌^{どじょう}作りをするより、むしろ無意識に潰^{つぶ}してしまいかねない。この学園は小さな学校だが、子供達が持っている可能性や未来につながる力を培う土壌の一部でありたい。そうやって存在できたら、どんなにうれしいかと思う。

次回帰国したら、学園で子供達に色々な話をしてくれると言う。どんな話が彼の言葉で語られるのか、今から皆で楽しみにしている。

こんな素敵な若者に会える子供達は幸せだと思う。そして私もまた、この素敵な若者から色々なことを学ばせてもらえることに、心から感謝している。

10 子供達の節目、学校の節目

◆突然訪れる生徒の変化

学園は二年間の学校だ。三年目を希望する場合は、学園に在籍する^{ざいせき}ための条件が出される。その条件は、生徒によって変えるようにしている。なぜなら、一年在籍を延長するには、生徒側にそれを希望するだけの理由があるはずだからだ。そこで、その理由を聞いた上で、学園側も条件を出す。

不思議なことに、どの学生にも一年の中で大きく変化する時期がやってくる。学園に入った学生達が、毎日変化、成長していく中で、それがいかに小さな変化、中位の変化であったかに気付かされるほどの、大きな変化を遂げる節目が訪れる。

今年もそんな節目を迎えた生徒がいる。

ここ何週間かの彼の目にあまる行動に、私は爆発した。そして、「私はあなたを逃がさないから!」と徹底的に話しあった。そして、話し合っている間中、「本当に善い奴だ。本当

にかわいい奴だ。でも、誰も本当のことを告げず可哀相な奴だ」という思いが、私の心を駆け巡っていた。

「ほんとのことを言うのは、いちばん簡単なことなのに、それができなくなっているからことばがどんどん腐って死んでいく」

吉本隆明氏が言っていたことをふと思い出した。

私は、人は誰でも何らかのハンディキャップ、すなわち「不利な条件」があるのが当たり前と考えている。しかし年齢、性別、学歴等に全く関係なく、どんな条件の人達とも、一人の人間として「対等」に付き合うべきだと考えている。

それだけに、子供達を「可哀相」などと思って決して付き合いたくない。私のアドバイスを聞くか聞かないかは彼らの選択。でも対等に付き合うのであれば、「おかしい」と思うことは、絶対納得するまで話したいと思う。

彼は一年目の節目を無事超えようとしている。何も知らない先生達から「どうしたんだ？　すごくスッキリした感じがするけど、何かあったのか？」と質問されている。

「先生、明日の夜お時間がありますか。申し訳ないんですが明日、時間があったら、話したいことがあるんですが」

電話の向こうから節目を無事超えそうな生徒の明るい声が聞こえてきた。久しぶりで何かが吹っ切れたような明るい声。その声を聞いたとたん、うれしさと愛おしさがあふれ出し、電話の向こうの生徒をぎゅっと抱きしめたくなるほど、ジワジワと心の底から湧きあがってくる幸福な気持ちを感じていた。そして思わず、「だから、どんなことがあってもギブアップしたくないのよね、この仕事」と呟いていた。

◆子供達の意欲にスイッチが入る

「人をお願いをするのに遅れて来るとはどういうこと？」

三分遅れでやって来た学生に野原先生の厳しい言葉が飛ぶ。その言葉をきちんと受けて謝罪する生徒。そこには、これから何か新しいことが起こりそうな何ともいえない心地よい雰囲気^{ただよ}が漂っていた。

「先生、これだけの初期投資^{しよきじうし}をして下さい」

野原先生の授業で行う「野原組」の仕事についての試算表^{しさん}を提示しながら、学生達が説明を始める。学生達は彼らの目から見た吉祥寺という街を、『CHAPS！きちじょうじ』というフリーペーパーのタウン誌にしてみたいと言う。どのように取材し、どのように営業し、どのような紙面にするかという企画会議をしたと言う。すでに、印刷屋^{まね}さんを招い

て、紙や印刷についての講義もしてもらっていた。

今学期の野原先生の授業内容についての企画会議があると聞いていたので、多分その企画会議で話し合ったことが「はずんだ声」の一因だろうと察しはついた。だから、あの何とも希望に満ちた声を聞いたとき、「少しくらいの難問は、頑張っなんもんて聞いてあげよう！」と心に決めていた。

いくつか疑問に思うことを質問し、その答えを載せた企画書の再提出を要求した。そしてその要求に対し、「火曜日にはメールで提出ていしゅつ致します」と返事する彼らが、チョット大人になったように感じた。

学園で学ぶ学生達には、常に風通しを良くするよう心がけ、社会から学ぶ機会をあげてきた。できるだけ社会から「隔離かくり」しないよう心がけ、学生自身が納得したならば、外からの取材でも、見学でも大歓迎かんげいで迎え入れた。

「大丈夫ですかね。仕事の経験がないのにいいんですかね」と心細うつつ気に訴える学生に言う。「いいじゃないの。やって失敗してみれば。その経験はどんな経験にも勝まさると思うよ」

私はいつも学生達に言っている。

「先生から教えてもらうのではなく、先生の持っている知識・知恵・経験・体験、何でもとっていきなさい。そのために、ただ口を開けているのではなく、あなた達から先生に働

きかけなさい。アプローチしなさい。方法が分からなくてもいいから、やってみなさい。やっているうちに、理屈でなく、どうやったら人の心が開くか体験できるから。それが上手にできる人が、自分のやりたいことをやっている人に多いのではないかしら？」

学園はまだまだ小さな学校だ。でも、三人の在校生の中に既にすでに小さな社会ができ、お互いが良い影響を与え合って、グングン力をつけていきそうな勢いが感じ取れる。

新学期が始まり、まだバタバタしていたところに、早稲田大学を中退した後、授業料も生活費もコンピュータで稼かせぎながら入学した息子^かを心配した彼のお母さんがやってきた。「学園の先生方の目がキラキラ輝おいていて、眩まぶしくて見ていられなかった」という感想を述べ、一泊した彼のアパートで美味おいそうにビールを飲んで帰って行ったそうだ。また、ある学生のお母さんは、「一ヶ月もたたないうちに、子供の時のような良い顔になり、主人と『ミラクル！』と話しております。本当に反省しております」と話して下さった。

学生の一人ひとりは本当に素敵で、可能性を沢山持たくった子供達だ。それだけに、彼らをとりにくく私達は、しっかりと自分の生き方を追求していかなければと思っている。

子供達、頑張れ！

私達も負けずに頑張るから。そして一緒に学び、役に立つ学校をつくろうね。自分の人生を自分ほこに誇れるようになるために。

◎上田学園の時間割と授業

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	土曜日	単発授業
10:00						石束	
10:30	基礎授業	基礎授業	基礎授業	基礎授業	基礎授業		
11:00							
11:30							
12:00							
12:30							
13:00	上山	上田	神崎	藤本	伊藤	野原	
13:30							
14:00							
14:30							
15:00	曾瀬	見上	高橋	麻生			
15:30							
16:00							
16:30							
17:00	ソーバー		川戸				
以降							

基礎授業 「読み書き計算」 各人が不得意とする基礎部分を発見し、重点的に強化します。

上山 ディベート ディベートを通して、人と話をする時の話の組み立て方を学びます。

曾瀬 マーケティング 自分がお店を持つならどこに、どのようなお店をもつか。商品開発まで学びながら客観的に物を見ることを学びます。

上田 日本語の教え方 外国人に日本語を教えながら、国語や日本文化を確認します。

見上 音楽・哲学 「星の王子様」をイタリア語、ロシア語、フランス語、英語、スペイン語、ドイツ語で読解などをやります。

神崎 気功 人前であがらずに喋るように練習したり、人と人の間の距離のとり方を考える。健康になるための呼吸方法などを身に付けます。

高橋 昆虫学 昆虫とその周りの世界を楽しむ。年齢・学歴に関係なく学ぶ姿勢を学びます。

川戸 水泳 マイペースで身体を鍛えよう。心身を健康にします。

ソーバー タイ語 日常会話、文字練習。タイ人の考え方を子供の絵本を使用しながら学びます。

麻生 話し方・コミュニケーション 声優の経験を活かし、色々な表現の仕方をプロの人から盗んじゃいます。

伊藤 企画 旅行会社勤務の経験を活かし、買い付けの企画を立て、営業から最後の買い付けの添乗アシスタントまでをやります。

石束 ビジネス研修 足元にいっぱい仕事の情報があり、それを生かすも殺すもその人次第であることを学びます。

野原 タウン誌作り・企画書の作成 取材しながら社会と会話すること、伝えるための文章力、人を動かす指導力などを養っていきます。

藤本 株の取引(投資教育)を通して金融のしくみ、自己責任の原則を学びます。

②章 自立するためにどう学ぶか

二児の母から上田先生への手紙 2

これは先生に相談です。来年の4月子供が小学校に入学の予定で、私の住んでいる地区は小学校の選択性を導入しています。我が家から通える範囲では二つの学校の実験校があり、その選択に迷っています。一つの学校は、公立ですが進学校ではほぼ90%の子供が中学受験をします。形式的には本来は区域外で、越境入学になりますが家からは7分ぐらいと最も近い学校です。もう一つは、いわゆる地元の学校。進学率でいえば1クラスそれでも4、5人は受験をするそうですが、基本的にはのんびりとした学校です。(でも小学校選択性になり、公立とはいえ近隣校との競争があるので先生方は大変そうですが)

ゆとり教育という名のもとに行われる教育内容の3割削減で学力が低下するのではないかという心配と、ゆっくりのんびりと子どもらしくというのと、何か究極の選択のような気がしています。子供自身は保育園の多くのお友達が行く地元の学校を希望しています。基本的に子供の希望を重視しようと思っていますが、先生に何かアドバイスをいただければと思います。

親御さんとしてお子さんにどんな人になってもらいたいですか。どんな社会で生きていてもらいたいですか。お子さんのご性格は、どんな性格ですか。のんびり型、それとも競争好きですか。子供がまだ小さいときは、子供に好き嫌いはあっても、本当に有利な選択をする基準は自分の中にできていません。親が説得するしかない場合もあると思います。そのとき、日頃からご自分は親として子供にどんな人生を歩んで欲しいか、よく考えておき、子供に伝えていくことだと思います。

私が親なら、よっぽど悪い評判がないかぎり、家に近いところを選びます。学校の一番の勉強は大勢の人の中で、どう人と関わっていくかを学ぶことだと思っています。また、小さいときから、時間に遅れない。宿題をちゃんとする。忘れ物をしない等をしつけたいし、時々友達とどうやって帰ってくるのかを見たいので、家に近い方が親に便利だからです。それ以上に子供にとって、近所に友達がいることがとても大切です。遠くの学校に行くのもいいですが、友達との交流が家に帰ってからなくなってしまいます。携帯で話することは、私が親ならさせません。

それと、基礎学力(国語力と算数)がきちんとついていくか、そのところに注意を払えば、あまり学力低下の問題はご心配いらないと思います。毎日の生活の中で、本を読む楽しみや、何にでも疑問を持つことを教えてあげる。親御さんが沢山本を読み、楽しんでいるところを見せたり、道を歩いていても何にでも興味や疑問を持ったりすることを見せることで、子供が何にでも興味を持てるようになっていきます。

3章 子育ての論点



1 好きなことを自由に学ぶ でも、苦手なことも楽しんで学ぶ

◆基礎学力がないと……

フリースクール、自分作りスクールなど、現在、この学園のように一般的な学校とは異なる運営方式を持つ学校が全国各地にたくさんできてきている。こうした学校に共通しているのは、従来の学校の枠わくでは対応しきれない子供が集まっていることだろう。

また学びを自由に選び取る選択肢の幅が、制度に縛しばられた従来の学校よりも相対的に広いことだ。だからそこで、決められた授業を設もうけず、子供達にやりたいことをさせていれば彼らは活き活きするのもかもしれない。が、「でも」なのである。

学園を始めてから四年が経たつが、設立当初から変わらぬ思いがある。試験が終わった後は、全部忘れてしまうような勉強ならさせたくない。何に役立つかわからない授業はしたくない。教育は「考えるための道具箱」なのだから、その道具の使い方、利用の仕方、工夫の仕方を学ばせたいとずっと願ってきた。

こうした間、何時いつも感じていたことは、基礎学力の大切さだ。彼らには小学、中学校で学ぶはずの基礎学力をつける必要性があった。基礎学力とは道具箱の中の道具。道具箱の中に基礎学力という道具が入っていないくは、まず道具の使い方を教えようにも教えられない。

簡単に言うなら、「自由に学ぶ」という名目めいもくのもとに、「好きなことだけを学ぶ」という選択をした時点で、一生算数や計算が苦手になったり、辞書の引き方を知らない不便な生活しを強いられるかもしれない。自由に学ぶことを選びとる子供達は、一見、利益を得ているように見えるが、実は将来に対し可能性の幅を狭めせま、決定的な損失そんしつをしてしまうのではないだろうか。

本来、しっかりした基礎力が入っていればいるほど、本人の自由度は高まるのだ。

基礎学力がないとたとえ面白く学べるチャンスがあっても、このチャンスをつかめないし、面白さにも気付かず素通りすることになりかねない。また社会には、「学習や訓練によって知識や技術を身につけた者が、人生を有利に、また自由に生きられる」という合理性も厳然げんぜんとしてある。

◆嫌いなことをしてはじめて好きなことも分かる

私達、子供を取り巻く大人は、子供がはじめから何か好きなこと、やりたいことを選びとれる、という幻想を過度に抱いてはいけないと思う。

好きなことを選択するためには、嫌いなこともいろいろ経験してみなければならない。

こうした経験を通してはじめて、何が好きなのか分かりはじめるのだと思う。

そのために、何でもまずやってみることが大切だ。何もまったく体験をせず、「嫌そうに見えるから!」とやらなかったら、それは単なる「食わず嫌い」と同じになってしまう。

トラウマ（精神的外傷）になるほど無理にやらせてはいけないが、それでも「はじめの一步」を踏み出す勇氣は必要だろう。むしろ、ここでは大人達が子供にきつかけを与え、子供達を踏み出させる勇氣を持つべきだ。どこかに動機付けを見出だせば、子供達は必ずやりはじめるのだから。

誰でも自分の好きなことや、やりたいことだけをして生活ができたなら、こんな幸せはないと思う。しかし、あたかも毎日がクリスマスのように贅沢な食事やプレゼントが氾濫している時代、一体どれだけの多くの人が、胸をわくわくさせて何かを待つというような楽しみを感じているだろうか。

特に人から注目をひくような劇場型の犯罪をおこした子供が発する、「何か刺激が欲しかったから」「生きている実感が欲しかった!」というコメントを聞くと、思える。

子供達が好きなことを自由にできる学校が必要なのではない。何かを伝えたいという思いを持った先生達がそこにいること、そして自由に子供達に伝えたいメッセージを伝えられる学校が必要なのだ。

自由を謳歌おうかするためには、自分で自分を律りつする力が前提として求められる。選択をした時点で発生する責任や義務がある。これらをしっかりと教えていかなければ、今や社会現象になっている「不登校」や「引きこもり」が増えつづけると思うのだが……。

皆で是非、アイディアを出し合い、考え、そして伝えたい。はじめは乗り気がしないことや嫌いでも必要なことをどうやって楽しくするのかを。嫌いやなことも、見方を変えたり、方法を変えたりすれば、まるで違ったように見えてくることを。

甘さがたりないときには、チョットとお塩を振り掛けることで、甘味が増したように感じられるのと同じように、ちょっと厳しいアドバイスを送ることで、子供の人生に深みが増すのではないだろうか。そして、単に苦手や嫌いという理由で逃げてばかりいると、自分の生きる世界が狭せまくなり、つまらなくなることを、私達大人は伝えていかなければならない。

2 本当の意味の「ゆとり教育」って？

◆耳に心地よい言葉のビタミン剤

現代という時代が^{かわ}渴き、^{さつぱつ}殺伐としているせい、言葉の「ビタミン剤」として耳に^{こころよ}快い言葉を無意識に欲しがる人が多い。

そんな中、ゆとりのある生活で、ゆとりのある教育をして、ゆとりのある子供に育てよう！ と、何でも「ゆとり」という言葉をくっ付けていた時期がある。これは聞く者の耳に心地いい代表的な言葉のビタミン剤の一つだと思う。

しかし、確かに耳にやさしいのだが、肝心の「ゆとり」という言葉の使い方が^{くうきよ}空虚に^{ひび}響くのはなぜだろうか。

私は「ゆとり」という言葉を聞きたびに、「えっ、違うんじゃないか」と、「ゆとり」を連呼している方々に質問したくなる。特に、教育現場で使用される「ゆとり」という言葉の使われ方が違うのではないか、と常々思ってきた。

「ゆとりのある生活で、ゆとりのある教育をして、ゆとりのある人間に育てる」という主張は、誰もが考える正論ではある。しかし、かけ声ばかりで肝心の「ゆとり」教育のビジョンが見えてはこない。また、現実世界の事態はゆとりの本質からかなりかけ離れているように思える。

例えば、ローンに支えられた生活の中で何でも買い与え、ゆとり教育という名目で減っていく授業時間を、受験に間に合うように補^{おぎな}おうとして、生徒の理解度に関係なくフルスピードで駆け抜けていく現実の授業……。

また、「ゆとりのある人間に育てよう」というかけ声は、人間としての規律や責任をとらず、自由や権利のみを与えた放埒^{ほうらつ}な「勝手人間」を育てようとしているように映るのだが、これは私の目の錯覚^{さつかく}だろうか。

◆「素敵な生き様^{ぐさま}」が子供にパワーを与える

「こちらの学園はいいですね。何しろ先生が二〇名。生徒が少数。本当に理想の『ゆとり教育』をしているんですね」と、現役の中学校の先生が羨^{うらや}ましそうに語った。言葉が続けて、「私もそんな学校でのんびり教えてみたいです。きっと教壇^{きょうだん}に立つのが『楽^{らく}』でしょうね。先生の公募^{こうほ}をなさるときは是非、お声をかけて下さい。三〇年近く教壇^{きょうだん}に立っており



ますのできつとお役に立つと思います」。

この学園は社会でいうゆとり教育をしたくて生徒が少数で先生二〇名なのではない。早い話、単に生徒がいなかったのだ。しかし生徒が一人だろうが一〇〇人だろうがやりたい教育をやることに変わりはない。

生徒数が少ないのは困りものだが、もっと頭を悩ますのは教師、すなわち人を教えられだけの理想的な「人材」の確保である。

「教育は考えるための道具箱」と位置付けている私にとって、その道具箱の道具を自由自在に使えて、そのうえ生き様ざまの素敵な先生を探したい。理想教育をしようとして創った学校だから、学生の人数に関係なくその理想を「実践」するのは当たり前だが、求めている教師とどうやって会えるかと、ずっと頭を痛めていた。

そして気が付いた。「普通の学校の先生は学園の教師にはお願いしない」と決めているのだから、周りを納得させるほど「素敵な生きざまざまをしている人を先にさがせばいい」と。

子供は決して天使ではない。むしろ小悪魔だ。だから大人に対して容赦ようしやしない。学歴や経歴といったものよりも内面を見抜き、厳しくジャッジする。だから、教師経験のあるなしは基準にしなかった。子供に真摯しんしに向き合える姿勢や資質を持っているかどうか、教える科目や事柄に対して本人がどれだけ情熱や憧れを持ち、それを相手に伝えられるかどうかどう

かを基準にした。

◆生徒の人数とゆとりの関係

そんな思いで、自分の回りをぐるっと見回し、今まで「おもしろい！」と思ってお付き合いしていた方の中に素敵な先生になれそうな人材が沢山いた。彼らを口説いて、口説いて、口説きまわって、ありがたいことに理想とする良い先生や良い先生候補者達が揃った結果、先生が二〇名プラス先生候補者数名という、先生の方が多い学校になったただけだ。

生徒数が多い方がそれは断然^{だんぜん}いい。色々な問題が起こるのはむしろ楽しい。子供間の人間関係も複雑になり、その中から子供同士が刺激を受け、学び合える。

人数が少なすぎると、逆に目が行き届きすぎてしまう。すると生徒が工夫したり、努力する前に答えが与えられてしまうような現在の「親子」と同じような関係が、学校の中でも起こってしまう。皮肉なことに、学校でも家庭でも、ゆとりのある人数とゆとりのある時間が、自分で考えたり、自分で行動してみる必要のない子供ばかりを育ててしまう結果になっている。このように、ゆとりは使い方を間違えるとむしろ良くない逆の結果を生む。

齋藤孝さんも『子どもに伝えたいへ三つの力』の中で次のように言っている。

「かつて親が一人ひとりの子どもの行動を細かく見る余裕がなかった時代には、子どもは

いわば親の視線から逃れた闇の世界に生きる時間を多く持つことができた。また日本の戦後社会のように、親が子どもの面倒を見る余裕がない時代には、子ども同士の世界は独立して存在しやすかった。ところが、現代では子どもの数が減少した結果、親の視線が子供に届くようになってしまった」

少子化と経済的なゆとりが生みだした子供達の危機が指摘されている。この問題は、村上龍氏と陰山英男氏との各対談でも話し合ったので、その部分も読んでいただきたい。

◆ゆとりは教師のために

つくづく人間は愚かだ、と思う。時間が余ると何にでも口出ししたくなり、何にでも手を出したくなる傾向がある。

手を出したり、口を出したりしているうちはいいが、そのうち段々と親と子、先生と生徒の間の「距離のとり方」を崩くずしていき、知らず知らず親は奴隷どれいのように子供に仕え、先生は生徒のマネージャーのように、受験から逆算してつくられた時間の管理に奔走ほんそうするようになっていく。こうした現実を踏まえると、むしろ「ゆとりがない」ほうが、工夫する隙間すきまがあり、自分の「頭を使う」必然性ひつぜんせいが出てきて、結果、いい子供に育つように思えるのだが、違ちがうだろうか。

私は「ゆとり教育」という場合、決して授業時間を減らしたり、休日を増やしたりして、子供達に単に時間的な「ゆとり」を持たせるのが目的ではないと考えている。誤解を恐れずに言うなら、むしろ「ゆとり教育」とは、第一に先生のためであり、先生の意識に関係していると思う。

今の先生は仕事に追われて大変だという。朝早くから夜遅くまで、子供達の問題、授業の準備、その他の雑用におわれて、「気持ちのゆとり」どころの話ではないらしい。「気持ちのゆとり」がないと、じっくり考える時間もない。生徒の問題を解決することも、勉強を教えることも楽しめない。仕事を楽しめない人間に、いい仕事ができるとは思えない。

つまり、ゆとり教育とは、子供が社会人として一人で骨太に生きていけるようになるために、「考えるための道工具箱」の道具の使い方を教えないといけない先生が有効に使うべき時間であり、決して生徒に「暇」^{ひま}な時間を与えることではない。そこで、ゆとりをもらった先生はどうやって自分の気持ちにゆとりを持ち、それをどうやって授業に反映^{はんえい}させ、ゆとりのある教育ができているのかが問われていくべきだ。

◆本当の「ゆとり教育」のもたらす効用

職業を選択するとき、職業によっては絶対逃げられない義務がある。

銀行員は顧客の預金高を口外してはいけないという「守秘義務」がある。警察官は夜中も働かなければいけない。それと同じように、教師という職業にも色々な義務がある。

その義務とは、自分の教える教科をいかに分かりやすく生徒達に理解させるか工夫をこらすこと、その生徒らしさに寄り添い生徒の個性を伸ばすこと、生徒が直面した問題に自分で解決する力をつけさせること、などだ。

それと同時に、教えるという仕事を成功させるために、自分のコンディションを最高の状態に持っていく必要もある。心に「ゆとり」を持ち、ゆったりとした気持ちで生徒と付き合い、授業をすることも求められるだろう。

各先生が自分の心の中に「もうーない！」ではなく、「まだーだ！」と前向きな気持ちになるために、彼ら教師が必要としているものは何なのか。余裕のある気持ちで子供の教育にあたれるようになるためには何が必要だろうか。

まずは、じっくり考える時間、本を読む時間、趣味を持つ時間、友人達と語り合う時間、そして仕事以外のことにも目を向け、生きていることを楽しむ豊かな心を取り戻すことが必要だと思う。ゆとりはそこから湧いてくる。

そして先生の中に「ゆとり」が生まれてくれば、教師として何に重きをおき、どこを合理的にした授業をしなければならないかが見えてくるだろう。

◎2002年「新教育指導要領」のもとでの小学校授業時数の変化

カッコ内は削減される授業時数

	1年	2年	3年	4年	5年	6年
国語	272 (34)	280 (35)	235 (45)	235 (45)	180 (30)	175 (35)
社会	-	-	70 (35)	85 (20)	90 (15)	100 (5)
算数	114 (22)	155 (20)	150 (25)	150 (25)	150 (25)	150 (25)
理科	-	-	70 (35)	90 (15)	95 (10)	95 (10)
生活	102	105	-	-	-	-
音楽	68	70	60 (10)	60 (10)	50 (20)	50 (20)
図画工作	68	70	60 (10)	60 (10)	50 (20)	50 (20)
家庭	-	-	-	-	60 (10)	55 (15)
体育	90 (12)	90 (15)	90 (15)	90 (15)	90 (15)	90 (15)
道徳	34	35	35	35	35	35
特別活動	34	35	35	35 (35)	35 (35)	35 (35)
総合学習	-	-	105	105	110	110
合計	782 (68)	840 (70)	910 (70)	945 (70)	945 (70)	945 (70)

「総合的な学習の時間」が、3年生以上で週3時間配当

その結果、生徒達もゆったりとした時間の枠組みわくぐみの中で、ゆったりとした気持ちで「学びの場」を確保できる。気持ちも落ち着き、何にでも取り組んでいけるようになる。

そう、ゆとりとは時間の分量の大小ではなく、心で受けとめるべきものなのだ。心のサイズは測れないはか。測れないほど無限大の中のゆとりは、現実のこともじっくりと眺めるながことができる。じっくり考え、じっくり結論がだせる。それをベースに行われるのが「ゆとり教育」なのだ。だから捉え方を間違っではいけない。本当に心の中にゆとりが湧いてくる教育とは何かを考えていこう。

3 ボランテニアはするもの、されるもの？

◆受け入れ側に負担をかける奉仕

「皆さん、今日はボランテニアの方々が沢山きますから、頑張りましょう！」

「皆さん、今日はよく頑張りました。お疲れ様でした」

これは、ある養老院ようろういんでの朝と夜の食事前の院長の挨拶あいさつだそうだ。それを聞いたとき思わず、「え、何を頑張るの。何を頑張ったの。何がお疲れ様なの」と疑問を感じずにはいられなかった。そして質問した。

「どうして頑張るんですか」

現在、ボランテニアが大変流行はやっている。ボランテニアを授業の一環いつかんとして取り入れている学校もある。文部科学省も授業の一環として組み込もうとしている。

人のために何かお役に立つことはうれしい。でも、それが卒業単位に必要なので「やらなければいけない！」という強制的なものだったり、ボランテニアをしているのが一種の

ステイタスになったりしたら、それは本当にボランティアと言えるのだろうか。

「お・ば・あ・ちゃ・ん！ お・げ・ん・き・で・す・か？」

まるで幼稚園の子供に話かけるかのように区切って発音するボランティア。

「はーい、お・か・げ さ・ま・で！」

その呼びかけに合わせ子供のように答えるお年寄り。ボランティアがいなくなると「はーあ」とため息をついて、今までの鈍い動きは嘘のようにお年寄り達はさっさと歩き出す。ボランティアに來た子供達は、自分達はいいいことをしていると一生懸命張り切ってお年寄りの面倒をみる。張り切って面倒をみるのはいいけれど、肝心のお年寄りの「心」は汲み取らない。だから、ボランティアを受ける側は実際に「うれしい！」ではなく、「緊張してしまう！」「疲れてしまう！」という本音をもらす。

付き添ってくる先生達も、「怪我をさせないように丁寧にやりなさい」と怪我の注意に氣をとられ、お年寄りがどんな表情をしているのか、その表情が表面的なものか、そうでないのかを汲み取らないという。

◆すべての奉仕活動はすなわち善になる？

多くの子供達が小さいときから「あなたのためなんだから」と言われ、何時から「おピ

アノ、何時から「お勉強」と、親の管理するスケジュールに合わせて、時間に追われる余裕のない生活を強^しいられる。

そうした環境の中で育てられた子供にとって、あらゆることの基準は「自分」でしかなくなっていく。他人がどう思っているのか、どう感じているのかを考える思考回路が、まったく言っているいい程、欠如^{けつじょ}していく。だから、自分が「いいことをした」と思えることは、絶対相手も「いいことをした」と思ってくれるものと確信して、疑わない。

今まで、人のために何かをしたことがない子供達。されることはあるが、したことがない子供達。「奉仕活動」を通じて社会と繋^{つな}がったことで「人から頼^{たよ}られている」「喜^{よろこ}んでもらえている」と思い、そこに「やりがい」と「こころよさ」を感じるのかもしれない。しかし、すべての奉仕活動が必ずしも「善^{ぜん}になる」とは限らない。物事そう単純にはいかなことも知るべきなのだが。

子供達の動機付けになっている反面、それが受け入れる側の負担になったり、「自己満足^{じこまんぞく}」から出発している面も否^{いな}めない。たとえどんなに心を配っても、自分のことすら解らないことが多いのに、人の心の中を一〇〇%理解し、満足してもらえるようにするのは難しい。

ましてや人の間で生きていると、無意識にする行動さえもが、自分の「思惑^{おもわく}」とは関係なく人を傷つけたり、人を喜ばせたりと、一人歩きをしてしまう。それだけに、相手に関

係し、意識をしてする行動にはもう少し心を砕いてみたいと思う。

◆袖触り合うも多生の縁

「ボランティア」という言葉には「自発」という意味があり、本来、強制されてする活動ではないはずだが、もしそれを「授業の一環」としてやろうと考えているのなら、なぜそれをするのかの理由からしつかり納得、理解してスタートして欲しいと思う。

そもそもボランティアは、「されるもの」（受け身）でも、「するもの」（強制）でもないはず。人間、すなわち人の間で生かされる者としてこの世に生を受けたら、自分以外の人のためにできることをするのは、当然のことだ。

確かに、「ボランティア」という横文字は日本にはなかったが、昔から日本には「袖触り合うも多生の縁」と言って、人のためにできることがあれば何気なく、誰でもがやっている。たとえ貧乏で、お金や時間を人のために使えない人でも、「子供がこんな時間に外にいちやいけないよ、早く帰りなさい!」「お母さんのお手伝い、えらいね」などと気持ちの面からボランティアをしていた。それも、人として当たり前と、無意識でしていた。親切心の出し惜しみというべきものはなかったように思う。

「ボランティア」は自分以外の外に向けてする「行為」、すなわち「好意」だろう。だか

ら、最も身近なところで言えば、家族の間で「お手伝い」という形でしてもいいはず。ボランティアを外でしかできないと考えたり、赤の他人にするものだと考えるのは間違いではないだろうか。できることからするのがボランティアのはずだから。

段々子供が育ち、金銭的にも、時間的にも、精神的にも余裕ができ、できることの範囲が広がっていった結果、家庭から近所へ、近所から知り合いへ、知り合いからもつと外へ、もつと外から海外へとできる範囲が広がっていき、今言われている「ボランティア」になったのではないだろうか。

◆自分達がやれるところから

そもそも現在の「ボランティア」は、外国の横文字として「輸入」されてきた。

その結果、「ボランティア」が発生、発展する「過程」は考慮こうりょされず、「結果」だけを追い求め、接つぎ木したボランティアになってしまっているように見える。

「奉仕活動」を教育の一環、授業の科目として取り入れている学校は、きっと子供達に人様のお役に立つことを喜べる心を持って欲しいと考えているのだろう。これは決して悪いことではないし、むしろ奨励しょうれいするべき心の在り方あだろう。

しかし、それが受ける側の好意の上だけで成り立っているならば、それはちよつと

ほんまっでんとう
本末転倒である。もし「奉仕活動」を授業の一つとして取り入れるなら、まず子供達に、奉仕活動を受ける側がどんなことをして貰いたいかを考えさせる。本来、そこからしか出
発できない。

つまり相手の気持ちになって物事を考える練習をし、身近なことからそれを実践させ、それから外の「訓練の場」として、学校外に出ていくべきだと思う。

「相手の気持ちになって物を考える」ことの意義を徹底的に教えず、受ける側の好意で成り立っている今のボランティア。受ける側の好意を「無」にするような失礼な「授業」は絶対するべきではないと思う。

「幼児のときから、幼児を一人の人間として扱うべきです」と言っ、て、「幼児語禁止！」という時代に、「身体が不自由だ」「年をとっている」というだけで、お年寄り達に対して幼稚園の子供に話すような、非礼なことはさせるべきではない。

義務的にボランティア教育をしなくてもいい。「自分達ができるところから、人のために何気なく何かをさせていただく」。そんな感情が小さい時から、家庭や学校の中で育まれるように、大人達は小さなことからお手本を見せていきたい。

4 個性豊かな人間って？

◆理想教育とは、個性を伸ばす教育とは

最近の学園には、将来教育者になりたいと考えている大学生や、現在の教育を何とかしたいと、ビジネスマンから教育者に転職を考えている若い方達が訪ねてくれるようになった。

人間大好き、おしゃべり大好きな私は、そんな彼らと時間を忘れて話し込んでしまう。彼らの話には反省させられること、考えさせられることが色々あり、感激かんげきすることしきりである。そんな私を見て、若い先生方が私のために「パンフレスコ」という月一回、月最後の水曜日の夜、皆でおしゃべりをする会を作ってくれた。

「パンフレスコ」には特別なテーマはないが、「パンフレスコ」に参加した方々が雑誌の中で感じた自分の考えをまとめ、メールで送ってくださる。それを読むのがまた楽しい。

学園は個性教育だと思われる。それは、生徒の人数が少ないから個性教育ができる

と考える方が多いからだろう。実際、メールを送ってくださる「パンフレスコ」参加者も、個性教育をするのには、人数の大小が大きく影響えいきょうしていると考えている方が多いようだ。

「個性教育」、確かに響きはいい。しかし、「個性」とは何なのか。「個性教育」をするのには、四〇人という人数のクラスでは無理むりなのだろうか。一クラス七〇名の時代には個性のある子供は育たなかったのか。本当にそうだろうか。

一クラス七〇名でも個性のある子供は育っていた。制服は個性を伸ばさないと反対して、自由にさせている学校の生徒達も、外国の人達から、「日本の女の子達はなぜ、同じような厚底あつぞこの靴くつをはいて、金髪あつぞこにしているんですか。あれは制服ですか」と聞かれるほど、似たような格好をしている。

「自由」とか「平等」とか「個性」という言葉を本当に理解するのは難しい。なぜ難しいのかと言えば、「自由」礼儀れいぎ知らず」「平等」思いやり不足」「個性」自分勝手」などという言葉に簡単に置き換えかえられても不思議でない状況があるからだ。自由だからといって、混こんでいる電車に大股をひらいて、一人分半の座席を一人占めじしていい訳でもないし、平等だからといって、必要もない物をもらって、もっと必要と思っている人に分け与えることもなく、捨ててしまったり、個性優先といって、明らかにそれは個性ではなく、単なる「わがまま」であつたり、わがままから発した社会性のなさであつたり……。

本当に子供の個性を大切にしたいなら、個性が自分の中から伸びるような基礎力をつけ、あげなければいけない。個性を認める土壌を、子供の周りにいる大人達から育まなければ、始まらないのではないか。「他人様はどうでも、自分の子供はぜひ、いい大学を出て、いい会社にいれたいのです」と言っているうちは、「個性」を認める大人の社会は育たないのではないかと思う。

◆個性が輝き出す条件

学園では、「個性とは、自分のしたいことを見つけ、それを「まねぶ」（真似する）うちに自然に滲み出てくるものである」と考えている。まずは素直に学ぶ力、真似ぶ力を養いたい。そして、自分に自信ができ、自分に物事を判断する価値基準ができ、はじめて個人的な生き方もできるようになると信じている。また、個性豊かな人間になるために、礼儀、思いやり、約束を守るなどという、人間として当たり前の心づかいができることも大切だと考えている。

今の世の中何か問題があると、その問題を根本から考えるのではなく、表面的なことばかりをとりあげる。以前、母親に反抗して困っていると相談されにきたお母さんに対し、「自分の家の中に、彼の居場所がないような気がして淋しいんだと思います」とお答えした

とき、そのお母さんが「六畳じようの自分の部屋があるのに信じられません！」と返答された状況とよく似ている。

理想教育や個性教育をするにしても、それをしようとしているのは生きている人間。その教育を受けようとしているのも生きている人間。人間は生き物であり、昨日、今日、明日と続く時間の中で生きている。それだけに、目に見えない変化も含めて、毎日変化するのが当たり前だ。

毎回反省し、何をそのまま続けていくのか、何を変化させていくのかを判断しなければならぬ。そのためにいろんな方の意見に耳を傾け、いろんな方向から検証けんしやうしていきいたいと思う。それだけに、パンフレスコに来てくれる方の意見は、自分を振り返るきっかけになり、大変貴重きちやうだ。

学園では新たに「証券」の授業を設け、実際に予算を与え、投資させ、資産運用について学ぶ授業もスタートさせた。いくら理想教育をしようとも、個性教育をしようとも、社会生活からかけ離れているのでは意味をなさぬ。また、社会から叩たたかれることも大きな勉強だ。

失敗を恐れない子供にしたい。いや、失敗から学んで工夫する人間になってもいい。基礎学力があれば、その工夫に応じて個人の個性が輝かがやき出すのではないかと信じている。



5 開かれた学校？

◆議論のピントがずれていませんか？

悲しい事件が多い中、また本当にいやな事件がおきた。

大阪教育大付属池田小学校乱入児童殺傷の事件だ。

子供を自分の命より大切に育ててきた両親や家族。どんなに悲しい思いをしていることだろう。

こうした事件が起きると、何とも形容けいようできない程、時代が悪くなっていく予感がして、漠然ばくぜんと恐怖きょうふを感じている人も多いのではないだろうか。私もその一人である。加害者の背景はいけいが日一日と明らかにされてくると、益々ますます怒りがこみ上げる。しかし、それを誰にぶつけてよいかわからないし、何をしていいかわからずにいた。

新聞を読んでも、テレビを見ても、「開かれた学校の落とし穴」「学校開放の盲点」という言葉だけがひとり歩きしていた。子供を地域と一体で育てるために、学校の垣根をとり

はずした弊害^{へいがい}、学校を一般に開放しようと「学校開放」をかかげる現在の制度が結果として悲劇を招いた^{まね}、という議論だけが白熱^{はくねつ}していた。

そして当の加害者は、「精神病院に通院していたので何をして無罪になる」と知人に話していたともいう。

◆本質を見落としてはいけない

何かが違う。そんな思いがずっとしている。

子供を地域と一体で育てるために、垣根を取り外したり、校門を常時開けておくことが地域に開放したことに直結すると、学校関係者は本気で思っていたのだろうか。

誰でも自由に学校に入れることイコール、開かれた学校と思っていたのだろうか。

精神病で苦しんでいる人達と、「精神病院に通院^{つういん}していたので、何をして無罪になる」と公言^{こうげん}する人間をいっしょにして守ることが、本当に病気で苦しんでいる人を守っていることになるのだろうか。何だか日本中が共通言語で話していないような気がする。何だか表面的な言葉の意味に振り回されている気がする。

学校を開放するイコール、門を開いている状態では当然ない。学校にこんなことをしたいと提案したとき、それを聞いて真剣に一考してくれる人間がいるかどうかが大切であり、

校門開放の有無には関係がないと思う。

「学校の門が常時開いていないから……」「垣根^{かきね}が高く学校を訪問しにくい」などと感じて学校開放を要求するのは、文字通り外形だけを問題にした議論であって、学校と地域とのコミュニケーション問題の本質ではないはず。たとえ外部からの侵入を厳しく監視する学校であっても、何か提案、意見したくてコンタクトを取ったときに、そうした声に聞く耳を持つ学校関係者がいれば、その学校は「開かれた学校」「一般に開放された学校」という意味で受けとめられていいと思う。

もし、子供達のために何かしたいと感じて学校を訪ねたとき、門で名前を聞かれたり、用件を聞かれて「入りにくい」と感じるのなら、それは応対する方の対応の仕方にまずさがあるのではないだろうか。

精神病院に入院した経歴があるから、何をしても「許してしまう」ということは、精神病を克服し、元気に一般の生活をしている人達に失礼だ。何でも許すという安易な考えが、むしろ元気に一般生活している元患者や、今病氣と闘っている患者さんに対する失礼な「同一視」にあたるのではないだろうか。

今回の事件を通して、もう一度しっかり考えてみたい。私達が表面的な言葉の意味に惑わされて、本質を見落としているのではないのかということ。

不幸に見舞われた子供達の命を無駄にしないためにも、単なる同情や、一時的な感情や、「人道的」などという言葉に酔うことなく、しっかりと考えてみたい。それが亡くなった子供達に、私達ができる最低限のことではないのだろうか。

子供は可愛い。私はたくさんの子供を預かってきたが、どの子も可愛い。人の子供をお預かりしても、可愛くて可愛くて仕方がないのに、自分の子供を亡くされた実際の親御さん達はどんな気持ちかと思うとやり切れない。

だから、本当に皆でできることから考えよう。絶対、人任せにせずに。

6 家庭の教育、学校の教育

◆学校とのトラブル相談の電話のはずが……

「そちらではうちの子のような子供を預かってくれますか？」

手に取った受話器から聞こえてきた第一声がそう切り出した。

「今の学校は何にもしてくれないんですよ。主人も何回も学校に掛け合いに行ったのですが。教育委員会も『学校とよく話し合ってください』と言うだけで、何もしてくれません。早く気がついたから何の問題も起きていませんが、子供も転校したいと言っています。はじめから公立の学校には期待していませんでした」

私は学園の授業がお子さんには難しいこと。小学校・中学校の勉強は基礎学力なので、高校・大学に行くか行かないかに関係なく、日常生活をするのに必要なことなどを話した。私立に行くことも考えているそうだが、私立は公立より厳しく、学校の設立趣旨、校則、方針に沿えるか確かめてみる必要があると付け加えた。

すると、どうして子供が転校したがつているのかの説明もお名前も語られることはなく、受話器が置かれた。

これは本当に先生や学校だけの責任だろうか。先生達の言い分もあるだろう。そういえば現役教師をしている知人が憤慨ふんがいしていた。

「今の父兄って、自分の子供さえよければ他の子供のことは『どうだっていい!』という考えがあつて、自分の子供に不利になると思うと、すぐ教育委員会に訴うったえるし、またそれを教育委員会が取り上げて、大きな問題にするのよ。だから親身しんみな先生でさえもやる気がなくなるの。子供のことを一生懸命考えて、注意したり、指導しても、それを細かくいちいちチックされて、『どうしてうちの子供ばかり?』と逆恨みさかうらされて、その上父兄会ふけいで糾弾きうたんされたりして……」

親と先生の間「信頼関係がないのかな?」と考えてしまう。信頼関係なくして、いい結果は出せない。自分達の親はどうしていたのかなと、自分達の小さかったときの先生と親のことを考えた。

かつて自分達の親の時代は、学校に期待するもの、家庭でしなければいけないことの境界線が明確にあった。親が学校に期待したのは、親が手を出せない「勉強」を教えてくれることと、集団生活での「マナー」であつたように思う。しかし、その基礎になる日常生

活のマナーはしつかり家庭でしていたし、家庭でするものと考えていた。その上、自分の子供のことをよく知っていた。だから、自分の子供を過剰評価かじようすることもなく、事実を事実として受け入れていたように思う。

それだけに集団生活の場合、学校で見せる家と違う子供の顔に、「先生すみませんね。本当にご迷惑をおかけして。先生、どうぞビシバシ注意して、叱しかって下さい」と言っていた。もちろん、そんなことが言えるのは、先生を先生として心から信頼していたからだろう。先生もそれに答えるように、先生として、先生らしく振る舞ったし、振る舞えた。

◆学校と家庭の境界線

先生に苦情が来たとき、「私達をお願いした先生ですから、大丈夫ですよ！」と言い切る教育委員会や学校関係者が果たして何人いるだろうか。

先生を育てるのは父兄であり、校長であり、教育委員会。

はじめから「良い先生」として生まれてくる人間は、おそらく皆無かいむだろう。「良い先生になりたい」と思って先生になった一年生先生を、皆で育てていかなければならない。

しかし教師という同じ生業なりわいで生きている先生達に対しても、「それって、違うんじゃないですか？」「どうして教師という職業を選んだんですか？」等と尋ねたくなることも多

い。

ただ、そんな環境で勉強している子供達の中にも、素敵な子供、明るい子供、元気な子供、素直な子供がたくさん育っているのも事実。ということは、今の学校、今の教師、すべてが悪いわけではない、ということだ。

いつの時代でも、どこの世界でも、どの社会でも、あらゆる自分がピッタリすることなどありえない。一〇〇%満足することもあり得ない。それは「学校」も「教育」も同じだ。ただ、限りなく子供にフィットするように、限りなく一〇〇%満足するように、家庭と学校が上手に補い合っていくしかない。

親も学校もその境界線を尊重し、領域を侵害せず、過度の「期待」をしないという鉄則のもとに。

◆二種類の愛情

親は自分の子供が「可愛い」ように、教師も自分の生徒が「可愛い」。しかし、親の「可愛い」と教師の「可愛い」はやはり同質ではない。

なぜなら、血の繋がりつなのある親子の縁は、紙の上では切れるが現実には切れないし、その関係から逃げられない。しかし、生徒にとっての教師とは、そこから栄養分をもらい、



巢立っていくための通過地点。

事実、「人様にこんなことをして申し訳が立たない！」と言って、自分の子供を殺し自殺した親はいるが、自分の生徒を殺して自殺したという教師は、聞いたことがない。

現在、子供達の間で起きている様々な問題は、この「家庭とする教育」と「学校でできる教育」に明確な境界線がなくなったために生じているのだと思う。一般の大人も含めて親や教師が「異質の愛情」を「同質の愛情」と勘違いし、お互いの領域を侵害し、必要以上にお互いに依存し、期待したことで混乱してしまったのではないだろうか。

◆自己責任の定着へ

今の時代ほど、何が正しくて、何が正しくなく、何をなすべきで、何をなさぬべきか、先がまったく読めない時代は存在しなかったのではないか。そう考えるとあらゆることが私達を不安にする。本能的に理解できるのはあらゆることが「多様化」しているということだ。もちろん教育も例外ではない。

これからの時代は、従来の基準では測れないことがたくさん出てくると思うし、事実出てきている。その中で生きていかなければならない私達は、何でも古いものが悪く、何でも認めてくれないことが悪いのではなく、「生きる場所が違う」「求めているものが違う」

という解釈をするべきではないだろうか。

そのために、解釈や判断の元になる情報をたくさん集め、正確に理解し、自分に必要か、必要でないかの見極める力が、「自己責任」という名のもとに要求されるのではないだろうか。

親も含めて、子供達を取り巻く大人達の間には「自己責任」という考えがすっかり定着し、実践できるようになると、どんな環境、どんな状況にあっても、それにあまり影響されずのびのびとした子供らしい子供達が育っていくようになるのではないだろうか。

現在の教育にはいろんな問題があるから、うちの学園のようなフリースクールと呼ばれる教育のセーフティネットとして機能する学校が存在するのは事実だ。しかし健全に動いていることまでも否定するより、いいものはいいいいところはいいと認めて、上手に活用していきたいと思う。その思いこそが、多様化を認め、他者を認め、自分達を認めることになると思じている。その思いこそが、子供の世界も広げていける要因になると信じている。

二児の母から上田先生への手紙 3

子供を取り巻く環境は、誰が悪いとか、何かどこかだけ限定的に責任があるという話ではもう済まなくなっている気がします。子供はこうしている間にも成長していってしまうし、今この瞬間にも、この国のどこかで、大事な子供がつまずいて、立ち上がる術を知らないまま、深く傷ついていく。親も本人も誰かにヘルプと言わなければならないのに、そういう考えすら湧いてこない状況の人達をどういうふうにヘルプしていけばいいのだろうかと思います。私は、もしある家庭が家庭としてつまずいていて、それにいち早く気づいたのが、学校という存在ならば、学校はやはりその家庭を放って置いてはいけないと思います。ただ学校には教育という目的が第一義にあります。

そこで、病院という医療現場に医療相談室とかソーシャルワーカーといった医療の側面に存在する福祉的な部分をサポートする機能をあわせ設けたように、学校にも、スクールカウンセラーだけでなく（これも重要ですが）、スクールソーシャルワーカーのような、子供のメンタルな部分だけでなく、学校と生徒の間、学校と家庭の間、またあるときは、子供と家庭の間を補完するような役割を果たす新たな機能を（これって、まさにフリースクール的な気もしますが）一般の学校にも持たせていかなければ、もう末期的な症状を呈している今の状況は打開できないような気がしています。結局子供を大事と思う気持ちが両者にありながら、家庭と学校で対立する図式は悲しくすらある気がしてなりません。現状の学校という機能の不全と、家庭の機能の不全との間で苦しむ子供達の姿を見ている上田先生は、両者の対立の構図ではない解決の糸口はどこにあると思われますか？

それは、まず自分の足元から実践していくことだと思います。自分の周りから変えることだと思います。そのために自分が変わることだと思います。人の気持ちを変えることや、社会を変えるには時間とお金がかかります。でも自分が変わるということは、一銭もかかりません。時間もかかりません。今教育がおかしいと思った人から、自分の信じているものを実践することだと思います。身近なことからされるといいと思います。子供という一度きりの大切な時期、自分の子供だけではなく知り合いの子供も大切にしていける。そんな小さなことが大きな社会的問題の解決の糸口になるはずです。

私の家は大変貧乏でした。両親も共稼ぎで母でも朝の9時から夜の8時まで働いており、休みも年に二回位しかありませんでした。でも我が家にはいつも二人の兄と私の友達が出入りしていました。両親の口癖は「玄関のドアと冷蔵庫のドアはいつでもフリー」と言い、友達ならどんな友達でも大歓迎してくれました。それは、大学時代も社会人になっても続き、土日などは兄の会社の独身の友人達が泊まりがけで来て、6畳と4畳半の我が家は足の踏み場もないほど、人で溢れていました。この中で、友人達は両親に親のこと、学校のこと、勉強のことを一生懸命相談していました。「上田の家と上田のお袋さん達がいなかったら、今の俺達はない！」と言ってくれる人達が沢山います。両親のしたことは大それたことではありません。でもすごいことをやったと思います。

終章 対談

上田早苗 × 村上龍

× 陰山英男



上田早苗×村上龍 「子育てと自立」



Ryu Murakami

1952年長崎県生まれ。76年『限りなく透明に近いブルー』で第75回芥川賞受賞。『コインロッカー・ベイビーズ』で野間文芸新人賞受賞。メールマガジン、JMM（ジャパン・メール・メディア）を主宰する。テレビドラマ化もされた最新作『最後の家族』では、引きこもりの息子を持つ家庭を描いている。

上田 最近お書きになられた『最後の家族』はちょっと淋しいお話ですね。みなでご飯食べながらにこにこして笑っているのがいい家族だと家族自身が思っていた。でもそれは表面を繕^{つくろ}っていた幻想だと気が付く。そのときには、既にみんなバラバラになっていて、違うところに行っていたというように。その中で、家族とは何か、家族に依存しない自立とはどういうものなのか、考えさせられました。

村上 うーん。あれはお父さんがちょっと問題あるんですよね。結局自分すべてを会社に依存してるわけだから、それが一番大きな問題で、だから救えないんですよ。あの人が家族を、引きこもりの息子を救うと嘘になっちゃうんですよ。

上田 それはそうですね。会社のために働いてると信じているけれど、本人が気付いてないだけで、それは嘘ですよ。それは、自分のために働いているはず。

村上 昔は会社のために働けば会社が保護してくれるっていう約束事がありました。

上田 でも今はそういう時代じゃないですよ。

村上 ええ、もう全然違います。

上田 それをみんな気が付かないっていうのは……。

村上 いや、気が付いているんでしょうけど、恐くて認めたくないんでしょうね。

上田 そうでしょうね。読んだ後でみんなそれぞれ違う道に進んで行ったんだけど、何か時代に取り残されたのがお父さんっていう感じがしました。

村上 ただあれは僕はハッピーエンドだと思って書いています。作者から言えば。

上田 私は読んだ後に子供達がそれぞれ出ていって、お母さんも自分の生き方を見つけて、でもあれほど家族一緒に食事を望んでいたお父さんは故郷へ帰ってコーヒーショップを開店し、後ればせながらの自立。ひとりで生きていくんだなあって、そこが切ないなあ。

それに結婚した後の女性の生き方も日本ではまだまだ夫に依存しているのかもしれないな、と思いました。小説でもありましたよね、お母さんがそう思う場面が。

「昭子は、延江と知り合ってから、どうして若いときに好きな職業を探さなかったのだろうと悔やむようになった。短大を出てすぐに秀吉と結婚し、すぐに子供を作ったのは、自分が何を実現したいのかを考えることから逃げるためじゃなかっただろうか」と。

先日タイに仕事で行ったときに、女性と自立の問題を改めて考えさせられました。タイの女性達は家庭に入るって感覚がないんです。一緒に仕事をしていて家庭のにおいが全然しない。それで、「どうしてかなあ」って思っていたんですけれど、彼女たちは私の人生の五〇％は夫婦、家庭人としてであって、残りの五〇％は自分のためだから、その部分で仕事をしているので、そこには家族は関係ないんだと言っんです。

村上 それは都会で仕事を持っている女性ですよ。

上田 ええ、そうです。一概には言えないかも知れませんが、そういう話を聞いたとき、日本よりも何かすごいなあって思いましたね。タイで仕事をしている女性は、日本より進んでいるのではないかと。

上田 前回JMMで取材していただいてから、二年くらい経つのでしょうか。あのときか

らずっと疑問に思っていたのですが、村上龍さんは若い頃学校に順応しない、反抗していたと聞きますが、どうして不登校にならなかったのでしょうか。

村上 あの時不登校ってなかったんですよ。

上田 なかったですね。

村上 逆に家が非常に貧しくて、なかなか学校に出て来られない子がいましたね。小学校の頃は、まだ高度成長の昭和三〇年代、中学生の頃は昭和四〇年代でしたか。学校に行く理由にはいろんなファクターがあると思うんですけど、まず学校に行かないと友達がいなから、学校に行かず何しろって言われてもひとりで裏山で遊ぶわけにもいかないし。夏休みは四〇日くらいあったんですけどもう途中であきちゃって、二週間くらいで学校行きたいなとか、友達に会いたいって思いましたよ。

上田 そうですか。夏休み、今の子供もそう感じているのでしょうか。

村上 まず僕の中学校の時よりも、今の中学生の方がストレスを多く感じていますよ。

上田 そうですね。でもそれは何でだと思いますか。

村上 それはどう生きればいいのか、大人の社会が示していないからじゃないですかね。

上田 確かにね。なんか本当に人の顔色ばかり見てるようなところがあります。

村上 ただ、僕はしょうがないと思いますけどね。どう生きればいいのか教えてもらって

ないわけですから、大人の社会の側から。メディアを通じても、社会はどう生きれば有利なのかってことをまったく伝えていないですよ。学校の先生やお父さんやお母さんも九%分かっていないでしょう。要するにこれからどう生きれば有利なのか、どうやって自由を選択するのか、それが概念としてないからです。

僕は去年のちょうど今頃、NHKの教育大特集があって、七時間生番組に出たんですけど、僕の企画が取り入れられて、「あなたは自分の子供にどういう人生を望みますか？」っていうタイトルになりました。でも、一切そんなこと考えてる人がいないんです。僕は子供にどういう人生を望むのかっていうことを考えていない限り、教育はできないと思うんですが。

上田 そうですね。

村上 父兄の側は「学校が」とか「学校の締め付けが」とか言って、教師の側はほとんど授業にならないと言うわけですね。で、僕がある定時制の高校の先生に「授業にならないんだったら、どういう生徒になってほしいんだ」ってことを聞いたんですよ。そしたら「教師と認めて欲しい」とか訳のわからないこと言い出して。

お母さん方、父兄にもこういう子供になってほしいのかって聞いたんです。そしたら、それは私が決めることじゃありません、子供が決めることですって。それは子供が決める

のは当たり前だけど、自分としてはどう生きてほしいのかって聞いたんですよ。そうしたら答えはない。もちろんそういう社会で育ったら子供達は混乱しますよ。

上田 私もフリースクールという形で子供達と関わってきて五年目になるんですけど、ほんとに何を指針にして生きてるのか見えてこないときがあります。だけど、子供達は自身の生きる指針を見つけなくても、それを誤魔化す時間をつぶすものだけはあるだけなんです。はんらんしている。

フリースクールに来る子供達だけではなく、いろんな子供達の実状を知りたいと思って、様々な中学生一六〇〇人へアンケートをされている村上龍さんの『教育の崩壊』という嘘』を読みました。そこで、コミュニケーション前提の整備を、とおっしゃっていますが、村上龍さんのいうコミュニケーションってどういうことを言っているんでしょうか。

村上 もう単純な意味です。思っていることを正確に相手に分かるように伝えるということ。ただ、思っていることがない人の方が多いんで、結局伝えられないんです。結局コミュニケーションスキルがない以前の問題です。非常に多くの父兄と先生が伝えることがないわけですよ。どう生きたらいいかというアイデアが自分の中にないわけだから。

ただ「どう生きるか」とか「人生の指針」というのは、イデオロギーとか思想とか大げさなことじゃないと思うんです。それは非常に単純で、何で食っていくかということです。

前もちょっとこういう話をしましたね。結局、絶対確実なのは大人になったら、みんな嫌でも生活費を稼いでいかないといけない。それを自立って言うんですけど。だったら、嫌なことでもこき使われてお金を得るよりも、自分が二日徹夜しても飽きないような充実感がある仕事をしてお金を得た方が楽しいわけです。

そしたら別に年収二〇〇〇万も貰わなくても、実質低いお給料でも、自分が興味を持てることであれば、楽しくやれるからいいんじゃないでしょうか。僕はその一点に尽きるところなんですよ。でもその一点を何で日本人が共有できないかというところ、これまではそういう概念がなかったからです。いい会社に入れば全部OKだったから、そういう概念を持ってなかったわけです。ほとんどの大人がそういった考え方をしていないから、みんないい会社に入ろうとする。

だから「あなたは何になるの」って子供に聞くのは日本社会では幼稚園までなんですよ。小学校、中学校から「どこの大学に行くの」になって、大学になったら「どこの会社に入るの」になるんです。小学校であろうが、中学、高校であろうが、何になるのか、何で食っていくのかってことが本当は最優先、前提になるはずですよ。これは絶対正しいわけじゃなくて、僕の考えですけど、そこが押さえられないときにどんな話合いをしても無駄ですよ。

上田 それはよくわかります。私は子供達と話していて、「何でこんな話が合わないんだろ

う」「何でこんなに話が通じないんだろう」って思うことがあります。まるで外国人と話しているみたいに噛み合わない。でもじゃあ噛み合わない、わからないことから妥協して飲み込んでやって、それを意思表示しないと話が行かない。それじゃ、「わからないってことから話そう」ってことでスタートしたんです。日常接している学生と私とでも、コミュニケーションがとれないときがあるのは、きっと根本にお互いの共通言語が存在していないからでしょう。認識もそうですけど。そこが違うから、子供達と話が食い違うんだろうと。

例えば私はいろんな理想を掲げてきているけれど、子供は理想を理解する以前のところ、もつと原始的なところで、何かつかえているように感じます。そこでコミュニケーションンってことをもう一回考えようと提案したんです。というのも、何かを伝えようとしたときに、最低限必要なコミュニケーションの手段がなければ会話に発展しない、という思いがあつて。生きる力を伝える前に、まずコミュニケーションの前提を考えないといけない。そう思つて子供たちと話してみると、基礎学力が驚くほどないんですよ。極端なところ「九日」を「きゅうにち」とは知っていても「ここのか」という言葉は知らない。

このへんについて、いろんな若い方と取材で会われていると思いますが、コミュニケーションのギャップについて何か感じられたことはありますか。

村上 でもそれはしょうがない問題だと思いますけどね。僕が小さい頃はまだ親の家にお
ばあちゃんもいっしょに住んでいて、大家族制の名残みたいなものがあつたんですけど、
学校と家以外にも、大家族制の名残だとか、あるいは子供達だけのグループがありました、
そこで違う学年の子ともいっしょに遊んでいましたから、そこで学ぶこともありました。
だから何だかんだ言いながら学ぶ場所も機会も多かったと思いますよ。

今はそうした場所が少ないんでコミュニケーション能力だとか、常識とか、それから一
種のモラルといえますか、二年年上の人にこんなこといったら殴られるだとか、そういう
こと学ぶ機会つてのがなかなかないんです。だからそれは上田学園に来てる子が特別そう
なんじゃなくて、逆に上田学園に来るような子はシャープだと思うんですよ。感覚が鈍感
じゃないですよ。だから結局今の学校システムに合わないわけだし、これじゃないと思っ
てるから不登校するわけです。

逆に学校には行かなくちゃいけない、行くもんだ、親には従うもんだとかいつて何とな
く学校に行つて、何となく親の言うとおりの人生歩む人が一番恐い。そこがまだ一番多いん
ですけど。まだきつとマジョリテイだと思うんですが。その集団が一番恐いです。彼らが
いつか親や社会に騙されたと気付いたときに。無自覚に反抗している人がとりあえずはフ
リーターに吸い込まれたり、引きこもりとかに吸い込まれるわけで、だから何かそういう

症状が出ている人の方がまだ対処しやすいんじゃないかと思うんですね。

上田 それはありますね。私など生徒たちと直接関わっているから、いろいろ分かってくるのだと思います。今の教育で何かやらなきゃならないと思っても、多分現場で子供達と接していないと何をやっていいのかすら分らないと思うんです。村上さんは本の中で、現場に立つ人だけじゃない周りの一般の人も教育に向かって参画していく必要もあると、おっしゃっていますけれど、そういう時に何からやっていいか分からない方ってたくさんいると思うんですね。昔は隣のおじさんやおばさんが余計なお世話のように、「何をやってはいけない」「それはやっちゃいけない」と言ってくれることでたくさん学べたことがあります。しかし今はそういうのがありません。情報が入っているようだけど、情報を正確に理解する言葉っていうか知識がちゃんと育っていない。入ってくる情報を中途半端に吸収して、消化不良のようになっているところがあります。そういう中で子供達を育てていかなきゃならないときに、何がこれから必要だとお考えでしょうか。

村上 残念ながら、すべての子供にフィットする処方箋はないと思いますね。だから、上田先生がおやりになっているようなフリースクール、あるいは個別な非常にプライベートな学校であるとか、そういうところに行けない人たちに公立の普通の学校でカウンセラーを増やすとか、学級の人数を減らすなどを同時にすすめていかなければいけないと思います。

日本の子供という一つのマスを対象にした処方箋はない、と思います。それがあるとしたら全部嘘で、そういうことを言ってる人は「みんなが奉仕活動を」なんて言い出す。非常に危険なことなんじゃないかと思います。

日本の子供全体を対象にして考えるのは最初から間違っていますよね。というよりいつも言ってることですけど、まず大人の社会が気付いたり、考え方を変えていったりしないと、子供の心配してる場合じゃないんで。例えば三万人になってしまったという中高年の自殺をどう減らすかという問題と全部パラレルであり、同じ問題ですからね。大人の社会の中に当然変化すべきなのに変化に対応できていない人がいっぱいいる場合には、子供をどうこうするって問題ではないのではないのでしょうか。

上田 自分の足元から、ということでしょうか。

村上 大人の社会がいい方向に変化していけば、それを当然子供は見ています。彼らは案外、遅いのですし。大人が混乱してどうしていいか分からないから、子供が混乱しているって状況だと思うんです。

上田 確かに今本当に夢を持って生きている大人っていないですものね。

村上 もちろん、いないことはないですけど。では昔はいたかつていうと、そうでもないですから。

ただ昔は会社に守られて生きるだとか、日本人一丸となってお金持ちになるとかね、社会的インフラを整えるとか大目標があったので、たとえばむかしはダムとかを作る人たちは英雄として映画になったりしています。『黒部の太陽』とか。それが今ダムを作る人は無駄遣いと言われてしまう。昔が夢があったんじゃないやなくて、今は誰にもリスペクトされなくなっちゃったんですよ。

上田 どうしてリスペクトされなくなったんでしょうか。

村上 昔はダムを作ることにそれなりの意味があったし、まあ道路作ったり橋を作ったりするのが、要するに国家建設というか社会インフラの整備としての意味合いがありました。それが次第に景気対策のようになってしまっただけ、やっつけることは同じだけど意味合いが違ってきちゃった。昭和三〇年代にダム作っているとかつこいいっていう共通認識はありました。今はもう自然と、お父さんダム作ってるって学校で言えない雰囲気が出てきた。環境問題になるし、特に長野県では言えない。そういう感じになってきています。だから、今の人が夢を失っているわけじゃなくて、昔はみんな金持ちになろうっていうモチベーションがあっただけだと思います。

上田 でもその共通のモチベーションはなくなりましたよね。

村上 ええ、そうです。

上田 そのときに子供達を導いていくために大人達がやらなければならないことは、まず自分の生活を、ということでしょうか。

村上 まず、自分のことを考えることでしよう。これは一般的な話ですけれど、自分のことを考えなさいということですよ。だから引きこもりを題材にした『最後の家族』のなかでも、カウンセラーだとか親の会に通うとかしたりして、お母さんが自分が楽になって行くわけですよ。そうやってお母さんが楽になっていくと、子供も楽になっていくんですよ。だから結局子供をどうしようかじゃなくて、まず自分が活き活きとして生きることが、生きるモチベーションを持つことが大事なんじゃないかなと思うわけです。もちろん非常にケアする側面は必要だし、ほったらかしかそういうのとは意味合いが全然違うんですけどね。

上田 お互いに依存して生きるんじゃなくて、自立すること、そのことが結果的に親しい人を救うのだというメッセージはすごく重要ですね。カウンセラーの方の話を聞くと親が自分の生き方を持つ、自分のモチベーションをきちんと持つ、それを見て子供たちがお母さん、ちゃんと自分をやっている、生きているってことで俺もやらなきゃと思ってくれるのは事実だと思います。だけれど父親が子供の教育に携わらないだとか、家庭を顧みないからということも原因のひとつのようによく言われますがそれはどう思われますか。

村上 それもケースバイケースじゃないでしょうか。一概に毎週一回河原でバーベキューすればいいってもんじゃないですから。父親の生き方を子供は見ているから、それは残酷に伝わるんですよ。お父さんだから何をすればいいとか、これがこうだからこうというのはないと思いますよ。逆に言うとういうふうに育ててもいいと思うんですが、その人の生き方を子供は見てるってことですよね。もちろん赤ちゃんの時に放っておいたりするのは駄目ですよ。3歳児を車においてパチンコ行っちゃったりとか、それは論外でこれはそういうことじゃないですけど。

上田 村上さんが少年時代、反抗なさった時にお父さんお母さんはどんなふうにおっしゃっていましたか。

村上 まあ、本格的な反抗がはじまったのは中学生の時ですけど、怒られました。親父からも怒られたし。ただ高校のときバリケード封鎖みたいのをやって無期謹慎になったときに、その頃は高三だからもうほとんど親父と口利かないという感じだったんだけど、うちのじいさんが反抗してくれて、俺も海軍の時は四回くらい上官を突き落として、えいそう営巢に入ったと言っていました。実はおまえの親父もPTA会長殴ったとか、大問題になったことがあるんだ。だからこれはもう家系だから、偉そうな奴に齒向かったり、反抗するのは家系だから仕方ない。そんなふうにおじいちゃんが言ってくれて、「なんだ」と思って少

し楽になりましたね。まあ謹慎になったのは怒られましたけど、集団とうまくやっていくのが苦手だというのは知っていたんで、小学校のときから諦めていましたけど。もうサラリーマンにはなれないってのは決めていました。最初からサラリーマンという選択肢を捨てていたんで、結果的には良かったんだと思います。だけどそんなの昔だったら一〇万人にひとりぐらいかもしれません。

上田 でも、ご自分がそういう時期を通り越して来られて、ある時期から教育に題材をとったものを書かれるきっかけはどうしてでしょうか。やはりどこかおかしいと思ったからでしょうか。

村上 おかしいといえますか、大きく言うとな、構造改革と言われてますけど、日本が駄目になったわけじゃなく、もう終わってしまった高度成長と同じやり方をしてるから、外の世界は大変化しているのに、その変化に対応できなくなっていたり、既に非効率なシステムになっていたりします。そこで子供が混乱して、いろんな症状を出すわけですよ。学校に行かなくなったり、あるいはストレスで拒食症になったりね。それは当たり前なことなのに、みんな大騒ぎするわけですよ。どうしちゃったの、と。

今、求められているのはどういう子供なんですか。親の言うこと聞いて、先生の言うこと聞いて、それで悪いことせずにコツコツ学ぶのがいい生徒でしょうか。そういう人

はみんなオウムに行ったんですよ、どうしようもなく。まじめな子ですよ。今こういう変化の時代にうまく適応して活躍している個人はみんな社会や学校とうまく折り合わなかったんです。だから、そういった意味で大きく捉えると、子供達は今反抗してるわけですよ。反逆してるわけですよ。そこに日本が抱える問題がこう反映されているわけだから、それは作家としては書かなきゃいけない。ごへい語弊があるけどおもしろいですからね。

上田 今までなかったですものね。

村上 それは現代特有の社会的な問題なので、作家が描くのは当たり前だと思いますよ。むしろ僕には新撰組だとか書く方がわからないですけどね。それはそれでエンターテインメントだからいいですけど。

上田 私も、もしかしたら親が悪いんじゃないか、学校の先生が悪いんじゃないか、学校のシステムが悪いんじゃないかといういろいろ考えてみたんですが、言われてみると確かに昔も問題のある先生も親もいっぱいいました。今は親が自分の生き様つてのをまず見せていないのでしょうか。

村上 いや、見せてるんです。見せてるんですけど、とにかく何の助けにもならない、ということでしょう。

上田 どちらかというと、おろおろしているんじゃないでしょうか。テレビなどでも芸能

人が自分の子供を公園デビューさせるなどといって特集していますが、あれはおかしいと思います。そこからもういじめの問題が始まっていると思うのに。どうしておかしいかと言うと、単に子供が遊びに行くところのはずの公園に、デビューするためにお母さんがきれいなかっこうをしていかなしいけない。さらに勢力のあるお母さんの顔を窺って話を合わせ、子供がいたずらすると「ママのためにいい子にしていね」とお願いする。こうやって母親が子供に、人の顔色を見て生きることを見習ってしまっている。

本を読ませていただいて、村上さんの思考回路って外国人みたいだなあっていうのを時々感じていたんです。日本の習慣では、「何をするのも誰かのため」という言い方をしますけれど、そこがおかしい。あらゆることは自分のためにするのじゃないのか、と思うんです。そういう言い方では、外国人がたくさん入ってくる中で変わっていかないと理解されにくいと思うんです。

まして子供達には昔と違って外来語が自国語みたいに入ってきていて、逆に自国語が外国語のように通じなくなったりしている不思議な現象があります。同じ単語でも世代間でコミュニケーションが取れないほど違う意味合いに理解していたりします。それが原因で、コミュニケーションが取れていないことがあったり。そういう親と子供の表現の仕方がずれてきているっていうのをすごく感じていて、おかしいなおかしいなって。それをマ

スコミが気が付かないで、取りあげないのもおかしいんじゃないでしょうか。

村上 それはマスコミは気付かないですよ。マスコミには期待しちゃだめですよ。一番遅れていますから。

上田 そうなんでしょうか。本当は一番敏感なはずなのに。

村上 マスコミでも良心的なところはありますけど、マスコミと教育っていうのは「日本語の壁」に守られてるから、一番変化に対して鈍いんです。だからそれはしょうがないです。あと、公園デビューするお母さんも他にどうしていいか分からないわけだから、公園デビューに関して自由なお母さんだっているわけだから、それはしょうがないですね。というよりマスコミはもう駄目ですよ。だから出来るのはああいうワイドショーとかを見ない人間をいかに増やすかぐらいですよ。

上田 ということは自分の判断基準をきちんと持てるようにしておかないといけないってことですよね。

村上 そうなんですが、それは持てないですよ。何かがないと。お母さんが自分の判断基準を持てるような自分との対象があればいいんですけどね。

上田 親をそういうふうにもつていくためにはどういうふうにしたらいでしょうか。

村上 それは僕にはわかりません。いろんな人がいますから。まったくそういうことを考

えることのできない人が七割くらいいて、もう既に変化に適応して生きている人が五%くらいいて、残り二五%は何かおかしいんだけど、何をしていいのかわからない。この人たちをこの五%に近づけることはできますけど、全体の親をレベルアップするのは無理ですよ。だからそういうことが可能だっていう幻想があるのは良くない。この七割の人に少しでも考える方がいいってことに気付かせる、そういうった戦略しかないわけですよ。一〇〇%に有効なソリューションってないですよ。

上田 現実問題、子供達がどうやっていいかわからないっていうのは、親が役に立つ生き様というか、こういうふうにすると自分の人生に得になるよ、というアナウンスをしていないからですよ。うちに帰っても勉強しない、勉強時間はゼロに等しい子がかなりいるといえますね。その中で歌手になりたいと言う子がいて、歌手になりたいから帰ってきて音楽ばかりきいている。親は高校に行って欲しいとは思ってるけど、今さらやっても追いつかないと嘆いている。

親は「勉強させたいと言っても聞かないし、小さい頃から歌手になりたいと言っているので応援したいと思います。そうしないと親子の関係が断絶しますから」と言っている。じゃあその子は歌手になるために歌を習いに行ったり、踊りを習いに行ったりして、可能性を切り開くために何か努力をしているかといったらしていない。何もしていないから、

子供はハアハア歌って時間だけが過ぎて行く。それはすごいもったいない。親がそういうことを言えない。子供に遠慮して言えないのでしょうか。

村上 いや、親はそれは遠慮してるんじゃないかって分からなくて言えないんだと思いますよ。歌手になりたいと言う子供に対して、対応できていない。社会の側も簡単に歌手になれるような共通認識がある。別に必ずしも今活躍してる歌手のすべてが歌の練習してきたわけでもないですし。

ただその場合、親の側にどういう対応ができるかってことなんです。そのときに親がスキルを得たり、トレーニングが必要だったり、そういうことをしておくとか社会的に有利に生きられることを態度で示しておけば、子供は逆に簡単に歌手になりたいとは言わないはずなんですよね。ただそれはほんと5%の母親にしかそういうことはできないんで、歌手になりたいって子が大勢いるってのはしょうがないですよね。

上田 それじゃあ、5%じゃない人たちを5%に近づけるには何をすべきなんですか。

村上 それは社会的なアナウンスをしていくしかないですよね。

上田 それはやっぱりいろんな立場の方が自分の立場の意見をアナウンスしていくということでしょうか。

村上 少なくとも僕は他の人のことはよく分らないんですけど、自分は機会をみつけた
り、人に聞かれればそういうことを言うっただけで。だからもっとみんな自分勝手になれ
ばいいと思うんですよね。自分のことを考えれば。だれも自分のことを考えてないんです
よ。なんか自分のことを考えたくないから社会のことを考えるって言うだけで、自分
のことを考えるのが怖い。それだったら、僕はもうやったら自分がハッピーに生きられる
のかとか、考えますけどね。ただ上田先生は立場上そうは言うておられない訳だから。

上田 でも、私も自分では基本的にはとつても幸せだと思ってます。自分で好きなことを
やっているから。苦労はすごくありますけれど。子供達に言うてるんですけど、お金の
ことを考えれば大変、でもお金に替えられない自己満足はあるって。それはなぜかってい
うと、あなた達がいい方になつていく。それが私がやってることが間違っていないなと
いう自信になる。やっぱり私はこの仕事が好きだから、そういった仕事を選んできたこと
が幸せだなんて思う。苦労でもういやんなっちゃうと思ひながら、こうやってやってこれ
たのも、そこだから、そこだけはね、あなた達に言うておきたいと言う。

村上 大丈夫、それは言わなくても必ず伝わっていますよ。

上田 そうでしょうか。実は小説家になりたいっていう男の子がしまして、村上さんに聞
いてみたいと言っていたんです。「芥川賞って一億貰えるんですか」って。もし俺が一億円

貰ったら先生にあげるよ、と言っていました。

村上 そんな貰えないですよ。一〇〇万じゃないですか、賞金は。

上田 それを聞いていた他の子が「先生それは生徒集める方が早いよ。こいつ漢字書けないんだから」って。

村上 でも、あの子達は感覚がシャープだなあ、と思いましたね。キューバの音楽も自分で行きたいって言ってたでしょ。ああいうキューバの音楽とかを聞いて、わあすごいなあ、ああ気持ちいいなあって思えるのは、大事なところが侵されていないんですよ。

上田 私もそういう意味では、いろんな問題を抱えているんですけど、ある面で選ばれてきた子供達だと思っています。何か目的をもって上田学園に自分で来ようと思った時点でひとつハードルは越えてると思っっていますから。

村上 自分で選んでますからね。

上田 そうですね。今回上田学園の旅行でヨーロッパのジュネーブにいるとき同時テロがあったんですけど、ジュネーブに入る前にチューリッヒでスイス人の方に家の中を見せただけの機会がありました。そのときに自分達のことは自分達で守らなければいけないと言っ、て、地下室のシェルターを見せて貰える機会があったんです。その後、あのテロがありました、それで子供達がものすごいナーバスになったんですね。私もナーバスになり

ましたけれど。でも世の中って、私達が知らないところで、テロとはまた違った形でいっぱい事件や出来事が起きている。今はマスコミやインターネットが発達して、同時に見られちゃうからすごいショックだけれど、そういうことはたくさんあるんだよって話をしていたんですね。

それでそのときに、三週間の旅行だったんですが、子供達と徹底的に話し合わなければならぬことがあって、何回も何回も上田学園の存続をかけても、という感じで話し合ったことがあるんです。私が子供達の壁になるという感じで。

それは自分の身は自分で守らなければいけないのに、お金はどうだっていいや、食べられるからいいや、という感覚なので、あなた親がいなくなったらどうする、親はいつまで生きていてくれないのよ、その前にちゃんと自分で生きていけるようにきちんとスキルなり身につけていかなければいけないのに、ってことをものすごい話し合ったんです。そのなかで異論もありましたけど、段々納得してくれて、もともとがいいものを持っているから輝き出すんですね。教師をやってて良かったなあって思う瞬間です。一端輝き始めれば、たとえどんな遠回りをして、きつとこの子供達は自分の納得行く人生を歩むだろうと思っています。

そういう意味でいわゆる規格型の子供達と違って、こういうところに来る子は簡単に測

りきれないすごいものをたくさん持っているの、それだけは大事にしてあげたいし、伸ばしてあげたいって思うんです。ただ私が心配なのは、うちの子達だけかもしれませんが、物事を判断したり解釈する最低限の基礎学力が足りないことなんです。

村上 それは先生のせいじゃないですよ。無理ですよ。それはオオカミに育てられたら、オオカミ少年になっちゃうわけだから。子供達が自然発生的に自分達で身につけるわけはないですからね。

上田 もう基礎を早くにやってあげなきゃって。でもたまにすごく笑っちゃうんですけどね、辞書を引けない子がいますからね。うちに遊びに来た大学生でも引き方を知らない子がいました。

村上 ただ子供っていうのは、基本的にみんな危機感を持って生きていますから、何かを学ばなきゃ生きていけないってことは本能的に知っています。だからそれが必要だということさえ教えてあげれば、ということなんでしよう。

上田 結局、本来子供にとって必要な失敗のチャンスをみんなでつぶしているんですね。放っておけば、自分で頭をぶつけて必要だって分かってくるときに、その頭をぶつける前に、お母さんが相変わらず守ってしまう。

村上 それはお母さんにしてもそういう過保護や過干渉の人もあるかもしれないし、まっ

たく関与しない人もいると思うし、だからお母さんの責任だけじゃないと思うんです。お母さんだけでは、今の日本でお母さんだけが進んで変化に適応できるようになるわけじゃないので。

ただ、全部変える、日本を変えようとしたら難しいわけだけど、そうじゃなくていいんですよ。ひとりが変わるだけでいいんですよ。誰も変わらなくても自分だけ変わればいいんだから。

上田 それは本当にそうですね。一番笑ってしまうのは、強制的に勉強させるのは駄目、学歴不要と言っておきながら、自分の子供だけは塾なりいい学校に行かせるというような茶番劇ですね。

有言実行してくれば、自分だけでも変えられればそれは大きいと思うんですけど、日本の場合、隣近所を見ながら行動しようとしている。個人ではなかなかできない。

村上 結局もう全体のことは放っておけばいいんじゃないでしょうか。とても僕は日本を変えることなんてできないし。少なくとも妹とか友達の家族なんかで、あるいは自分が小説を書くことで伝えていく。

日本とか親とかそういう括り（くくり）を一切やめるっていう方向でやらないと、結局堂々めぐりになっちゃう気がするんですよ。

上田 ええ。私は自分の中に昔の薬箱みたいに、いろいろな引出しをもって、何か問題や必要に応じてその引出しを開けて、参考にできるような情報が欲しいと思っています。たった四人の学校でも四人ともまったく違うわけですし、四人が同じ方向を向くわけではない。じゃあそのなかで、私がこれだと思うものを、いろいろな方から学んでストックしておいた薬箱から選び、まず投げかけてみる。それを受けるか受けないかは子供達次第。私は情報を発信しているから、そこからもらったときに必要なものと捨てるものを判断する力を持って欲しいと思っています。

そうやって考えていたら、村上龍さんだったらどんな学校作るのかなって思ったんです。

村上 僕は学校作らないですね。

上田 たぶんそうおっしゃるだろう、作らないとお答えになるだろうとは思っていたんですけど、作らないのはどうしてですか？

村上 小説を書くだけで手一杯なのと、そういった、ない仮定をしても仕方がないですか。例えば文部科学大臣になったら何をやるかとか聞かれるんですけど、やるつもりないですからね。そういうことを考えてるひまがあつたら次の作品を考えた方がいいです。

上田 本当にご自分がやりたいことがわかってらっしゃるんですね。できることとできないことと。

村上 まあそうですね。

上田 どうしてそうなったんでしょうか。

村上 日本的集団に馴染なじまなかったからですかね。

上田 それははじめからですか。生まれてからそういう環境で育っていたってことなんですか。

村上 うちの父も美術教師で画家だった、というのもあって、別に人と同じじゃなくてもいいって言って育てられましたから。個性的であっていいんだよということはよく言われて育ったんで。だからさっきおっしゃったような過干渉の親のタイプとは違いましたね。うちの母も教師でしたが、うちの母は忙しくて、過干渉するひまないんですよ。なんか相談しても忙しい、うるさいから向こう行つてろというように、もうどうしても自分で考えるしかないんですが、あれはすごく良かったと思いますね。今になってうちの母は、「あの頃悪かったわね」って言うんですけど。別に全然悪くはなかったですね。だから極端な話、日本のお母さんはみんな働けばいいんじゃないですかね。

上田 家でこれだけは守りなさい、っていう決めごとのようなものは何かありましたか。これはやっちゃいけないとか。

村上 弱い者いじめと人に迷惑かけちゃいけないってのはありましたけど、それは簡単な

決まりです。弱い者をいじめるのはフェアではないことと、バスの中で騒いだりすると多大なコストを払わなければいけなくなる、そういうことは社会性ですよね。

上田 確かにうちも生徒をお預かりするときには聞くんですけれど、お宅は最低限これだけは、というのがありますかと。

村上 ただ僕は子供に何にも言っていないですよ。生まれてから一回も勉強しろって言ったことがないんです。ホテルのロビーとか走りまわっちゃだめだよ、とかは言いましたけど、そんなのは教育というより、もう常識みたいなことなんです。

上田 お子さんは今、大学生ですが、こういう方向に進みたいという相談にのったりされましたか。

村上 勝手に決めていきましたね。

上田 お父さんやお家の方針というのは。

村上 いや、うちは家内も何にも言わないですから。よくわかんないですけど。社会的には自分の興味の持てる道を選んだ方がいいとか言ってますけど、自分の子供には言ったことないんですよ。

上田 お子さんもそうやってご自分で進む方向を決めていますが、村上さんはどこを自立の基準として置いていらっしゃいますか。

村上 精神的な自立という意味では小学校くらいからはじまっていますか。まあ、今も相当自立してると思いますよ。自分で何かを選び取っているという意味で。

上田 そういう最低限の規律、これだけはだめというのがあって、その他は放っておかれるなかで自然にそうなったということですか。

村上 ええ、叱ったことはないです。多分彼の人生でも三回くらいしかないだろうな。ひとつはホテルのロビーで走ったこととかそういうことですが、伝わればやめますから。

上田 その伝わるってのはどうやったら一番伝わるのでしょうか。

村上 自分がやらないってことでしょね。

上田 その伝え方は昔言った「親が背中育てる」というような意味ですか。

村上 それとは違うと思います。後ろ姿見ててもわからないこと多いですよ。いやずっと見てるんですよ、子供って。親しか参考にするしかない時期がけっこう長く続くから。だから恐いぐらい親を見てますよ。そういう意味で、親だからどうしたらいいかっていう絶対はないですよ。

上田 大人として子供が自分達をきっちり見ていることを意識しなさいよ、ということですか。

村上 ただそれも自分はしなかったですから。わからないんですけど、何か背中を見て育

つというのはちょっと違うと思うんです。それはなんで違うかという、背中を見て育つてのはコミュニケーションがなくても大丈夫ってニュアンスがあるじゃないですか。そんなことはなくて、コミュニケーションは必要ですよ。

上田 お子さんと話をなさる機会が多かったですか。

村上 話はよくしました。

上田 だから村上龍さんのいうコミュニケーションによるコントロールっていうのは、ほんとにコミュニケーションって意味なんですね。そうすると本でおっしゃっているコミュニケーションの整備をするというのはどういう意味なんでしょうか。

村上 それは間違っていたら素直に謝るとか、そういうことですよね。

上田 本当に人間としての基礎ということですね。また、いま個性教育、ゆとり教育などいろいろ掲げられていますけれど、ああいう言葉に対してはどう思いますか。

村上 いや、悪くはないと思います。結局、どれも昔の規格人間ではいけないんだ、という反省が込められているんで、それは完璧じゃないですけど。

上田 確かに教育はどういうふうに変わっていくべきか、というのは現実には動いてみないとわからないところがあります。やってみてはじめてその時の子供によって違う結果が出てくるでしょうから、またそこから変えていかないと仕方ないと思います。

村上 さっき言ったように何かで食っていかなきゃならないんだってことは事実なんで、子供にはわかると思うんです。だったら嫌なこととして人にこき使われるよりも、自分でやりたいことやった方がいいと思わないかって。そう言えばみんなうなずくんじゃないですか。

上田 そうですね。やっぱり食べていく方法を身につけなきゃならないし、それが一番根本だと思います。だけど現代の子供にその話をする、だって十分食べれるし、飢餓なんか経験したことない人間にそういったことを言っても仕方ないよって言うんですね。だから私はそういうことを分からせるというか、体験させるチャンスを与えるようにしています。そうしないとなかなか納得しないですから。

村上 それは社会的な背景が大きいのかもしれません。僕は小学生の頃、サラリーマンという選択肢をなくしたんで、そうすると何かで食っていかなきゃならないってことをずっと考えていましたから。

上田 そこがすごいですね。

村上 サラリーマンで食っていかないんだったら、ちっちゃいころは医者とか弁護士になろうと思っていたし。それに食うに困らないからといっても、子供たちが食っていけるっていうのは親の金ですからね。親の金だってことは自由がないってことですよ。親の言うとおりにしなきゃいけないってことです。

上田 親がスポンサーですからね。でも子供達は親がどうにでもなる、自由になると思ってるんです。

村上 僕はとにかく親の元から離れたかったんで、自分で稼がなきゃならなかったわけです。例えば好きな海外とか行けないでしょ。

上田 そうですね。

村上 好きなCD一枚買えないですよ。自由じゃないですよ。僕は芥川賞取って本が売れて、そのとき一〇〇〇万くらい入ってきたんですけど、そのときに自由だって思いました。一〇〇万おろして秋葉原にステレオ買いに行つて、あの気持ちいい感じは最高だったですよ。

上田 でも、たぶんそれが村上龍さんの原動力にあるんでしょうね。当たり前のこととおっしゃったけど、当たり前のことが今ないというか。

村上 当時も当たり前ではなかったですけどね、自分はメインストリームじゃなかったし。ただ、教育関係者やメディアとか、縁もゆかりもないような銀行とか証券会社とか大きな会社が僕の話の話を聞きたがるということは、本当は今の時代は僕がもう当たり前じゃなきゃいけないってことだと思います。

上田 本当はそうなんでしょうね。それと、みんなが憧れているんじゃないですか。

村上 たぶん僕に変化に適應するコツを聞きたいんじゃないんでしょうか。

上田 わかります。だってみんな変わらなきゃいけないっていうのは意識として分かっているけれど、それを實際どうしたらいいのかわからないっていうのがありますからね。

どうしたらいいかわからない問題と言えば、今の小学生は四五分間ずっと座っていることができないということですね。幼稚園は幼稚園で自由奔放に育てなきゃいけないと言っていて、小さいときから座学をやらせない。小さいときから団体生活のなかでも静かにしてなきゃならない時間があるとか、そういうことを教えるのがいけないという風潮がありますか。

村上 それは慣れてないからでしょう。座らなきゃいけないということは、座らないといけないじゃなくて、座らないとコストを払わなきゃいけないということです。そういったきちんと座る訓練をしていない子はコストを払わなければいけないというコンセンサスができていいのではないのでしょうか。

上田 それが座る訓練をせずにずっときてしまうと、授業が成立しなくなってしまう。

村上 この点に関しては、藤原先生やそのところだけは河上先生のおられるプロ教師の会と唯一同じなんですけれど、小学校のクラスで今から授業をしますと言って、席に着かない子は家に帰ってもらうということをしたらい。もう一回幼稚園からやり直してもら

う。それしかないんじゃないかと思います。

上田 本当にそうですね。

村上 そうしないと、もう小学校ってのは、授業のときは席に着くんですよ、ってことを教える場ではないですから。

上田 それぞれ幼稚園、小学校の時はというようにそれぞれ役割があると思うんですよ。その役割、境界線が今なくなっちゃってるんじゃないかな、と思います。

村上 席に着くのを教えるのは幼稚園ですね。だから小学校で席に着かなければコストを払うことになるんですよ。これは下手をすれば、死刑になってしまう問題ですからね。

ルールを守らなければ死刑になったり、逮捕されたりする。だからルールを守るってことがマストになって、ルールを守らなければコストを払うことになるんだよ、ということが理解できるようにするってことです。ただそれは簡単なことで、個別にやるんです。ばらばらに席につかないクラスの子供を全員席に着かせようとするから難しいのであって、それぞれ家に帰ってもらって、それから個人個人に教えてできてから学校に来てもらえばいいんですよ。

上田 本当にそういうシステムを作るといいですね。

村上 例えば、ホテルのロビーを走ったうちの息子を叱ったのはサイパンか何かのホテル

でしたけれど、非常にそのコストを払わなければならないんですよ。社会常識に反したことをすると。特に海外ではそうです。結局子供だからといって、なあなあで育ててしまう、これは尊敬されないんです。例えば移民としてどこかの国に行った場合に、その国のルールに従わなかったら生きていけないのと同じです。

上田 スイスに行ったときに、スイスの教育に触れる機会があったんですが、スイスではいくつになっても高校や大学に行ってもいい。個人個人がきっちり自分の生活をしていくことをよしとしているから、誰でも大学に行くというのではなく、本当に行きたい人が行けばいいんです。研究したい人は大学に行って研究できる、でもそういうことに全然興味のない人にも大学とは別のコースがある。自分が選択できる分野のコースを選ぶ、そこがスイスのいいところだっけと思うんですけれど。

むこうは自己確立っていうのをすごく学校で要求します。その子がどうやって自分を確立していくのかってことを教育する。そのかわり自分の確立したことを守る術として、他人を侵害するようなこともしないっていうことがきちんと守られている。

小学校一年から落第がありますし、義務教育期間は約八年ですが、必ずそれ以上やりなさいということではない。個人個人がもっている個性、能力っていうのは違うから、それを画一的な教育はできないっていうことが常識として社会に定着している。

だからたとえ小学校一年で落第しても、「それでもう一年分からなかったことをきっちり理解してから二年生に進学できるね」と言って、決して焦らない。でも日本だったら、落第したと言ったら親は何が何でも上に上げてくださいと言って頼み込む。そういうケアをするシステムがないから。そこがスイスと日本の教育の違いだなという気がします。そういう意味では、人のことじゃなくて自分がどういう生き方をしたいのか、自分がやりたいことをはやく達成するにはどうやったらいのか、どうやったら自分が確立できるのか、っていうところを小さいときから教えていますね。

村上 日本ではそれはまず大人がすればいいんじゃないでしょうか。いまだに大人がそうしてないですから。大人の社会が自立を前提とした価値観で生きていないですから。そうしたものを子供だけに教えたり、期待することはできないでしょう。

上田 ええ、教育を作る人たちにそれができていませんから。教育制度について話してしまふときりがありませんし。

村上 もう教育制度には期待できないと思います。教育制度のことは悪口言ったり、批判したりしてもしようがない。

上田 そうですね。ある時期から、親でもない学校でもない。まず自分がやるしかないなあって思ってきました。だから私は学校を作ってしまった。それとみんなで良くなりましたよ

うって思いがちですけど、それもやめた方がいいかもしれませんね。

村上 ええ、自分勝手にやるのが一番いいんじゃないですかね。自分とごく少数の人たちからっていう、変えられないことは仕方がないっていうことです。もちろんそうやっていく中でストレスは発生するでしょうけど。

上田 ええ、ただ村上龍さんはご自分のやりたいことをおやりになっっていて、ストレスはあまりないんじゃないでしょうか。そんなことを子供達と話していたんですけれど。

村上 ええ、ストレスはないですよ。忙しいですが。

上田 自分が好きなことをやって楽になったらいいじゃない、ということに尽きるわけですね。モデルがいないなら困るけど、実際村上龍さんという方がいるからいいじゃないと子供達には言っているんです。

了

二児の母から上田先生への手紙 4

上田先生が学園の子供達の間で悩んでいることは本来親が悩むべきことを親に代わって……、いや、親という役割では悩むことに気づかない部分まで子供のために悩んでくれている気がします。先生のお話を読み進めていくうちに、親が自分を持つことの大切さはわかるけれど、不幸にも自分を持たないまま時間を過ごしてきてしまった親達に、「子供が不登校になったから、親は自分を持ちなさい」と言っても、きっと親はもうわからないし、仮にわかったとしても「自分を持つ」なんてこと、すぐにできるようなものではない、とも思います。もう子供に本当のことを言ったほうがいいのかもしれない、という気までしています。「親は間違っただけで自分というものを持たないまま親になり、子であるあなた達を苦しめるかもしれないけれど、あなた達は、その間違っただけの親に負けてはいけない」のだと。「その親に打ち勝って、自分を作り、自分を探し、今度は自分が自分を持った親になりなさい」と激励するしかないような、そんな気がしてきました。問題のない（起こらない）社会など、そんなものは存在しない。逆に、仮にそんなものがあるようにみえたとしたら、むしろそんなものは怪しくて健全な社会ではない、という事実は、バブル経済が崩壊して私達は随分とたくさんの勉強をしてきたと思います。学校だって、人間だって家庭だって何の問題もないなんて、偽善ばくって、うそ臭い。結局のところ試されるのはその問題が起こったときの解決能力なのでしょう。不幸にも、今までの子供達はその問題の中に放り込まれたままなのかもしれません。問題を解決する糸口を見つけられなくて。でも、ここまできたら、子供達自身にも、その中で自分自身を強くしていってやらなければいけないと思います。なにより自分自身のことなのですから。大人という社会が子供に、「こういう大人になってほしい」とか「こういう社会を作ってほしい」「こういうことのできる大人になって欲しい」といった子供の将来像を求めて、その要求を具現化するための教育手段が学校という形をとるのだから、もちろん大人も社会も、自分達の将来社会を作るような気概で、子供を取り巻く環境作りに取り組まなければならないと思います。

そして、先生のお話を伺い、私自身いろいろと考え、自分の力で生きていける（助けて欲しい時には助けてと言え）、問題の中にあっても負けないで解決してゆける「強い子供に育てたい」と思いました。そうすれば、愚かな母親である私も、子どもと一緒に強くなっていけるかも。（虫がよすぎるかな？）

「子供に強くなってもらいたい、母親として今何をしたら？」と考え、「でも、私は愚かで、失敗もするし……。うーむ、安直かもしれないけれど、母親としては、私という人間は愚かだけれど、あなたという存在を大事に思っているということを伝えて、大事に思っているからこそ、こういう大人になって欲しいのと伝えていくしかない」。きっと私はこれからも毎日二人の娘を育てながら、『これでいいのかな？』と生活のさまざまな場面で自問し続け、そしてその自問の結果が本当に出るのは、何年も後になりますが、上田先生の言葉に、これからの子供との生活に、そして自分自身の生活に、たくさんの機知をいただいたと思います。たくさんの考える機会と有意義な言葉を下さりありがとうございました。

上田早苗×陰山英男

「小学校の現場から」



Hideo Kageyama

1958年兵庫県生まれ。兵庫県朝来町立山口小学校教諭。同校での基礎学力形成の取り組みがNHK「クローズアップ現代」で紹介され、話題となる。著書に『やっぱり「読み書き計算」で学力再生』（小学館）などがある。情報教育や国際理解教育など、多面的な実践にも定評がある。「落ちこぼれをなくす研究会」常任委員。

上田 陰山先生の執筆されている『やっぱり「読み書き計算」で学力再生』などを読ませていただき、とても共感しました。私は親の転勤などでスイスにやってきた子供達を教えた経験がありますが、彼らはスイスの学校でドイツ語、インターコミュニケーションテイスクールで英語などの勉強をしながら、日本人学校の補習校にも通っていて、日本にいるときよりも学習の負担が相当大くなるんですね。そこで子供達に残された少ない時間で効果的に教

えるために、自分達で文部省から送られてくる膨大な教科書や通信教育の教材をばらばらにしました。どこが骨で、どう教えたら一番合理的かということ、もう一度自分達で構築していったんです。一学期と三学期で学ぶ項目をくつつけた方がわかりやすいのでは、とかいろいろ工夫しました。そうやって教科書単元のつながりを考えているうちに、なぜ子供のレベルで自然に次が欲しくなるような積み上げをしていないのか、すごい不思議だなあ、合理的じゃないなあと疑問に思っていました。

陰山 そうですね。例えば「百ます計算」にしても教科書の単元を無視してるわけだから、普通に指導要領に則^{のつと}ってやっている先生からは邪道に見える。ただ、生徒の視点にたつて、生徒がよくなることが一番だ、っていうのが基本ですから。

上田 陰山先生にお目にかかって、それを純粹にやっておられる方に久しぶりに会ったという気がしています。しかし、どうやって子供達に飽きさせないで、百ます計算などをやっておられるんでしょうか。最初嫌がる子などもあると思うんですけど。飽きるっていうのは飽きる以前にやりたがらないという意味で、やる前にこんなものはくだらないだとか、ある程度年齢がいった子供は特にそう思うのではないのでしょうか。

陰山 これは悪く言っちゃうと、騙^{だま}しちゃうんですよ。「嫌がってもいいよ。でも一ヶ月騙されたと思ってやってごらん。やっているうちに、必ず力がつくから」と。「今まで何百

人と教えてきて実は全然伸びなかった子は一人もないんだ。あとは君達がやるかどうかの問題なんだ、君達はとうする」と投げかける。だからそこで子供達に一度決断をさせるわけですね。子供達の中に伸びたいという気持ちはあるわけだから、それを刺激するんです。最初子供達は、しんどいからいやだと思ったり、あるいはやる前から失敗したときのことを恐れているわけですよ。でも、これをやれば絶対力がつくんだと子供が信頼してくれば、実際努力してくれるし、また必ず伸びるんです。

上田 これをやってあげれば大丈夫という安心感を与えることも大事なんですね。けれど、逆にうまく伸びてくれない場合はどうしますか。

陰山 もちろんすべての子が同時に伸びるわけではないのですが、もし伸びないとしたらいろんな要因がありますよね。子供達がなぜ伸びないか原因を一つひとつ詳細に分析していく。家庭的な要因であるとか、ごく稀^{まれ}に能力的な問題であるとか。ただそうやっていくと原因っていうのはそんなに多種類あるわけじゃないんです。だいたい原因を特定できるんです。そうするとある程度こちらの対応もマニュアル化されてくる。だから、ぼくらの学校の基礎学力定着の実践をそのまま鵜^う呑^のみにしてやってもうまくいかない、と言って電子メールなどで相談してこられる方がいるんですけど、大概はまたこちらからのアドバイスでうまくいっているようです。

上田 その教えることに行き詰まっただの電子メールでの問い合わせや相談内容というのは、他にこういうことが多いのでしょうか。

陰山 大抵は単純な内容です。思ったように百ます計算の記録が上がらないといって焦ったり、すぐ結果を求めることからくる焦りからの相談が多いように思います。人の能力はある時期、努力してもずっと伸びないでいて、ある時期がくるとぐぐつと階段の段を上がるように飛躍的に伸びるものですから、焦る必要はないのですが。

上田 先生や親が必要以上に過敏になっていることもありますよね。しかし、どうして過敏になるのでしょうか。

陰山 ぜんぶ教師や親のせいで子供が伸びたり伸びなかったりしているからではないでしょうか。親もこうでなきゃいけない、っていう強迫観念のようなものがあるからではないですか。子育てでも、そんな思うようにうまく育つ訳ないんだと開き直ってしまったら、全然どうってことないんですけどね。子育てに絶対失敗が許されないなんてことはなくて、試行錯誤の中でしかできないはずですよ。

上田 そうですね。これは私が学校を開こうと思った理由のひとつでもあるんですが、日本であまり行かないからと言って、とても安易に、若年の留学生を海外に連れていくことが多かったんです。でも日本でうまくいかない人間がむこうであまりくわけがない。そ

して親はお金だけを送って、海外で直接目に見えないから勝手に安心している。実際は高校一年生でも小学生レベルの勉強をしなくてはいけない学力なのにもかかわらず。これを見ていて何か違うな、迷惑をかけるなら自分の国にかけるべきだなあ、と。

そうやって自分でフリースクールを作ろうと思ったときに、一番ネックになったのは先生の選択でした。先生の力量、技術もそうですが、それ以上に人間としての魅力、先生がご自分の教える科目なり事柄に対して強い憧れあこがを抱いているかという部分を重んじました。

陰山 確かに日本には教師の力量や技術で子供を育てるという迷信があります。ある意味、職人芸のような。しかし個人技のようになってしまうと今度は六年間でどう伸ばすのか、九年間でどう育てるのかというように、学力作りを教師が連携させて進めるという発想が抜けてしまいます。

僕らも百ます計算とかやっていますけれど、こればかりにのめり込んで、これがすべてだと思っちゃいけないと思っています。あくまで次のステップに行くためのトレーニングですから。ただ長年「落ちこぼれをなくす会」などで研究してきて、現在はあれ以上に短期間で基礎計算力をつける方法がないんです。

上田 確かに日本の中でも、都市部とそうでないところで地域ごとに子供達も違うわけですし、親の職業や風土などの影響を受けてまた違った反応が出てきます。ただ、どこへ行

ってもいいものはいわけですから。だから百ます計算などは他の国へ行っても評価され
ると思っています。ただ取り組み方や、方法論が違ってくるということなんですね。

陰山 そうですね。

上田 私の経験では家庭が学校に要求するものが大きすぎたり、結果を性急に求めたりし
すぎるのでは、と思うんですが、先生は実際にお仕事されていてどう感じるでしょうか。

陰山 期待が大きいというよりも、家庭が家庭としての本来の機能を果たしにくくなっ
てきたという気がします。

上田 期待というのならいいんですけど、問題を何でも親が学校に投げてよこしてしま
うというような傾向はありませんか。

陰山 あるかもしれません。でも、うちの場合はだからこそ、投げてよこされる以前に、
逆に家庭にこちらからこれだけのことをしなきゃだめですよ、というように家庭に呼びか
け、情報発信をしてきました。それが良かったんだと思います。

ですから、そんなむちゃなことを言われることは少ないですし、たまにあっても職員室
でみんなでどうするか話し合いますので、保護者のクレームで悩むということはあまりな
いですね。学校ぐるみは必然的に地域ぐるみに発展していくんだと思います。その分保護
者の方は大変だったと思いますよ。



上田 それは具体的には、子供がきちつと朝食を取ることの徹底指導だとかそういうことですよ。

陰山 そうです。ただ家庭の教育のせいというより、もう少し突き詰めて言うと、日本そのものが子供の存在を許さない構造になってきていると思います。要するに、教育問題のなかで一番象徴的に表れている数字というのは出生率だと思えます。現在、日本の出生率が一・三―一・五人の間の数字になっていますよね。そういう数字を見ると、まず子供にすんなれない世の中、社会そのものが子供の存在を許さないような時代にまで来ていると感じます。私達の地域たじま但馬では、あの広い地域、兵庫県の北四分の一くらいですが、中学校三年生、一学年に二八〇〇人しか生徒がいらないですよ。それだけじゃありません。去年生まれた子供達は一六〇〇人です。かつてかこぼた神子畑という地域には鉾山があつて子供が三〇〇人いたのが現在一人です。今まさしく私たちが直面している問題は、子供がいらないということです。子供がいなくなってしまうえば社会も子供に合わせる必要がないじゃないですか。そしてますます子供がいづらい社会構造になっていくのではないか、そんな不安があります。

子供がいなくなつたらこの社会が存立できなくなるということとは分かりきったことなのに、いまだに教育に、子育て支援にお金も手もかけようとしないう社会。銀行の救済も必要

かも知れませんが、もつと深い危機が進行してるんじゃないでしょうか。

上田 そういった意味でお金の使い方が下手ですね。

陰山 お金の使い方僕が一番憤りを感じたのはバブルの時です。日本人が何をしたかという、サーキット場を作った、わけのわからん絵を買った、要するに金の使い方が下手だと、いくらお金があっても社会を良くしていくために使われないんだと失望しました。じゃあ僕らの役割は何かと言ったら、生まれたくても生まれて来れない声なき者の代弁者じゃなきゃいけないと思うんですよ。だから僕は社会に対して徹底的な頑固者になる。

上田 そうですね。何でも自由ですって世の中はないんですから、子供に対しても大人が壁にならなければいけない時があると思います。誰も壁にならなかつたら、自由と表裏の義務や責任も学べない。でも周りに壁になっている大人がいれば、子供はそれをどうやって飛び越えようかと工夫する。そこが説得したりするコミュニケーションの原点になるのではないのでしょうか。でも今は全部自由だと言ってしまっている。だから私も物分かりのいい大人じゃなくて、頑固者が必要だと思っています。

陰山 例えば若者達っていうのはいろんな変なことやり出すじゃないですか。そのとき私達大人が頑固者になって駄目だっていいいます。駄目だっていうけれど、若者の中にそれでも乗り越えようとする本物の気持ちがあれば、その時その子は決意すると思うんです。今

に見とれ、と。だから僕はいいと思うんですよ。例えば、野茂が海外に出るとき、足引つ張ったりする者がいた。けれど、野茂はこんちくしょうと思って出て行って、成功したわけですよ。だからそういう面でみると、今の若者も捨てたもんじゃないなあ、と思うんです。スポーツの世界では野茂のような人間が出てきている。でも一般のいわゆる知性を司る分野で、そういう若者が出てこない。あるいは二〇世紀文化を破壊するかのような恐怖心を与える知性が若者の中から出てこない。

上田 本当に元気のいい若者っていないですよ。みんな穏やかで。

陰山 これは時代背景も大きいと思うんです。東西冷戦が終わって対立がなくなっちゃいましたね。対立がなくなったら後は失敗しないのがいい。しかし本当はもう少し学校の中に対立する異文化、ぶつかりあう異質なものがあっていい。多様な知性が出てきていいと思うのだけれど、冒険がなくて手堅く失敗がないのがいいとされる。これは日本のシステム的な問題だと思うんですけど、そういうなかで教師というのは手堅くいかなきゃならない職業のひとつとなり、官僚的に失点をしないようになってきたと思うのです。

上田 私が教育実習に行ったとき、校長と教員が対立していて、生徒が完全に置いていかれている。それを見て、教師にはなるものかと思ったことがあります。今先生の方でこれをこう教えない、伝えたいんだという部分がない、あるいは打ち出せないのが問題なので

はないでしょうか。

陰山 教師が官僚的になってしまったから、そういうことも起きるんだと思います。

上田 勉強ははじめ強制の側面があつて当たり前ですが、たとえばお箸はしを持つ訓練をしなければ食べられないと同じで、鉛筆が持てなければ先に進まない。つまり基礎訓練的な勉強があつてはじめて自発的な学問、自分からの学びに変わっていくんじゃないかと思うんです。だけど、勉強さえやっていればいい、塾に行くなら掃除当番をやらなくてもいいと大人が許してしまった。それが受験などで極端になった時期がある。しかし、その反動として今度は、勉強を強制するのはいけない、となつてしまった気がします。

陰山 ただ、小学校の現場にいとね、勉強のできる子にしなきゃいけないというプレッシャーを僕はあまり感じたことがないんです。これはおそらく、小学校と中学、高校が別の論理で動いているからだと思うんですよ。小学校は徳育重視とくいくで、中学校に入った途端に受験しなきゃならないからまったく別の論理が働いてきます。

上田 これは東京だけなのかもしれないですけど、いま高校で生徒をあまり取らない学校があるから、中学で受験して入ろうという競争しょうけいがあります。

陰山 そういうことは小学校の側はむしろ奨励しょうれいしないし、小学校側は受験にはアレルギー意識があるんですよ。

上田 学力低下や学級崩壊の問題など一気に問題が噴出してきましたが、そのことに対してはどうお考えですか。

陰山 学力を伸ばそうとしても、朝ご飯を食べてきてないから子供達が踏ん張れないようなことがあります。また自由にさせれば暴れたりして授業にならない。そうやって子供達の根本の部分が崩れているから、学校ではもう対応できないことが、学校で表面化しているわけです。

上田 それは家庭が良くないという意味ですか。

陰山 いや、それは家庭自体がもう社会の中に飲み込まれていますからね。単純に家庭が悪いとは言えません。例えば男女雇用機会均等法といっても、女性が働けるようにするだけじゃなくて、男性が早く家に帰れるようにするのが本当の意味での均等じゃないかなと思います。

ところがそうじゃなくて、女性が社会進出して働くことがいいことだと、部分的なものが突出して主張されているように思うのです。結局男性も女性も働く時間が長くなってしまう。男性と女性というものが水平な土壌のうえでいかに仕事ができるかという競争をさせられる訳でしょ。子供の頃に深夜一時二時まで勉強したという経験を持つ子供達がサラリーマンになるわけですから、午前一時二時まで仕事するのは当たり前じゃないですか。

結果子供を育てる社会がなくなっている、そういうことだと思っんです。だから私たちは何を考えなきゃならないかって言ったら、まず子育ての喜びを思い出さなきゃいけないんだと思います。

上田 結局みんな、学校が悪い、親が悪いと言い合って、本当のところ本質を見ていない、私はそう感じます。陰山先生は学校の役割、家庭の役割という部分ではどうお考えですか。

陰山 僕は極めてシンプルに考えています。学校は勉強、家庭は子供の心や健康を育てるところだということです。私達はお互いがそれぞれの役割を果たし、それを地域社会のなかで融合していったって、社会に役立つ人間を作ろう、という極めてありきたりなことをやってきただけです。確かに受験競争の構造には問題があります。しかし、だから勉強させないという極端な姿勢ではなくて、基本の学習はしっかりやっていく。

上田 陰山先生の目指す子育て、教育とはどんなものですか。

陰山 うちの学校は「読み書き計算」というイメージが前面に出ていますが、たとえば運動会であれば、縦割り集団を作ったね、それこそ授業そっちのけでまるまる三週間運動会をやるわけです。そうすると縦割りで行うものだから、運動会が終わった後でも休み時間、六年生の子が一年生の子を肩車かたぐるましてやって、中庭でごく普通に遊んでいるわけです。そこには昔あった子供社会というものが見事に学校の中で再生している。このように子供達が



必要としているものを、そのまま与えたい。僕はこういった「元祖学校」というものをかたくなに守っていきたいと思っています。

上田 私も子供を見ていて気になるのは、他人が困っていても何もしない、つまり他者に無関心なことです。年上だろうと年下だろうと、伝えたいことを伝えていくのは基本です。だから私は学園に年齢制限は設けないんです。

陰山 とにかく子供社会がないことが問題ではないでしょうか。誰かと遊ぼうと思っても、みんな塾に行っちゃうし。僕は子供に外で遊んで来いと言うときにふっと思うんです。五〇メートル先に公園はある。でもその五〇メートルの間には車がびゅんびゅん通る道がある。そうすると、公園まで親が連れて行ったりして、もうこけた、喧嘩したと、すぐ親の手が出てしまうわけです。もう過保護にならざるをえない状況があるわけです。たった五〇メートルの道、それが子供社会をつぶしてしまっている。こんなことを私はわが子を育てる中で感じました。家庭の過保護もおかしいが、社会の無保護もおかしい。犯人さとしと対策ばかりを話し合うのではなく、もっと根本のゼロベースから考え始めることはできないものかと思います。

上田 そういうご自身も過保護にならざるをえない状況にいらっしゃって、どこか自信を失いかけている親や先生にメッセージを送るとしたらどんなことを言いたいですか。

陰山 難しい質問ですね。親や先生は、学校っていうのはもともと子供が問題を起こすのが当たり前ですから、まず神経質にならないことだと思います。山口小学校は問題が起きてもそれにフレキシブルに対応できるよう、現実的な意味での理想的な学校作りを目指してきました。そのために、子供に普段からできるだけ多く関わるように努力してきたという自負があります。

また多くの批判を浴びながらも、実践を続けることができたのは、ただ一点子供が伸びるという事実があったからです。子供が伸びるという事実を作ろうよ、その事実から考えようよ、と話し合いました。

最近、ゆとり教育の反対の極に山口小学校があつてというふうに言われてしまうけど、そういうわけではないのです。理念で教育を考えるのではなく、子供の事実を第一に考えてきたことが一番のポイントだと思うんです。僕は元祖学校をやってるだけなんだと。元祖学校とはいったい何だといったら、それは子供がすすく伸びていくこと。それにゆとりだ何だという理念をつけるからややこしくなる。まずは子供が伸びるというひとつの事実から物事を考えていきたいのです。それはどういうことかという、事実を自分の目で見て耳で聞くことです。今はこれがないんですよ。

今教育の現場は多くの批判にさらされています。だから、それに対応するためある一定

の予定された成果なり結果を無理矢理つくらなければいけないようになっていきます。だから実践が後手に回ってしまうのです。

上田 子供が伸びるというひとつの事実から物事を考えていくというお考えを持つに到ったのは、どうしてでしょう。

陰山 四年連続、同じ子供達を担任したという体験に始まっています。普通大体一年か二年ですよ。ところが普通では考えられない四年という期間、担任をやったことで、子供達はこちらが考えている予想を越えて、はるかに伸びることがわかったんです。いろいろな批判や社会で語られていること、それらは目の前の事実とは全然違っていました。読み書き計算などの力をつけることで、子供は何より人間的に素晴らしくなっていくという手応えが感じられました。

知育が徳育を伸ばす。これは理屈ではないんですよ。事実があつて、じゃあこれを普遍的にやるためにはどうしたらいいかと考えました。その結論として、徹底的に基礎を反復して習得していくというシステムを学校のなかに定着させる提起をしたわけです。これは最初から、基礎をやれば子供が伸びるという理念があつたわけではありません。はじめ低学力の子を伸ばすために基礎を徹底して、その結果子供が想像できないほど伸びたという発見をし、そこから出発していったのです。

子供達が伸びるためにはある一定の普遍性がある。それは何かと突き詰めていったら、言語であるとか計算であるとか、基本的な力を活性化させることに尽きるということがわかった。そして考えてみたら、それは何も新しくはなく、江戸時代から寺子屋だとかそういう形でいっぱいあったわけです。

上田 寺子屋というのも単純なことを繰り返して、定着していったわけですね。私は他人と比較しないので、その子の昨日としか比べないんですが、そうすると小さな変化でも非常に励みになるわけです。しかし、子供が他人と比べてばかりいると目先の数字、点数だけが大事になっちゃうんです。しかし点数を取るというのは、その時だけできたんであって、終わればすぐに抜けていく。もちろん受験用の暗記のトレーニングも必要だけれど、しっかりとした基礎がないとだめだと思います。

私は不登校の生徒の大部分は、基礎学習ができるようになるとかかなり不登校は解消されるのではないかな、と思っています。基礎さえできれば学校に行っても、先生の話がわかるから面白いというように変化していくはずですから。

陰山 そうですね。

上田 親の側から言うと、近年主婦なんてつまらないという風潮が生まれているように思えます。別に働いても、外に出てもいいんですけれど、主婦なんてつまらないという考え

ではやはり家庭でいい子育てはできないんじゃないかと思っています。だったら、本当のプロの主婦になったらいいと思うんですけれど。

陰山 子育ての喜びというのを親が思い出さないと。今はそれがちよつと置き去りにされていますよね。

上田 そうだと思います。だから今、子供を負担だとか、邪魔だとかいう親が現れてしまう。子供をペット化してしまふ。自分の言うことを聞いているうちはかわいいけれど、ちよつと反抗し出すと、何でそういう子になっちゃったんでしようと言って、慌てて手を離して、誰かにお願いしますとなってしまふ。親も人格があるし、子供も人格があるわけだから、親はご自分の生活をきちんとしてください、と言いたくなっちゃうんですけれど。

陰山 僕もそのところで今すごく詰まってきたと思うんです。僕らなんか学校でやれそうなものってのはやれるだけやってきたつもりなんです。しかし現実に出ちの学校でも、最近登校拒否ぎみの子が出てきた。私達もいろいろ悩んでいます。

今僕自身でやっているのは、特別な用がなくても気になる子の家に電話して、「気にかけているからね」というメッセージを送る。家にいても先生の声を聞けるようにすること、で、学校と家庭との間の境界を薄めていこう、と考えています。そして、それは子供達の心にもそれなりに響いているようなんです。しかし、これとて家庭の方でそれなりのフォロー

があればこそ効果を上げているわけです。しかし、今後はその程度では対応できなくなってくるかと思うのです。

上田 それはよくわかります。たとえば、学校の先生になっっている友達がいって、話をきくとクラスにそういう不登校の子が何人もいる。そうするとその子供のケアだけでクラスのことを何にもできなくなっちゃうっていうんです。保健室登校の問題もありますし。

だからもうガタがきている日本のシステムを変えなきゃいけないんだけど、どこから手をつけていいか、わからないでいる状況だと思うんです。学校側だけじゃなく、もちろん親も参加しなければいけない。でもそういう意識のない親もたくさんいます。

陰山 そうですね。今、そのところに手をかけなきゃいけない時期に来てるんだと思います。自由な校風が特色のある私立学校の先生と話す機会があったんですけど、その学校は子供達に強制しないらしいんです。実際そうやって立ち直っていく事例があったので、不登校の子がどっと集まってきているらしいんですね。クラスに三割くらい不登校傾向の子がいる。そうするともうその子供達のケアで手一杯なんだそうです。もっと積極的な私たちの教育をやるうと思っても、結局ケアで終わってしまう。これは対策的な教育をしていても対応できない段階に来ていることを意味していると思います。

そもそもゆとり教育というものがなぜ出てきたかというと、これは突き詰めれば不登校

対策だったと思うんです。公教育にとって学校に来ないというのは、実は一番やっかいな問題でね。来てくれれば何とかしようもあるけれど、来なかったら打つ手がない。来てもらうためには、もうハードルを下げるしかないわけです。僕はゆとり教育とはある面そういう取り組みだと思っています。ところが、ハードルを下げたら子供達は跳びやすくなったのではなく、ハードルに合わせて足の力を弱くしてしまった。結果、ゆとり教育のマイナス面ばかりが目につくようになってしまったのではないでしょうか。

上田 不登校の子に何が何でも学校に行きなさいという強制のメッセージは有効だと思いますが、逆に親が率先して学校を否定するような姿勢でもいけないと思っています。小学五年生から中学三年生まで不登校を続けている子の親御さんは、学校など行かなくてもいいと言っています。じゃあ、どうやってお子さんは食べて行くんですか、と聞いたたら、コンピュータをやるからいいんです、と言うんです。コンピュータといってもプログラミングなどのレベルでなく、単にインターネットができる程度ではどうにもなりませんよ、と言いましたが。また驚くことに、未だにお母さんは子供がどこに行くにもくつついていく。

陰山 母子密着が強すぎてなかなか自立できないでいる子の話を聞くことはあります。けれどやっぱり理解できない、本当に原因がわからない不登校のケースもあります。そうい

うふうに考えていくと、僕らが普通に当たり前にやっているものが、ある子にとってはごつそり抜けていて、その部分を僕らは十分理解できていないから、慌てちゃっているんだと思うんです。そのところに合わせて教育もやっていかなければいけない。

ただ現実問題、不登校や引きこもりなど当面そういう子が出てくることは想定してかからなきゃいけないわけです。だから社会にセーフティネットを張って、フリースクールやフリースペースといったところに頼らざるをえない。そういうつなぎ役が社会的にもっと必要だと思います。

上田 確かに徐々にフリースクールは認知されてきています。NPO法人の申請をして助成金を得るところもあります。しかし、いろんな意味で地域社会との連携があつて、世界を広げていかないと限界が見えてくるのも早いと思うんです。だからうちでは風通しを良くしようと、学園で教える以外に職業を持つていらつしやる方に先生をお願いしています。そういう学校から周りの地域への広がり、という面では先生のところはどうでしょうか。

陰山 うちが約八割の子が農家の子なんですけれど、そのうち稲刈りを手伝ったという子はほんのわずかしきないんです。つまり、学習ってものが、頭と目と耳だけになってしまっている。身体でやっていない。体験が足りないってことはゆとり教育でも言ってますけれど、それは確かにそうなんですよね。皮膚で勉強していない、というか。暑ければク

ーラー、寒ければヒーター、それで身体が身体として機能していない。それは都会の子も田舎の子もいっしょなんです。「何でこんな寒い日に学校行かなきゃならんのだ」とか、その中でみんな学校へ行く意味だとかを考えるわけですけど、今はちよつとしたことで親が車で送るんですよ。雨の日になると高校なんか前にずらーっと車の列ができるといいますから。それはむしろ都会よりひどいかもしれません。

とにかく少しでも子供が躓つまずかないようにしてしまおう。だから、上田先生がおっしゃるように、自分で決断して、自分で選ぶということがない。だから傷つくことがない。

上田 だから転んでも立ち上がって、自分の傷にこうやって唾をつけるとか、もつとひどかったら近くの家でおばさんちよつと洗わせてくださいとか、そういう考えが思い付かないんですよ。

陰山 それで僕はもう傷つきなさいって言います。本当に今度の僕の学級は傷つきやすいガラス細工ばかりでね。だから僕は時にはこつそりいじめてあげるんですよ。何か困っているとき、「ぼちぼち泣く時間じゃないの。泣くんか」と言ってる。そうすると、こらえて、「うーん」という顔してますけれど（笑）。

上田 そこで先生は泣かしちゃいけないとか思っではいけないんですね。すると結局、先生も生徒もある程度距離を置いた方がいい訳ですね。

陰山 そうです。同化しちゃうからいけないですよ。この前ハロウィーンの国際交流パーティーに行った小学五年生の女の子がね、福笑いのゲームをやるのに慌てて行ったもんだから使うセロハンテープを忘れてきちゃった。そしたら会場で、うわーって言ってパニック起こして泣き出したんです。それを見て、僕はすつと行つて、「君は幼稚園の子？」と言つてやったんですよ。そうしたら泣きやみましたね。だから、やっぱりはつきり言つてやる必要があるんですね。泣いたら慰めてもらうことが癖くせになつていては駄目だめなんです。

上田 そうですね。

陰山 結局教育の最終目標つて自立じゃないですか。そのためには苦しい場面もあるんだ、そのへんにユートピアはないんだということを最初知っておけばどうつてことはないんですよ。不思議なのは、どんな大人だつて傷つかないで成長してきた試しはないのに、子供のこととなると途端に失敗しないように、傷つかないようにと面倒をみてしまう。

上田 子育ても教育もそうですが、本当にあらゆるものが、一に戻らないと駄目ですね。足元から改革していかないと、ということですね。

陰山 単純に夕方七時に父ちゃんが帰つてきて、みんなでいっしょに食事をする。それを例えば全国でバロメーターとして調べればいいと思う。会社が協力するのか、しないのかつて。もちろんそれで経済活動ができるのか、というお叱りを受けるかも知れませんが。

毎日でなくても、こういったことを真剣に取り組んで欲しいと思うのです。そうしなければ、子供の存在を許さない社会になるわけだから。今後もし少子化は続き、日本の国力も弱まるでしょう。まず子育ての喜びを思い出さなきゃならない。何年か前に父の日に、当時の文部省が財界に対して、「お父さんを家庭に返して下さい」とやったんですね。僕にはなかなかやるじゃないと思った。だから僕はね、決して文部科学省批判をするつもりはないんですよ。批判しても意味はない。それよりもまず自分が提案すること。わが子を良くしましょう、まず自分の学校を良くしましょう、まず自分たちの地域を良くしましょう、っていうそこからしか始まらないだろうな、と思います。そこのことだと思います。

上田 もう一度一から出直しですね。

陰山 少子化の一・五人というのは破壊的でしょ。だから僕は教育問題とは何ぞやと言ったらまず出生率なんです。学校から子供がいなくなる、このことの背景にある意味を噛みしめていかなきゃいけないと思います。

上田 そうですね。それと各親、各先生がいいものはいいと頑固親父、頑固先生を通して欲しいと思います。うちの学園でも基礎学力定着の時間割を取り入れています、これからも陰山先生にご指導いただきたく思います。

了

あとがき

大学卒業後、留学ならぬ遊学を終え帰国した私は六本木にあるスエーデンの商社で働き始めた。英語力はいまひとつだったが渋沢栄一の「お金は仕事の垢^{あか}」という言葉信じていた私は「給料よりも、一番忙しい部署で働きたい！」と答えたことがスエーデン人の社長に気に入られ、パーチェスマネージャの秘書として働きだした。そして言葉や習慣の壁にぶつかって苦勞している二人のスエーデン人のボス達を見るにつけ、「これは何とかしなければ」と働きながら日本語教師の勉強を始めた。そして一年後、二五万円の給料から五万円の給料になって日本語の教師になった。今から二五年前のことだった。

自分が今まで習ったり、感じたり、経験したりしたことのすべてが、日本語教師につくためのものだったのかと思えるほど、外国人の生徒を理解したり、教えたりすることに役立った。何とも説明できない不思議な快感と、何かこれから起きそうな運命的な予感を感じ、教室から教室を踊るように教えてまわった。

「今から四五分あげるから教えてみませんか」と見学させてもらった大学の授業で突然言われ、びっくりしながらも、勉強させてもらうつもりでやらせてもらった日本語の授業。それが縁で、そのままスイスに七年近く住むようになった。それと同時に日本人学校の補

習校で小学校の一・二年担当の教師にもなった。

先生には絶対ならない。もしやるなら六〇歳を過ぎてからと決めていたのに、その半分の年齢の三〇歳で思いがけずに教師になった。それも職業として確立もされていない日本語教師に。それからの私は日本語の教師としてタイや香港やイギリス等の国に行き、色々な経験を積んできた。そして日本語教師として上田メソッド（教授法）を確立してきた。私の人生はこうやって過ぎていくことを疑いもしなかった。

しかし、ヒヨンなことから思いがけずに、不登校児や生き方の分からない子供達の学校をつくることになったのは、日本語教師を生業にしてから約二〇年後の平成九年の一〇月。生徒は大学を六ヶ月で中退した一八歳と、小学校の五年生位から学校に行っていないという一六歳になる女の子の二人だった。そして、現在この学園は無事五年目に入った。

人生は分らない。誰にも予測はできない。私は決して優れた人間でも、何でもない。普通の日本語の教師だ。ただ私の人生にはいつも、素敵な生き様をし、楽しそうに生きている人達が沢山いた。彼らは決して有名人でも何でもない。本当に普通の生活をしている市井しせいの人達なのだ。その人達をサンプルに一生懸命自分のできることをやってきた。

今教育が大きく変わらなければいけない時代になってきた。しかし公的機関を動かそうにも、日本人の考え方を一生懸命変えようにも、それは簡単にはいかないのが現状だ。し

かし、変わらないからと言って変わるまでは待てない。子供達はその間も成長し続け、悩み続けるからだ。一回しかない彼らの人生を犠牲にはできない。だから、気が付いた人達ができることからやり始めればいい。

何もすごいサンプルを見せることはない。親も教師も大人も子供も、人間いつも間違いを訂正しながら生きているのだ。それを見せればいいのだ。失敗から毎日生還せいかんし、それから学んでいるということ。それが生きている先輩が後輩にしてあげられることだと思えるのだ。いつの時代も、いいものはいい。悪いものは悪いということ、それとどんな時代になろうとも、一人で逞しく生きていける知恵があれば大丈夫だと思えるから。

今、人々は子供の教育で悩んでいる。自分の生き方で悩んでいる。でも悩むだけでは解決しない。皆で暗中模索しながら、悩みながら手を取りあって前進していきたいと願っている。自分のできることから始めることで。

〔著者略歴〕

上田早苗（うえだ・さなえ）

◎1946年生まれ。外国の新聞社勤務を経て、日本語教育のための上田メソッド（教授法）を確立する。日本語教師として日本、イギリス、スイス、アメリカ、タイなどで海外勤務を経験。通算20年以上、外国人の教育、日本語教師の養成に携わる。チューリッヒ日本人学校の主任教師として約7年間勤務。混血児のための国際日本語幼稚園を約5年間主宰した経験もあり、国際教育において高い評価を得ている。

◎1997年にフリースクール上田学園を設立。魅力のある教師を招き、不登校など生き方に悩む子供達の教育に打ち込む。レッツ日本語教育センター代表取締役。

上田学園

〒180-0004 東京都武蔵野市吉祥寺本町2-11-8 4F

office@uedagakuen.com

<http://www.uedagakuen.com/>

骨太の子育て

2001年12月27日 第1刷発行

著 者——上田早苗

発行者——八谷智範

発行所——株式会社すばる舎

〒170-0013 東京都豊島区東池袋3-9-7 東池袋織本ビル

TEL 03-3981-8651（代表）

03-3981-0767（営業部直通）



FAX 03-3981-8638 <http://www.subarusya.com/>

振替 00140-7-116563

印 刷——中央精版印刷株式会社

落丁・乱丁本はお取り替えいたします

©Sanae Ueda 2001 Printed in Japan

ISBN4-88399-174-1 C0037



9784883991747

ISBN4-88399-174-1

C0037 ¥1500E



1920037015008

定価: 本体1,500円 +税

